

---

# 月に吼える

maisén

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月に吼える

### 【Nコード】

N3056Y

### 【作者名】

maisen

### 【あらすじ】

とある小さな山間の里。そこは人ならぬ者たちの住む里だった。ある月の綺麗な夜、一組の夫婦の間に、一人の男の子が産まれた。そこまではどこにでもある話。ただ、他と少々違っていたのは、その子は半分人間、半分「人狼」の血を引いていた事。そして、何よりも…彼の名前は「忠夫」だったのです。

某所で昔々に投稿させて頂いていた物の改訂版です。色々あってどうしても時間が取れなくなり、更新途絶していましたが、今度こそ

完結までこぎ着けたいと思います。

## 序幕

「あつ！ふぎやああ！」

月が出ていた。

まあい丸い、綺麗な満月。

最も心地よく、最も強く輝く月が。

「お生まれになりました。元気な、男の子ですよ」

月の祝福よあれ、と思う。

「男子か…なんと大きな鳴き声か。末は立派な男となるな」

そんな物が無くとも、只幸せであってくれとも思う。

「さあ？でも…」

その微笑が、消えることの辛さを。失うことの悲しさを。生きる事の苦しみを。

「男の子だったらって、考えてた名前があるの」

月よ、神仏よ。叶うならば七難八苦を与えたもう事なぞ無かれと願うのは、子を得た親の卑小な願いか。

「…　　ってつけたい。この子の名前」

己の人生の中で、それらこそが良き教師であり、同時に忘れられない疵である事を知っているからか。

「か…。悪くない」

例え、その願いが叶わぬとしても。いや、叶わぬと知っているからこそ。

「ふふっ」

そう願うことは。

「なにが可笑的い」

「久しぶりに見たわ。貴方の、そんな顔」

「む」

我が子に幸せを願うことは、我儘だとは思わなかった。

「それで、何故？」

ならば、これが最初で最後の息子への想い。

「ふふっ。…真っ赤」

「名前の意味は！？」

「…はいはい」

これは、願いでなく、誓いでさえなく

「よ。そんな子に育って欲しいな、って」

そうやって生きていけという、想い。

「…ふむ。いい言霊だ。ならば、息子よ」

神に頼るのではなく。悪魔に縋るのでもなく。只、己の力で

「お前は今宵今晚、今この時より」

その未来を掴み取れ！

「犬飼 忠夫と名乗るが良い！」

「ね？ね？ うちの旦那、ああ見えて可愛いでしょ？」

「ええと、私に聞かれても…」

「…顔が怖いから」

「外でよく聞く『ぎゃっぶもえ』と言うやつ？ 私には理解しかねるわ」

「旦那さん目つき悪いからね！」

「あつ、赤ちゃん大丈夫ですよね？！ 食べられたりしませんよねっ？ ねっ？！」

月に見せつけるように、あるいは捧げもののように両の手で赤子を高々と掲げた男の尻尾が、それまでの勢いを忘れたように左右の運動を止め、ピン、と立てられた。

ゆっくりと振りむいた男は、宝物を抱えるようにしっかりと赤子を抱えたまま、こめかみに血管の浮いた怒りの表情で大きく口を開け、

「きつ！ ……さまら静かにせんか」

声を急速に萎ませ、だが視線だけは睨みつけたまま器用に小声で怒鳴りつけた。

『ぶフおっ！』

一斉に吹き出した男衆と、にやにやしながら赤子を受け取る為に細い手を伸ばす一人の布団から身を起こしている女性、そしてそんな女性とその旦那を見て、なんとなく分かるけど、でもなんだか納得がいかない！ という微妙な表情を浮かべて悩む女衆。

「……っ！」

男は苦虫を噛み潰して吐き出すに吐き出せず、のど奥で唸り声を上げながら、しかしゆっくりと赤子を妻の手に渡す。

対して男衆は、そんな食い殺さんばかりの視線を受けても、一応自重はしているのであるが、畳に爪を立てたり必死な表情で口を押さえたりと様々であるが、一様に笑いをこらえるのに一苦労どころでは足りない様であった。

「……暖かくして、ゆっくり休んでおけ。拙者、ちと用事が出来たからな」

「はいはい、いつてらっしゃい」

賑々しい雰囲気の中でも、生誕の証明である泣き声に全精力でも使ったか、はたまたもともと図太いのか、ぐっすりと眠る赤子を抱え込んだ妻の頬を見た目によらず優しく一撫でした男は、怒気を発しながら振り向く。

「…ぬ？」

男衆は誰も居なかった。赤子を見に来た比較的若い女衆が腕を組んでいまだ悩んでいるのを横目に見ていた年嵩の女性が、呆れた様に開かれた襖の外を指さす。

「やー！ めでたいのうめでたいのう！」

「酒が吞める吞めるぞー！ 酒が吞めるぞー！」

「酒蔵開けるお！ 朝まで宴会だあつ！」

「…酒が足りない。確か長老の所に良いのがあつた」

『いよっしゃあつ！』

「またんか馬鹿たれどもがあつ！」

宴会に足りない酒と肴を取りに 盗りに？ 駆け出した男たちを、真剣を抜いた男が一人、殺気を撒き散らしながら追いかけていく。

「もう。…貴方は、どんな子に育つのかしら。ねえ？」

そんな囁き声が、いつの間にか目を覚ましていた赤子に、小さな手と、小さな耳と、まだまだ細い尻尾を持った息子に優しくかけられて。



赤子は、言われた意味も分らず、しかしその両の瞳にまあるいお月さまを映しながら、やがて空腹を訴えて火が着いたように大声で泣き出したのだった。

その後、さして大きくも無い里の某所では、自宅でそわそわと報せを待っていた老人と、追いついた剣鬼に挟み撃ちで一人残らず殲滅された馬鹿達がいたのだが、何事も無かったかのように朝まで宴会が繰り広げる様子が見られたそう。

それは昔々　　と言うほどでもない過去のお話。

1匹の人狼と、1人の人間の女性の間に元気な男の子が生まれた、ただそれだけのお話。

彼らがどのようにして出会ったか。人間嫌いの人狼をどうやって口説き落としか。

彼らには彼らの物語。誰にでも何かの物語。

これから語る物語は、「犬飼 忠夫」の物語。

人間と人狼の間に生まれたこの少年は、これからどんな物語を紡ぎ上げるのか？

いやはや、かのバチカンの地下に存在すると言う予知魔「ラプラス」でもない私には、全く予想もつきません。

只一つ、私が言えるとすれば、そう、「彼に平穩は似合わない」といったところででしょうか？

はてさて、「今度の」「彼」はいつたいどんなトラブルに巻き込まれてくれるのやら。

いまから楽しみで成りません。

え？私ですか？私など気になさってもしょうがないですよ。

・・・おやおや、もうこんな時間だ、そろそろ今回はお別れのようで。

また会えると、思いますか？

それでは、良い夢を

## 序幕（後書き）

むかしに某所で投稿していたmaisenと申します。仕事が忙しくなり、どうしても時間が取れなくて更新できなくなっていました。が、いつか続きをと圧縮して保存していたものがHDの整理中に発掘されました。

あの頃に比べれば随分と余裕ができたので、今度こそは、と、改訂版ではありますが、再びキーボードをぽちぽちやらせていただきます。

## 第一話

時は夕食時、場所は人狼達の住まう里のとある家。

やや小さめのちゃぶ台の上に、いかにもただ切って焼いて適当に調味料をかけました、といった風情の漂う塩気の強めなおかずと、山盛りになった御飯が鎮座ましましている。

それをテレビを横目に見ながらがつがつとかき込む男が二人いた。

一人はそろそろ40代に差し掛かるうかという、着込んだ和装の上からでも鍛え抜かれた身体が見て取れ、しかもその目つきの悪さという顔の怖さと言い、泣く子も逃げると近所でも評判の男性だ。

その目の前にもう一人、口の中に残った焼き魚の骨をばりばりと齧りながら、古めかしいテレビに向かって足を伸ばし、しかし頭を刀の峰で叩かれ目的を果たせず、頭を抱えて悶えているまだ10代半ばか少し超えたか、と言った年頃の青年がいる。

見た目の第一印象で言えば、どこか抜けていて、なんとなく若さというか色々と持て余していそうで、しかし身体にはそこそこ引き締まっておりまだまだ発展途上というイメージが強い少年である。

あまり似ていない親子だ、とか。

父親に似なくて良かったな、とか。

あいつ子種まで尻に敷かれてたんだなあ、とか。

近所ではそんな感じに語られるこの二人は、血のつながった親子

であり、父子家庭の父と子である。

「…忠夫よ」

「つつあゝ！？　なんだよクソ親父！」

ゴキン、と堅い物が少し柔らかめの物、はつきり言えば金属の塊でそれなりに重い刀の峰が、人の頭部に落ちる音がした。

ちやいまんがな！そんなわけあらへんやろ！

ふおおお…！

テレビから流れるあまり売れていない芸人の滑り気味な漫才と、何度も流れた乾いた効果音の笑い声と、人が一人畳の上を転がりながら悶える声を聞き流しながら、クソ親父と呼ばれた男性はなんでも無かったかのようにお茶を一啜り。

しばしの間を置いて。

「お前ももうすぐ大人だ…霊刀は出るようになったのか？」

「んにや。欠片もでね　よ」

頭を摩りながら、しかし何時もの事なのか、僅かに眼の端に涙の後を残しながらも、忠夫と呼ばれた少年は最後の一口をお茶で流し込み、空になった食器を重ね、そのままテレビに向かって座り込んだ。

父親はいたって真剣な声音で話しかけるも、上の空と言うか聞いちゃいないというか。

まるで学校の事を聞く父親と、面倒くさそうに一応答えは返している子ども、と言った何処にでもあるような食後の風景である。

ワハハハハ　なるほどなーってそんなわけあるかい！

「刀の腕は少しは上達したのか？」

「おう、隣の犬塚のおっちゃんの場合は避けれるようになったぞ。反撃した瞬間カウンター喰らって意識飛んだけど」

「犬塚が？珍しいな、あやつが稽古とはいえお前が気絶するほどの……」

「……いや、その、まあ、な！」

「またサボっておったか」

冷や汗まじりに誤魔化そうとした少年の後頭部に、呆れの多分に混じった視線が突き刺さる。溜息まじりながら、とりあえずまた攻撃されることはなさそうだと安堵して、忠夫は小さく息を吐いた。

「……まあいい。それよりも忠夫よ」

「……なんだ、親父」

声の重々しい雰囲気、思わず振り向いた忠夫の目に、真剣な表情の父が写り込んだ。腕を組み、目を逸らさぬままにじっと熱のこもった視線を向けられた忠夫は、だがしかし、怯むどころか、またか、と言った表情を浮かべる。

「やきゆうをみせろ」

「ことわる」

「なぜだっ！」

「何故もクソもあるかいっ！ボールが飛ぶたびに尻尾振るな！埃がまうんじゃ！」

「…むう」

ああ、男所帯の切なさよ。

妻を亡くしてからというもの、それなりに気を使って掃除はしているつもりではあるし、たまに天気の良い日は布団もきちんと干すようにはなった。

しかし、やはりというかなんとというか。

一昔前のドラマなら、姑あたりが窓の棧を指でついとやれば、うつすらと埃が積もる程度の掃除でしかない。男二人ではそれが限界だったのだ。まさに「四角い部屋を丸く掃く」的な。

顰め面で沈黙した父を、やれやれ、と忠夫は肩をすくめて鼻で笑った。

「そんなだから狼じゃなくて犬だとかいわれる」

瞬間、忠夫の第六感とか生存本能とか慣れとかそのあたりの感覚に、はつきりと死線が見えた。宇宙世紀なら額のあたりに閃光が走っていたかもしれない。

本人も意識しない動きで跳ね上げられ、重ねられた両の掌は、その間に見事に刀を挟み込んでいた。今度は峰ではない、しっかり刃が向けられている。

「うおおおおっ！いきなり切りつけるんじゃないやねえクソ親父！！」

「犬ではないっ！！誇り高き狼だー！！」

「だああっ！聞いちゃいねえ！」

月の明るい夜。犬飼家の食卓は、騒がしくもドメスティックなバ

イオレンスが飛び交う戦場と化したのであった。

しばらく後、ボロボロになっている居間で。

「つてて。ちくしょー！親父の奴、本気でやりやがって、つてあー！TV壊れてるじゃないかっ！」

ガサリ、と音を立てて瓦礫の中から動き出したのは、何処にでもいそうな　と言っには、見た目が奇異に写るのは間違いない。彼には大きな白い尻尾と犬の耳・・・いやいや、狼の耳がついているのだから。

とまれ、ボロボロの格好のまま彼は意外と元気に歩き出すとやはり、その歩みは全くなんの傷も負っていない健康そのものに見えた　彼の部屋の襖を空けた。

「・・・あゝあ、これで外と中を繋ぐ最後の線も切れちまったか。さーて、どうすっかな」

畳の上にもう何年もそのままです、と言った感じに引いてある草臥れた布団の上に寝転びながら、彼は、忠夫は考えていた。

（母上が死んでから4年・・・。4年我慢か。母上の妹の百合子さん・・・おばさんと言ってマジで殺<sup>や</sup>られかけた。間違<sup>う</sup>ってないのに。何でだ？　ともかく、連絡はついた）

布団に寝転がったままで、部屋の隅にちょこんと置いてあるバッグに視線をやる。

（出て行く準備はできてる。外の人間が着てる服も手に入れたし、



少しだけお金もある)

視線を天井に戻し、そのまま屋根を突き抜けて高く、高く　そこにある月を見るかのように。

(決行は次の新月。明け方にこそつとでてくのが一番楽やな)

体が疼く。ムズムズと、今から楽しみでしようがない。外の世界、2度目の世界。初めて覗いたのは母に連れられてであった。百合子さん以外の「母の家族」とやは、こちらを見る目が嫌悪に溢れて、二度と会いたくないとしか思えない人たちだと子供心に思ったものであったが。

(それでも、外は外だ。狭い里じゃなく、1日中歩いても端っこになんかつかないくらい広い場所。)

なんとなく体の中で湧き上がる思いが溢れそう、布団から起き上がると頭でも冷やすつもりで縁側に立ってみる。

まだ幼かった頃、目的は違えど今考えている事と同じことを全く計画性もなくやろうとして、あっさり迷子になった3年前の自分を思い出す。

(あんどきやほんとに怒られたっけか。親父に、犬塚さんと奥さん。長老や他の皆も)

狼は群れを大事にするものだ！その仲間が大変なことになっているのかもしれないのだぞっ！心配しないわけがなかるうがっ！！

(流石にそっこで謝ったんだよなあ。長老のあの言葉も効いたけ

ど  
)

兄上、置いていくの？シロを、おいてっちゃうの？

(あんな目で見られちゃあなあ　年上としては、謝らん訳にはいかんだろ)

記憶に残るのは、3年前の隣の夫婦の子供の顔。2歳年下の元気いっぱいの人狼の子だ。

昨日も散歩に誘いに来たが、あの顔はどうにも記憶に残っている。

(すまん、シロ。だが、今回お前を連れて行くわけにはいかんだっ！)

なぜならば

(俺は…俺はっ！)

…嫁が欲しいんじゃないあああああっ！…！　　ってなあっ！…！思いっきり声に出してもうたー！」

…若さゆえのあやまちと言つか、持て余す。

「まずっ！決行か？しらばっくれるか？ちくしょー！失敗し「ワオ  
ーン…」…ん？」

どこからともなく響いてくる遠吠。いや、何処からともなくではな  
く

「拙者もー！！」

「拙者もー！！」

「腹減ったー！！」

「嫁が欲しいぞー！！」

「嫁さん持ち爆発しろー！！」

「なんで人狼は女性が少ないんだー！！！！」

「ばっきやるー！！」

「肉くいてー！！」

「ワォーン！！」

「嫁が欲しいよー！！」

里中の独り者達の家からであつた。

（…ああ、同士達よ）

なんとなく涙腺が緩んでしまう忠夫である。  
所々に混じっている食欲優先の遠吠えは綺麗に無視されてはいた  
が。

そして月日はあつという間に流れ。

「さて」

あの後里中で近所迷惑の題目のもとに、妻子持ち男衆VS独身が開催され、さらに煩くなつた所で女衆が参戦して独身勢が鎧袖一触に蹴散らされ、いちやいやする夫婦達を地べたに這いつくばった（色んな意味で）負け犬たちが血涙を流したりと色々あつた。

その次の新月の晩。忠夫は最後の準備をしていた。

「それじゃ、行つて来るよ、母上」

返事は返らない。この世界でも、よっぽどの例外でもない限り成仏した者には会えない。

それでも、挨拶はしていくべきだと思つた。

「何時帰ってくるか分からないけど…それでも、帰ってくるから。来年の命日には帰れないかもしれないけど、許してくれよな」

最後まで、ほんとに最期の最期まで笑顔で逝つた母であつた。それ以外を思い出しにたくなかった母であつた。

「  
　　いってきます」

だから。

出かける挨拶は、精一杯の、笑顔を見せて。

「さつてと。長老は犬塚さんちで今朝送ったお酒でも飲んでるはずだし」

ちなみにそのお酒、彼の父が床下に、天井に、壁の中にと隠していたものの全てを見つけ出してこっそり長老宅の前に「おすそ分けです、犬塚と一緒にどうぞ　犬飼より」と手紙をつけて置いてきた物である。

別に嘘ではない、が、彼の実父にばれたときが・・・まあ、それは置いておこう。どうせしばらく帰るつもりもないし、帰ってくる頃にはほとぼりも冷めているであろう。多分。おそらく。きつと。めいびー。

「ということは、シロにはしばらくばれない、はず」

もしくは、とっとと布団にもぐりこんでいるか。大人の酒盛りなんて子どもにとっては煩いし酒臭いしで面白いことなど殆ど無いのだ。

彼女には申し訳ないという気持ちはある。が、今回ばかりは、そ

う、今回ばかりは彼女もいっしょに、と言う訳にはいかないのだ。  
主にコブつきは勘弁と言う意味で。

「親父は玉葱食わせたからしばらく動けないはずだし」

下手すればそのまま動かなくなりそうではある。

犬がタマネギを食べると、赤血球が破壊されて、急性の貧血や血尿などを引き起こす場合があり、場合によっては命にかかります。間違つて食べちゃった時はすぐに獣医まで！

「今日の見張りの位置は確認済み、と」

人狼の超感覚が今回のミッションで最も障害になりえる物ではある。

が、基本的に責められる事を警戒するのが見張りである為、外からは警戒が強くとも内からはそこまで注意を払っていないと思える。身体能力も（逃げ足限定ではあるが）自信はある。最初のスタートで突き放してしまえば、追いつけない公算が高い。

だがしかし。

「・・・よし、いくぞっ！嫁探しじゃあっ！！ ひゃっほー！」

おい、何か聞こえたぞっ！！

あっちだ！あっちからだぞ！

よし、回り込め、挟み撃ちだ！

！

「ぎゃーっす！！またやってもうたーっ！！」

いかなる計算も計画も、本人がアホでは最初の一步で台無しであった。

はてさて、先立って見つけたこの世界。そろそろ歯車が動き出したので覗いてみれば、やっぱりその中心にいるのは横島 いえ「犬飼 忠夫」ではございませんか。この存在、全く、よほど世界に好かれているようで。

時の流れは早い。彼が16歳、・・・そう、少年から青年と呼ばれ方が変わるくらいには成長した頃のようにです。はてさて、どんな騒ぎが起きることやら。なんと说着ても、彼は何処まで行ってもトラブルに巻き込まれる典型的な「存在」ですからねえ。

## 第二話

「どこの馬鹿だこんな時間にこそとつ！」

「犬飼さんとこの忠夫だよっ！」

「なにい！？ あの野郎、親子揃って外で嫁を見つけるつもりだなっ！」

「まさか、いくらなんでもそんなアホな理由で…畜生あいつアホだった！」

「そんな羨ましゴホンっ…けしからん理由で黙って里抜けとは！」

「全くだ！ 何故拙者たちも誘わなゲホンゲホン！ …抜け駆け野郎を許すなあッ！」

『応っ！！』

新月の為月明かりも無い暗闇の中、怒声と罵声、しかして中身は殆ど嫉妬の声を上げながら、十数人の男たちの声が響き渡る。理由はどうあれ士気が跳ね上がった彼らは、一部の呆れの視線も気に留めず、たいまつ片手に山中へと駆け込んで行った。

残った数人の男たちは、そんな彼らに同情とも憐憫ともつかない感情を抱きつつも、とりあえずは、と現在まさに脱走中の少年の保護者と、彼ら自身の上司たる長老に報告だけしておくか、と目線で頷きあい、踵を返す。

山狩り真っ最中の男達とは違い、むしろどこか楽しむような、応援するような雰囲気をもった彼ら。余裕ともとれるその表情の源となっているのは、きっと家で待つ妻子なのだろう。

ぶっちゃけ、山狩り参加者の全てが独り者。この辺、馬鹿騒ぎの中でもある程度は自重できるかどうか、それが嫁をゲット出来たか



出来なかったかの分かれ目だったのかもしれない。

その頃、里の犬塚宅では長老と犬塚家の父が差し向かいで盃を交わしていた。外の喧騒が聞こえぬわけでもなかりうに、いたってのんびりとした様子である。

長老は、なみなみと注がれた酒盃をちびり、と一舐めすると、聞こえるかどうかと言った小さな声で対面の男に話し掛けた。

「ようやく決心しよったか。あやつに通行手形を渡したのが一年前。よもやここまで待つとは思わなんだよ」

40代半ばの、引き締まった相貌を持つ男と、齢八十とも九十とも見える老人。その二人が交わす言葉も少なく、只、杯を重ねる様子は一種儀式にも似た雰囲気がある。

「…分かっておったとも。あやつが里を出たいと願っていたことは、しかし、しかした。あの子もかわいい孫のようなもの。せめて群からはぐれても生きていけるだけの力を持つまでは、と、そう思っておった」

それまで仏頂面だった表情を僅かに綻ばせ、

「三年前じゃ。迷子になって、やっと見つけ出して、ひたすらおびえているものかと思えば」

とうとう堪え切れずに吹き出しながら、

「くくつ 『楽しかった。友達もできた。それにずっとずーっとひろいんだよ！？なんで皆外に出ないの？』か……。感じてしまったよ。もはや、この子は絶対に止まらん、止められんと、な」

それでも瞳に寂しさを秘めながら。

「この年になつて、ああいう輝きを見せられると言うのは、堪えるわ。自分が化石のように思えてしまった。もはや変わらぬ、変化できぬようになってしまったと、な」

更に、その奥にまた別の感情を秘めながら。

「寂しくもある。じゃが、楽しみじゃよ。老い先短いこの身に、いったい何を見せてくれるのか。もはや、ワシ等では想像もつかん。・先が見えないことを楽しみだと思つのは、何時振りかな？」

人は、それを、その感情を。

「頑張れよ、我が」

きつと『憧れ』と言うのだろう。

「可愛い孫よ」

里の人狼達全てから父とも、祖父とも慕われる老人にとって、里の人狼達もまた子とも、孫とも言えるのだろう。そんな、優しくも励まし、背中を強く押す様な、しかし心配がほんの少し混じった声音ごと呑みこむように、老人は静かに酒盃を呷る。

「…どうした、犬塚。お主、この酒を楽しめんと言つのは酒に対する冒瀆じゃぞ？」

「…ヒック。」

「おまえ、どーも酒に弱いのは治らんの」

「しろおゝゝ、おうつ、おうつ。お前はっ、嫁になぞ出さんぞおおゝ。ぐしぐし」

「今日は泣き上戸かのお」

その一言だけで興味が無くなったのか、両目からだくどくと涙を流し、酒瓶に熱烈な接吻を繰り返している、いい歳こいたおっさんを視界から外す。

と、その耳に、どたばたと廊下を駆ける数人の足音が届いた。

「む？」

「ヒック？」

けたたましい足音と共に、先ほど形だけでも報告を済ませておくか、おっとり刀で引き揚げにかかっていた男達がなだれ込んでくる。

「騒がしいの。一人の若者くらい静かに送ってやらぬか」

そう、また新たに満たした酒をあおりながら静かに宥めすかすが、男達はそれどころじゃないっ、と集落の方を指さしながら、酷く慌てた様子でつかえつつかえ言葉を何とか絞り出している。

「ちよちよちよ長老っ?! 犬飼さんが!？」

「あー、知つとる知つとる。だから騒ぐでないと云つとろつが。む、ポチめ、相変わらず酒の趣味は良いのお」

「その犬飼さんが玉葱食べて逝きかけてますっ!」

長老の口先からアルコールの霧が生まれ、酒瓶を抱えたまま泥酔して眠りの世界に旅立っていた犬塚がその霧に包まれる隣の家で。

「沙耶…今逝く…」

1匹の人狼が亡き妻と再会を果たそうとしていた。

「わーはっはっは！！ 平安京にエイリアンの術ー！！」

人が4、5人は入ってもまだまだ余裕がありそうな広さと、這い上がるにはやや時間がかかりそうな深さ、飛び上がるうにもぬるぬると滑って邪魔をする泥が成人男性の腰のあたりまでは仕込んである、そんな落とし穴だった。

罠を作るつもりか、暢気に地面を掘り返していた標的を見つけて逃げ道を塞ごうと回り込んだハンター達は、まさかの落とし穴製作中と見せかけてすでに完成してました、な状況に気付かず、全員綺麗に嵌ってしまったのだ。

落とし穴に嵌ってから冷えた頭で考えてみれば、彼が掘り返し、周辺に積み上げていた土の量は、先ほどまで掘っていた穴に比べれば量が少なすぎる。

しかも、それが掘り返されて不自然になっている地面の様子を隠してもいると言う、一石二鳥な誘導に気付かず、そして今現在、ハインターであった者たちは、その身で大量にあった土砂が、一石二鳥どころか三鳥はあったのだ、と言う事を身を持って感じていた。

「ぎゃー！ 忠夫ー！！ きつさま、後で覚えてろよー！！」

自分たちごと埋め立てられる際に再利用されている、という意味で。

「忘れるまでは覚えといてやるよ。じゃなっ！ ここまで来て捕まってたまるかっ！！」

「ばっかやるー！！」

負け犬の遠吠えを背に、忠夫は鼻で笑ってそのまま逃走を再開した。

至近に迫った追っ手を発見した彼は、ゲリラ顔負けの罠の数々と、その機動力でひたすら追っ手を翻弄していた。

時には落とし穴に引っ掛け。

時には真っ黒に塗ったロープを足元に張り。

時には干し肉の中に匂いが漏れないように背脂で包んだ玉葱

を仕込む。

この様々な罠に引っかけり（特に最後）、追っ手はほぼ壊滅状態となっていた。

「ふっふっふ。情報を制す俺は戦いを制す！ 俺の方が鼻が鈍いからって、自分達の場所がわからんと決め付けたお前らの負けじゃー！！」

「クウーン」

「おお、ありがとな、タマ。お前の鼻のおかげで助かったよ」

その傍らには1匹の獣の姿があった。何を隠そう、3年前にできた「友達」とはこの獣である。

迷子になって、一人で途方にくれていたとき、何処からともなく現れて、慰め、食べ物を探してくれて、分け合って食べ、一緒に寝て、里に着くまで孤独を感じることなく過ごせたのは、この小さな恩人のおかげなのだ。

「さーて、あとはあそこに行って最後の仕掛けをしたら完璧だな。ま、もういらんような気もするけどなー」

そういつて、獣を肩に乗せ歩き出す。その獣のお尻からは、

「さあ、もう一頑張りだ！」

「コーン！」

小さいながらも見事な九本の金色の尾が、ゆらゆらと楽しげにゆ

れていた。

はてさて3度目の対面となりましたか。

相変わらず彼の周りには人外がこぞつて集まってくるようで。とはいえ、彼を慕うもう一人の少女が（彼本人は気付いておりませぬが）このまま黙っている？　そんなバカな！　それではあまりにも楽しくない！　ならば、彼女は追いかけるでしょう！　それが「彼」と「世界」の約束事ですから！

…まあ、別名「お約束」とも言われるものですが、そういつては、「風情」がないでしょう？  
それではまた会える時まで

良い夢を。

### 第三話

「ふいゝゝゝ」

ひとまず追手を撒いた忠夫は、土木作業で土と汗で汚れた身体を綺麗にし、ついでに匂いを消して追跡を難しくするために、三年前の大冒険で見つけた温泉に入っていた。

「あゝ あああゝ。風呂は命の洗濯じゃあゝ」

今宵は新月、月のない夜。

「おゝい、タマゝ？」

とはいえ、地上に光溢れる都会と違って、ここは元々自然の光だけの深い深い森の中。

「気持ちえゝぞゝ。入らんのかゝ？」

「グルルルッ！」

月は無くとも星の光が天を満たし、そして半分だけとはいえ人狼たる彼と、その相棒である彼女には十分すぎる光であった。

「うおっ！？何でそんなに怒るんだよっ！」

「グルルルッ！」

「わかった！わかったって！もう何も言わんからそのまま岩の後ろに居ろって！」

「…コン」



天然の温泉、当然のごとく露天風呂に肩までつかってリラックスする半人狼の青年と、一匹の、九本の尾をもつ狐を照らし出す。いくら追手は全滅させたとはいえ、まだまだ本命とも言える里の凄腕達はその姿を見せてはいない。ゆえに、油断することなくこうやって念には念を入れて匂い消しまで行っている。

「キューン」

「いゝい だな ハハン」  
「コン」

筈なのだが、緊張感の欠片もないのはきつと彼の性格ゆえなのだろう。

温泉から上がった青年、「犬飼忠夫」は、体をしっかりと隅々まで吹き上げると、先ほどまで身に着けていた服をリュックサックの中から引っ張り出したビニール袋に包み、口を縛って地面に置く。

「とりいでしたるは何の変哲もない洋服でござい」

続けてリュックサックの中軽い口調でジーンと一揃いの上着、肌着を取り出す。

「コン？」

どこかの岩陰から狐の声が聞こえたが聞き流しつつ

「なんとこれは今まで一度も袖を通したことのないまっさらの新品！」

「ごそごそその服を身につけ

「これで匂いで見つけられる心配は無い！完璧っ！いっつぱーふえくとう！」

額に真っ赤なバンダナを巻いて耳を隠す。尻尾は窮屈だがズボンの中だ。

「よっしゃ！偽装も完璧！」

おずおずと岩陰から顔を出した狐は、どこか未練がましい…まるで折角なのだから恥ずかしがらずに一緒に温泉につかれれば良かったな、と妙に具体的な感情を見せながら、青年の頭に陣取った。

一方その頃人狼の里では

「…ああ、沙耶。今そつちに逝くよ」

「待てー！早まるなポチっ！」

「薬ー！医者ー！衛生兵はまだかつーー！！」

「待ってください！他にも玉葱中毒の患者が多すぎて手が回りません！」

「くっ！だからあれほど拾い食いはするなと言っておつたろっが！」

「嗚呼、光が見えるよ…沙耶、もう少しだけ…」

「ポチイイイイイイ！！！」

「あゝゝゝ頭痛い。飲みすぎたか」

「何でお前はそんなに落ちついたりんだ犬塚ああああ！！！」

「長老…元気いいですねえ。拙者、二日酔いで、もーグダグダ」

「親友の危機だろうが少しは慌てんかこの薄情もーん！！それにまだ当日じゃあ！！！」

「あ、それじゃ一日酔い？語呂が悪いなあ　　って、うわたたたた！！　　こんなとこで靈波刀なんて振り回さないでくださいよ！！！」  
「これ以上怪我人を増やさないでくださーい！！！」

壮絶で混沌とした状況だった。ポチの口からは既に魂が半分ほど出ている。

「ふう。何とか全員峠は越えたか」

「ええ。何故か私は手当てして貰えませんでしたか」

隣の部屋ではいまだに呻き声が聞こえているが、とりあえず落ち着いたようである。

「バカと二日酔いにつける薬はないわい。それはそうと」  
「なんですか？　長老」

二日酔いで痛いのか、それとも長老の靈波刀が痛かったのか、頭をさすりながら、男は座ったまま隣に立つ長老を見上げた。

「お前の娘はどうした？この騒ぎで出てこないとは、よっぽど肝が座つとると見えるが」

ん？という感じで不思議そうな顔をした犬塚家の大黒柱は、

「っ！！！」

何かに気付いたのか、慌てて娘の部屋に向かって走り出し、いきなり部屋の扉を空け、

「…これはっ！」

布団の上に置いてある紙切れに目を通して、そのまま膝から崩れ落ちた。

「駆け落ちします。探さないでください。」

シロ

「シロオオオオオオオオ！」

人狼の里に、今宵最も悲痛な悲鳴が木霊した。

「クンクンクンクン…む、匂いが薄れてきたでござるな…」

父親が彼女の名前を叫んで今にも家から飛び出そうとし、慌てて

様子を見にきた長老とおもいつきりぶつかって二人揃って頭を抱えて悶えていた丁度その頃。

「甘いござるよ、拙者の鼻は追跡と狩りに優れた狼の鼻」

少しずつ忠夫との距離を縮めつつある一人の少女がいた。

「狙った獲物は逃がさんでござるっ!!」

「っ！　なんだ今のプレッシャーは?!」

「コン？」

急に乗っていた頭がきよろきよろと何かを探すように動いたので、驚いたのか頭上の狐は忠夫に疑問の籠った鳴き声を駆けた。

対して少年は鳥肌の立った両肩を両手でさすりながら、台詞に比べて警戒するでもなく変わらず不思議そうに周囲を見回している。

「あ、いや、なんと言つか…真っ赤な鎖が追ってくるというか、むしろ桃色のごつつい首輪？　というか」

「…コン！」

その台詞を聞いてどんな考えに至ったのやら、忠夫の頭から飛び降りた狐は、一声鳴くと先導するかのように忠夫を振り返りながら急ぎ足で駆けだした。

少し進んだ先で、急かす様にその尻尾が揺れている。

「…ついてこいつてか？」

「コン！」

「…まあいいか、行こうか、タマ！」

「キューン」

頼られて何処となく嬉しそうな顔をしたタマは、張り切って走り出した。

だがしかし、追跡者はその逃走する者達を嘲笑うかのように速度を上げていく。

行く手を阻む草木を薙ぎ払い、

「近いでござるな…」

殆ど崖に近い急斜面を駆け下り、

「もうすぐ…もうすぐ…」

そのままの勢いで大跳躍し

「見つけたでござるっ！」

その卓越した人狼ならではの運動神経で空中で体を捻り、着地地点を調整する！

目標地点は狙う獲物の眼前。そこに狙いを外すこと無く、勢いよ

く、だが殆ど音を立てることなく彼女は見事に着地した。

「兄上っ！！」

「うおっ！！ おまつ！！ ……シロかつ！！！」

突如空から降ってくるという荒業をかました銀の髪とその中に赤い一房の髪を持つまだどこか幼さの残る 数年もすれば、間違いなく美女となるであろう素材に恵まれては、いる 少女は、

「ぬあぜでござるかっ？！」

とりあえず主語もない色々足りない台詞をかましつ

「ぐおっ！！くるしっ……死ぬッ……マジでマジでっ……ぎぶぎぶぎーぶ！！！」

容赦なく青年を締め落としかかった。

すったもんだと色々あって、しばしの時間の後、顔色が紫を通り越して土気色に変わった青年が何とか生還した時の第一声は、苦しみや辛さとは不気味なほどにかけ離れていた。

「…綺麗な川があつて、母上がいて、恍惚の表情でそっちに逝く親父がいてさ。…気持ち悪かったからぶん殴って引き離れた」

犬飼ポチ、九死に一生スペシャルであつた。まだ生死の境を彷徨っていたようである。

もうコリゴリさ！ 二度と玉葱を丸齧りなんてしないよ！

「しっかし、よく俺の場所がわかったなあ。完璧に匂い消したつもりだったのに」

「へ？消えてないでござるよ？」

「え？何処に匂いがあるんだ？」

「その背中のばつぐでござる」

「…あ」

「…コン」

忠夫、痛恨の失敗。同じく気付かなかったタマは素知らぬ顔でそばを向いていた。相棒同士、一緒にどこか抜けていたようである。二人揃って決まり悪げな雰囲気であったが、しかしシロは気にすることなく半眼で台詞を重ねていく。

しかし、その瞳の中には、微かではあったが寂しさと切なさが存在しており、そんな目で見られた忠夫は、頭をかきながらも誤魔化すことの無いように、せめて誠意を、と独り静かに決心した。

「…で。何故里を出たでござるか？」

「嫁探し」

即答。即、答える。質問の終わりと返答が被っていた位に素早い返事であった。

何故かとてもイイ笑顔で、親指を立てて答える忠夫の前には、「へっ？！」という顔で只固まる人狼の少女と、「聞いてないわよっ！！」という顔でなんだか危険な雰囲気をもし出している狐がいる。

なんと言っ事だろうか。彼が誠意をもったばかりに、こんな不幸



な結果を生むことになるうとは。もし、直後にああなる事を彼が知っていたのなら、数秒前の自分を全力で殴り飛ばしていたかもしれない。

「ん？ ……どうしたんだお前ら」

「嫁探し…でござるか？」

「コン？」

星明りにかすかに照らされた周囲の空間が、僅かに暗くなったように感じられた。雲でも出て来たか、と不思議そうに見上げる彼の視界に、小刻みに震える二人の姿は映ってはいない。

「ああ、そうだけど？」

「な・ん・で里の外に探す必要があるのてござるか？」

「…」

「そりやお前、里に相手がいなかったらうが」

轟、と音さえ立てて、二人の体から曰く言い難い圧力のようなものが吹きあがる。この時点で、忠夫は漸く異変に気がついた。

「…ほおう」

「…」

重ね重ね不幸なことに、それはもはや手遅れだと言つたによりの証明でもあった。

「…なあ、シロ？タマ？」

「何でござるか」

「コン」

忠夫は物理的な寒ささえ感じていた。その元となるのは、妹分であるはずの少女と、先ほどまで頭にのつけていた小さな相棒の視線だ。

「なんだかスツゴク嫌な予感がするんですが？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

片や両の手に力を込め、ポキポキとその細さに見合わぬ音を立てる少女。片や絶対零度の視線を込めながら、ゆらゆらと揺れる火の玉が幻視できる子狐。

危険度では同じくらいであろうか。ストップ高だが。

「それに冷や汗が止まらないんですが？」

「流石兄上 鋭い直感是人狼の能力の一つでござるよ」

「コン」

暗い森に、断続的な轟音と爆炎が生まれ、最後の締めとばかりに大木を薙ぎ倒しながら斜め45度で忠夫と言う名の砲弾が発射された。

「なんでじゃあああああ・・・・・・・・・・！」

忠夫は夜空を飾る一筋の流れ星になった。

「……はっ！しまった！逃げられたか……！」

「コンッ……？」

え、それだけ？ と、真横で思いつき火の玉を投げつけて爆発させていたのにも関わらず、自分の存在をが目に入っていないと言った反応をされて、こんな状況ながらも子狐は少女が少し心配になった（頭の出来的な意味で）。

### 某温泉・女湯

「いやゝ今回の仕事は楽しかったわねゝ」

グラマラスな女神、と言言葉を体現したかのような体を伸ばし、熱爛片手に温泉につかりながら、まさに極楽といった表情をしている女性。 美神令子がそこにはいた。

母親譲りの美貌と、悪霊との戦いの中に身を置きながらも陰る事の無い、宝石にも似たその華のある雰囲気。少々きつめの顔立ちながら、「絶世の」と呼んでも差し支えない女性である。

「おキ又ちゃんって言うかなり便利な助手も新しく事務所に入るのになつたし、まさに棚から牡丹餅落ちまくりねー。ほーっほっほっほっ！」

「美神さーん！」

そこにまた一人、先ほどから独り言を喋っていた女性とはまた違う雰囲気をもった女の子　女性と言うより、女の子と言った方が正解だろう。特に美神と比べれば　が現れる。

先ほどの女性を綺麗、と表現するのなら、こちらは可愛い、清純と言った言葉が似合う。隣にふよふよと浮かぶ人魂と、地に着かない足、時代錯誤というか場所を考えない巫女装束を除けば、の話であるが。

とは言え、どちらがどう、でなく、どちらも大変魅力的な、言うに異論は出ないだろう二人である。

「どうしたの、おキヌちゃん？」

「さつきすっごい爆発があっただですよ！あっちの山の方で！聞こえませんでしたか？！」

「あゝ、別にいいわよ。依頼受けてないし。私はやーよ、ただ働きなんて」

「美神さ〜ん！」

物理法則と言うものがある。

「困ったことがあったならまた依頼が来るわよ」

なんというか、ぶつちゃけた話。

「えー、でもー」

おもいつきり投げたボールは。

「そしたらまた儲け話ね」

いつか必ず地面に落ちるのである。

それに気づいたのは美神だった。夜空を切り裂き、火の玉が落ちてくる。湯船に横たわらせていた身体を跳ね上げ、手近なバスタオルを引っ掴んで身体を隠し、戦闘態勢をとろうとして、気づいた。道具が無い。神通棍も、破魔札一枚も、無い。舌打ちしながらイヤリングとして身につけている精霊石に手を伸ばす。

コストパフォーマンスは最悪かもしれないが、自分の命よりも高い物などこの世には無いから諦めもつく。…つかないかもしれないが、いや絶対つかないが、その時は相手に地獄の鬼も土下座するよな責め苦が待っているだけだ。

そうこうしているうちに、それは何物にも遮られる事無く、温泉の湯船に着弾した。

床のタイルに走る罅、巻き上げられ、撒き散らされる温泉の湯、吹きあげられた湯気は、彼女達の視界を一瞬にして奪う。

「くっ！　　いつたい何よ？！　　私に喧嘩を売ろうなんて、いい度胸してるじゃない！」

「美神さん！　あそこに、誰か居ます！」

そして 彼らのファーストコンタクトは

「嫁に来ーい！！！！！！」

「死ねこのハリウッド級アクション痴漢！！！！」

電光石火の右ストレートから始まった！

クスクスクス……。おやおや、彼らも相変わらずなようだ。何処に行っても、どんな時でも彼らは「ああ」だ。アレだけ変わる流れの中で、変わらない事を保ち続けるとは いやはや。これだから、「おもしろい」。まさに世界は綺羅星のごとく。

ああ、挨拶が遅れてしまったね。こんばんわ？おはよう？それとも、こんにちは、かな？

さてさて、やっぱり彼らは出逢うのか。ただの偶然？ っは！それこそマサカ、だ！あるべくしてそうあった。それだけのこと

だよ。

そう、それだけの、只、其れだけの

いや少々興奮して、喋りすぎてしまったようだね。

まあいいさ。

たまにはこんな時もある。今日はこの辺で失礼させていただくよ？

それでは

良い夢を

## 第四話

朝日が昇る。小鳥の囀りが聞こえて、しかも今日は快晴の予感がする。

こんな日に、気持ちよく目覚めることができるならば、それは、一つの幸せではなからうか。

「…おい、生きておるか？」

「…ああ、なんとか、な」

「動けぬか？」

「無理」

朝日が昇る。小鳥の囀りが聞こえて、しかも今日は快晴の予感がする。

太陽は山影から顔をのぞかせ、地面に埋まった身体はともかく、一晩中助けを求めて声を出し疲れ切った彼らにゆっくりと暖かな光りを与えていた。

「いい加減誰か助けにきてくれんなあ…」

「忠夫め、次会ったら覚えておれよ…！」

かの少年がしかけた落とし穴にはまり、ご丁寧にもと言うべきか、



それとも武士の情けと言うべきか、頭だけは埋められずに地面から生えた生首と化している彼らは、一晚中だれの助けも得られぬまま、疲労と空腹を抱えている。

悔しさゆえにぎりぎりど歯ざしりをする隣の男の声を聞きながら、里を覆う結界にほど近いこんな場所では、助けが来るのはどれほど後になるかと考えて、もう一人の男は溜息を吐いた。

「だーれーかー！ ふぬぬぬ…っ！ 出してくれー！」

「…そのうち誰か居ないのに気付いて、助けに来るさ」

「馬鹿たれえいつー！」

諦観半分、楽観半分で呟いた男に、怒声が襲いかかる。

耳も塞げない状態で耳元で吐かれた大声に顔を顰め、そちらを向いた男の目に、嫌に焦った表情と、だらだらと流れる冷や汗まみれの、男の見苦しい顔が入った。

「いいか、拙者達は昨日から散々騒いでおる」

「あ、ああ。まあな」

「しかも日が出た。そしてここは里からも程よく遠い」

「だから腹も減ったし困ってるんだろ？」

今一要領を得ない、そんな風情の男に、舌打ちをしながら焦った

男は、危機感をたつぷり乗せたまま、その理由を吐きだした。

「死ぬぞ」

「え？」

「このままだと死ぬ」

その言葉につられるように、がさがさと背後の草むらが蠢いた。

のそり、と巨体を揺らし、掻き分けて出て来たのは…一匹の勇壮な雰囲気を纏った巨大熊だった。

片方の目に走る古傷の跡。やや赤みがかった剛毛が覆うその身体は並みの熊を優に超える膂力と威圧感を持っている。

獲物は、ぎろり、と片眼で見降ろされていた。

「え？」

「だからさつきから必死で助けを呼んでおったのだ…！」

「うわー！？　死ぬ死ぬマジで死ぬっ…！」

「黙って口から霊波刀をだせっ！　いいか、片方が助けを求めて、片方が霊波刀で牽制っ！　霊力が尽きたら最期だ！　拙者の命、貴様に預けるぞ！」

「カッコいいつもりか知らんが現状凄惨い情けないからなっ…！」

それから助けが来るまでの二時間と三十二分、彼らは色々と振り絞りながら頑張り続けた。救援に担がれ里に戻った時にはすっかり精も根も尽き果て、次に目覚めた時は互いに無事であった事を喜びあい涙ながらに抱きしめ合った。

余談ではあるが、その後、抱き合った時に感じた、やたらねつとりとした視線のせいかは分らないが、里の一部女性に暫くなんとなく腐臭の漂う視線で眺められる日々を送ったそう。

「全く・・・いきなり降って来て、全然怪我した様子もない上に、第一声が「嫁に來い」？ふっざけた痴漢ね」

「その怪我しなかった人をいきなり重症一歩手前まで殴り倒した美神さんもすごいと思いますけど・・・」

犬飼 忠夫がニュートンに負け、鄙びた温泉の女湯に落ちてからしばらく後、そこには浴衣を着こんだ美神と呼ばれた女性と、明らかに地面から浮きつつ、人魂を纏わせた「幽霊の」少女がいた。

痴漢を右ストレートの一撃で沈めた後、急いで着替えを済ませた美神は気絶した少年を浴場からロビーへと足を引っ張って引きずり出していた。

少年が引きずられた後には血の跡が残っており、ホラーなゲームや映画も真っ青な演出となっている。すれ違った従業員達はそれを見てまた何か霊障でも起こったか、と戦々恐々としていたのは然もあらん。

そのままの流れで遠目に見守る従業員達にとりあえず警察でも呼んでもらおうか、と声をかけようとした彼女の霊感に、ふと何かが引っ掛かる。

「うん？この子…なんか変ね。おキ又ちゃん！荷物の中から呪縛ロープと、霊視ゴーグル持ってきて頂戴！」

「呪縛ロープ？れいしごーぐる？…ふえーん、わかりませーん」

「ああ、そりやそうよね…しよーがないわねえ。ちょっと見張つてよ、多分あれだけやっとなればしばらく動けないと思うけど」

「はあい」

頭を掻きつつ自分の部屋に戻る浴衣姿の美女と、それを元気一杯に見送る幽霊美少女の後ろでは

（ ヤヴァイ！ 呪縛ロープとか霊視ゴーグルと違ってTVでやってた霊媒道具じゃねえか！ GSなんぞと事がまえるわけにはいかん！ ）

すでに流れ出る血も止まり始め、戦術的撤退を考える半人狼の青年がいた。

（…ああつ！でも、年上の美女に縄で縛られるこのシュチュエーション…何かに目覚めそうなっ！！）

訂正。ただのバカがいた。

「あ、おキ又ちゃん」

「あれ、どうしたんですか美神さん？」

と、部屋に戻ろうとしていた美神が、廊下の曲がり角から顔を出し、おキ又に向かって何かを放り投げた。

長方形の箱から金属の針が二本突き出しているそれを指さし、美神は言う。

「そいつが目を覚ましそうになったら、それを首筋に当てて、横のスイッチ押しというー」

「えっ、…こ、これ、何ですか？」

答えを求めて手元の箱から視線を上げても、返事は帰らずひらひらと振られる手が廊下の曲がり角に消えていく所であった。

（どうする…どうする忠夫！ このままここにいればGSに睨まれるかもしれない！ しかし、外に出て見つけた嫁候補第一号！ しかもすこぶるつきの美女！！ …もったいない！ もったいないぞおおっ！！！！」

「きやあー！！」

「うえっ！」

どうやらいつのまにか口から出ていた忠夫の心の叫びは、近くにいた幽霊少女を驚かせ、その悲鳴が更に忠夫本人も驚かせたようである。思わず、といった様子で箱の横に着いたスイッチを押しこみながらそれを突き出す少女。

「え、えいつ！」

「あばばばばばばっ?!」

ほとばしる雷光。目を瞑ったまま明らかに改造されているであろうスタンガンを押し当てるおキヌ。まさかこんな可憐な少女がいきなりきつつい攻撃をしてくるとは夢にも思わなかった忠夫は、しばしビクンビクンと踊り狂うことになる。

「わー、これすごい」

「し、しび、しびれっ!? いきなり何すんじゃねーちゃん！」

が、そこは人狼故か忠夫故か。

目をキラキラさせて文明の利器を物珍しげに眺める少女に、対してダメージを受けた様子も無く、やや黒焦げていながらも文句を言いに立ち上がる。

と、そこで初めて二人の視線が絡んだ。

「あ、ご、ごめんなさいっ! 私びっくりしちゃって! 大丈夫ですかっ!?!」

「…はっはっは！ 大丈夫だよ！ ほーらこんなに元気！」

心配する少女の顔を見て、本当に心からこちらを案じていると感じた忠夫は、その少女の優しさに空元気（とも言えないが）を見せつけるように慌てた様子で両手を振りまわして見せた。

「良かった…。本当にごめんなさいっ！」

頭を下げる少女を見て、忠夫は思う。

- 一、器量良し
- 二、性格良し
- 三、…押しに弱そう？

「分った。だったら俺の嫁に来ないか？」

「何がだったらなのよこの馬鹿ったれ！！」

とりあえずおキヌを口説き？はじめた忠夫への返答は、少女の悲鳴を聞き駆け戻ってきた美神の十二分に霊力の籠った神通棍の一閃であった。

後頭部にそれを食らって今度こそ崩れ落ちる忠夫。

トドメとばかりに踏みつけられながらも、彼はどこか満足げであったとか無かったとか。

で、それからしばらく後。

「で、なんでこんな所にあんた見たいなのがいるの？」

再び忠夫が目覚めてみれば呪縛ロープでぐるぐるに巻かれた己と、

「あんた、人間じゃないでしょ？」

神通棍を輝かせながら額にいくつも井桁を浮かばせた美神がそこにいた。

「……ななななんのことでせうか？ わ、私はどこにでもいるゴク普通的一般村民ですよ？」

「へえ？じゃあその頭から生えてるお耳は何かしら？」

その言葉に慌てて耳を隠そうとし、完璧に拘束されている為腕が動かせず、じたばたともかく忠夫の額にはすでにバンダナはなくしっかりと、狼の耳が生えていた。

「こ、こ、これは、ですねえ？」

「これは？」

「そのお……あの……ええと……」

「……………」



どんどん纏う雰囲気冷たくなり、温度を下げる美神の視線にさらされながら忠夫は必死に考える。

相手はおそらくゴーストスイーパー。テレビで見た限りでは、魑魅魍魎、悪鬼羅刹を相手取り、被い、討ち、滅する事を生業とするその道のプロ。

転じてこちらは半分とは言え妖怪。しかも誤解とは言え女湯に飛び込み、ちよつと持て余した若さのせいで理性が飛んでしまった事もあって、裸の女性に飛びかかった前科持ち。

不味い。この状況は不味い。下手な誤魔化しは通用しそうにない女性が相手である上に、立ち場も悪けりや印象も最悪である。

せめて、この雰囲気、怒っている女性を上手い事宥めて見逃してもらえるように交渉できる雰囲気を作らねば！

そう、こう、何か雰囲気を和ませるような小粋なジョークとかいいんじゃないかなっ！？

「…お、お前の綺麗な声を良く聴く為さ！」

「…赤ずきんちゃんって、狼に食べられそうになったのよねー」

「…っ、誤解じゃあああああっ！？」

理論はあんまり間違っていないのに、結論がずれていたようである。

一通り、忠夫のライフはもう0よ！の一步手前までしか倒した後の事。美神は何処となくすつきりした様子で、ぼろぼろの忠夫の涙ながらの話を聞いていた。

勿論正座した彼の眼前には未だ仕舞われぬままの神通棍がぶらぶらと揺れており、それが目の前を通るたびに彼はビクリビクリと震えている。

「へえ?! 半人狼! いまどきめつずらしいわねえ。人狼が人との交流を絶つてから、もうずいぶん経つわよ?」

「ええ、まあ色々あります」

「んで、そんなレアな存在がどうしてこんなところにいるわけ?」

「嫁探し」

即答しつつもイイ笑顔で答える忠夫に、呆れた溜息をつきながらも美神は神通棍をしまい、

「はあ。まあ、確かに人狼と人間が結ばれた話はあるけど…」

「ねえ、美神さん。ろーぷ解いて上げましょうよ」

「まあ、悪い子じゃなさそうだしねえ…馬鹿だけど」

苦笑いを浮かべつつロープを解いてバンドナを返してやるのだった。

「それで、これからどうすんのよ？女性をさらうっていつのなら、しつかりバッチリ極楽へ送ってあげるけど？」

「はっ？」

本当に、全く考えてもいなかった事を言われ、固まった後、忠夫は

「なーにいつてんすか！ やっぱ愛がないとだめでしょ？！ 愛がなきゃあー！！」

己の信念を笑顔で返す。

「…ふーん、まあそれなら良いけど」

対する美神は、どこか全く興味がないうでいて、しかし微かに苦笑いを零しながら、その言葉に心の隅で何かがカリッと引っかかれたような戸惑いを感じていた。

（…なんだろ。これ。なんだか、すごく懐かしいような…）

「えーと、犬飼さんは、これからどうなさるお積りなんですか？」

美神はいつの間にか呆けていた事に気付き、おキヌの言葉にはつと意識を目の前に向けた。

先ほどまでボロボロだった筈の少年は何時の間にか元気そうな素

振りになっており、それを見て、若干心配そうだったおキ又は、ほつとした様子でほだいたロープ片手に話しかけていた。

「とりあえず、母上繋がりで連絡とってあるんで、そっちの方にも行ってみようかな、と」

「へ、へえ、どこ？」

呆けていた事を誤魔化す様に放った言葉には、しかし本人さえも意識しないような、別れを惜しむ気持が僅かに籠っている。

「東京っス。といつても、自力で生きていけるように頑張るつもりっすけどね」

「ふーん。…あんだ、犬飼忠夫って言ったわよね？」

「嫁に来ますか？」

「行くかつ！」

とつても不機嫌な表情で、でもどこかに楽しげな色を瞳に浮かべたまま、美神は言う。

「あんだ、私の裸を見て、無料で済むとは思ってないわよね？」

「…え」

にやり、と意地悪そうな表情を浮かべた美神の言葉に、忠夫はかちりと動きを止めた。止めざるを得なかった。

多少の持ち合わせはある、と言えはある。しかしそれはこれからの生活費だったり食費だったり、その他にも色々必要なものを入力するために取って置きたい貴重な資産だ。

これから先に自力で稼ぐ機会に何時めぐり合えるか分らない以上、できる事ならば使いたくは無い。使いたくは無いが、目の前の女傑が「払いたくありません」で許してくれる訳もない。

しかし、意地悪な表情を、悪戯っぽいものに変えた美神は、笑いを堪えるように動きを止めて冷や汗を流す忠夫に、一本の蜘蛛の糸を垂らす。

「分ってるわよ。どーせ大金なんか持ってないでしょ？　なら、体で払いなさい」

「そー言うことなら今すぐにでも！！」

台詞とともに服を脱ぎながら飛び上がった忠夫の頭部に彼も細くできないほどの速度で神通棍が振り下ろされた。

冷たい廊下に熱いキスをしながら、ゆっくり頭を上げた忠夫の目に、先程までの暖かさの無い、絶対零度の視線を向けてくる仁王立ちの美神が写り込む。

「…労働力を提供しなさい」

「了解しましたっ！」

ルパンダイブをかましつつトランクス一枚で凄まじい勢いで尻尾

をはためかせ飛び掛ったところを、カウンターで沈められ、これから先の上下関係をしっかりと叩き込まれた忠夫であった。

「まったく…まあ、荷物持ちもできる、人狼の血を引いてるから霊力も使えるはずだし、超感覚もついてくる。…拾い物、なのかしら？」

はやまったかなあ？ という顔で佇む「いくら分働け」という額の提示をしなかった美神と

（うわあうわあ、男の人ってすごく筋肉がついてるんだあ）

意外に引き締まっている忠夫の体を見て、真っ赤になりながらも目が離せないおキヌの上に、いつのまにか、涼しげな、透き通るような朝日が差し込んでいた。

その頃、某所では。

「兄上ー！あっにいうっええー！！何処でござるかー！！」

「コーーーーーン！！」

「このバカギツネエエエ！！　少しは手加減するでござるよおお  
！……」

「グルルッ！！！！」

「やるでござるかあっ！！！！」

「グルルルルウツ!!」

吹き飛ばした彼の事をすっかり忘れ、互いに本能で感じ取ったライバルを減らさんと、爆音と炎を撒き散らしながら自然破壊にいそしむ二人がいたとか。

「あれ？ 犬塚さん、どうなさったんですか、そんなボロボロで」

「…娘が…反抗期かもしれないんです…」

そんな真っ只中に娘を発見して飛び込み、気づかれる事無く巻き込まれ、気付いた時には完全に見失って失意のままに里に戻り、未だに魘されている者たちの面倒を見ていた女性に相談するとある父親の姿もあつたとか。

彼らは出会った。この世界の歯車が回りだす。今度こそ、なのか、漸くなのか。待つて待つて待つて、しかし期待は裏切られ…。だが、諦め切れずに、この様か。

おっと、「やあ」またまたお会いしたね。

すまないね、ここに誘われる者は多くない。未だ客人の君を放っておくなんて、少々礼を欠いてしまったようだ。

お詫びといつては何だが、お茶を一杯ご馳走しよう。まあ、物語を聞きながらも飲んでくれると嬉しいな

#### 第四話（後書き）

序盤は特に修正や書き直し部分が多いため、思うように投稿速度が  
あがりません。

ちよつと遅くなっていますが、あしからず。

昔見ていた、覚えている、と言う方が結構な数いらっしやって、大  
変嬉しく思っております。暫くはリハビリも兼ねている為、感想を  
返せるほど余裕ができてから、返信したいと思います。ご容赦くだ  
さいませ。



## 第五話

そこは本当に古い木造アパートだった。

築数十年程度では効かないであろうそれは、しかし古い建造物であるが故にか、独特の丈夫さを誇っていた。

さすがに後付けであろう窓ガラスや換気扇は、どう見ても動くのか怪しくはあったが、何本もの太い柱に、木造ながらも隙間風の吹きこむことが無いしっかりした壁。住居に使われる木材が現代よりも安く、手に入れやすく、また、それを建てた大工の腕が良かったせいもあるう。

とは言え、もはや建てられて何年経ったか不明な程度には古い建物であったが、管理人もそれに相応しい程古い……いやいや、枯れた……と言うか、年経た老婆であった。

とりあえず一軒目に訪れた不動産屋で、馬鹿正直に「戸籍が無い」と伝え、何故かタバコを啜えたえらく渋い雰囲気の新入社員は、溜息混じりにまたか、と言った風情を漂わせながら、取り出した地図に小さく丸をつけ、忠夫に向かって放り投げた。

それを受け取り、背中に「まだ若いんだから、さっさとお日様の下を歩けるようになれ」とよくわからないが暖かいお言葉を頂き、目的地へと移動。

そこにあっただのが見た目に古いアパートで、その目の前の道路を掃除していたのがこちらにも古い人物だった。

紹介されてきた事を伝えると、老婆は一言、一月当たりの家賃だけを伝え、忠夫に空き部屋の物らしい番号札が着いた鍵を渡して掃除に戻った。

で、行ってみれば意外に掃除の行きとどいた、独り暮らしには十分な広さの部屋。

幾らか首を捻る様な展開があったものの、家賃は安いし中は快適そうだしでまあいいかとそこに決め、とりあえずの家賃を老婆に渡し、これからよろしく願います、と頭を下げたのだった。

で、そんな彼が今何をしているのかというと、予てからの予定通り、無事東京に着いた事とかを叔母に連絡しているのである。

「そういう訳でさ、GS助手って形で雇ってもらうことになったよ」

「ああ。…だいじょーぶだって！」

「え、なに？戸籍？作つといたって…んな、どうやって?!」

「あー、母上の実家の方から、ねえ。まあ、あんまり寄りたくはないんだけど」

「へ？学校?! 行けって…んな無茶な?!」

瞬間、受話器の向こうから怒声と、スピーカー越しの筈なものにはつきりと見える叔母の逆らう気さえ起らないような鋭い眼光を感じ取った忠夫の尻尾が、天を指して伸びきった。

「ママ・イエス・ママ！ すんまつせんした！ だからお仕置きだけは勘弁してください」

電話ボックスから身体半分をはみ出させながら受話器に向かつて土下座をする少年の姿は、通りがかりの人達からは非常に奇妙なものとして映った。

「うん、ありがと。またね、百合子さん」

最後にがちゃん、と音を立てて受話器を戻す。そして電話ボックスから一步踏み出してひと伸び、その瞬間、彼の目の前に、自転車に乗った爽やかな笑顔のあんちゃんがブレーキ音とともに現れた。

「犬飼さんですね？ お届け物です！」

「…え、あ、はい。どうも」

「では、またのご利用をお待ちしていまああああ…」

そして忠夫に封筒を渡した彼は、ドップラー効果を伴いながら、都会の雑踏へと消えていった。

封筒を開けてみれば、中には戸籍謄本やら学生証やらの書類が沢山と、手紙が一枚。

『アパートの方に教科書とか制服は届けておくのできちんとサボらず行くように！』との事。

電話をしながら準備をしたのであろう叔母の手回しの良さに驚く

べきか、短すぎる時間で伝えても居ない電話ボックスへ届け物を配達した自転車バイク便のあんちゃんが凄いのか。

「…都会って忙しいとは聞いてたけど、ほんまやったんやなー」

と、深々と何度も頷きながら、少年は改めて封筒の中から一枚目を取り出した。

「えーと、養子って事で登録してあんのか。…よこしま、『横島忠夫』、か。なんかしつくりくる…のかな？」

家の玄関が閉まる音を聞いて、英字新聞を読んでいた男性は顔を上げた。

リビングのドアを開いて肩をたたきながら戻ってきた彼の妻は、小さく溜息をついてソファーに腰掛ける。

「おー、どうだった？」

「無事に届いたみたいよ。あそこは仕事が早いわねえ」

仕事が早いというか、時間を超えているレベルである。

だが、夫はその言葉に苦笑い込みで首を振ると、そっちなやないよ、と目で伝えて来た。

ああ、と先程までの電話相手の事に思い当たり、妻は額を押さえて眉をひそめる。

「…うーん。大丈夫だとは思っけどねえ。姉さんの子供だし」

「あー。確かになあ。あの人の息子だもんなあ。何処に行っても死にやあしないと思うが」

「相変わらずうちの実家苦手みたいだし」

当時の事を思い出すと、未だに頭を抱えなくなる。

「まあ、長女が連れてきたお相手が、なあ？」

「人狼ってーのは良いのよ。うちの家系なんて人外なんか　アレだし。人狼は情が深っていうし。なにより、姉さんすごく幸せそうだったし」

別にかの人狼が気に入らなかった訳では無かったし、まあ本人が決めた事だから、と結婚それ自体には反対する者は居なかった。

だが、ある一点だけ、それが為に、彼らの息子にまで妙な視線が集まってしまい、まだ小さな子供だった彼には随分と不安な思いを抱かせてしまったようである。

しつこいようだが、繰り返すと、人狼である事は特に問題にならなかった。では、どうしてそんな事になったのかと言うと。

「そこまでは良かったんだがなあ。何せ　」「なんていうか　」

「名前が『ポチ』だもんねえ（なあ）」

そのせいで忠夫は「ジロ」とか「ギン」のような、（日本人の感性として）変な名前なんじゃないか、ととばかりと勘違いで妙な視線を受け、やや苦手意識を持ってしまった忠夫であった。

かくして、これらが東京に着いた後、美神達と別れ、まず犬飼いや、ここからは彼の偽名、「横島忠夫」と呼ぶことにしよう  
横島忠夫が一番初めにやった事であった。

幸い住居の方は里から持ち出した資金でも問題無く見つける事ができたし、叔母とのコンタクトもうまく行った。

…と言うのは彼の感想であって、突っ込みどころも多々ある気がしないでもないが。

ともあれ、足場を固めることに成功した彼の次の課題は。

「さて、GS美神除霊事務所、か……。初出勤と行きますか！」

とりあえず、無事に生き残ることだろう。

そして、彼はGS美神除霊事務所の看板が掲げられたとあるビル  
のドアを開ける。

「ちわーっす!!」

「あ、犬飼さん」

意気揚揚と出勤してきた横島を出迎えてくれたのは、幽霊ながら  
箒で部屋の掃除をしているおキヌ。

伊達に何百年も幽霊をやっているわけではなく、こういった仕事も  
得意分野である。

「あ、おキヌちゃん。うーむ、流石、家事万能なんだねえ」

「え、えへへへー」

頬を染めながら照れる美少女に、おもわず「是非俺の嫁さんにー  
!」と言い出しそうになったが、ぐっと堪えた。今は優先事項が他  
にあるのだ。

「嫁に来なゴホンゴホン!! あー、そうだ。俺、色々あって戸籍ができたんで、そっちを名乗ることにしたんだ。横島、横島忠夫としての。改めてよろしく!」

「あ、はい、よろしくお願いします。えっと、横島さん!」

「よろしく、おキヌちゃん。そうだ、美神さんは?」

「美神さんなら、今書斎にいらっしやると思いますよ?」

堪えたつもりでちょっと頭を出しかけたが、誤魔化せたようなので良しとする。

先ずは、雇い主と、色々と話さなければならぬことがある。特にお給料とか。

「へえ…横島、ねえ」

「はい。おば…百合子さんが色々と、手配してくれて」

「何者よ、その百合子さんって?」

「…さあ」

ジト目で横島を睨む美神と、何故か止まらない汗を流しながら見返す横島。

「…まあいいわ。ところで、あんたの給料だけど、ちょうどいいわね。今から除霊に行くから、そこでの働きを見て決めさせてもらう



わ  
」

「はい？」

美神はニヤリと不敵な笑みを浮かべ、先程まで見ていた書類をデスクの上に置いた。その表情を見ながら、汗は引いたが、今度は背中に悪寒が走るのを横島は感じたのだった。

「で、今日の仕事はここ！ギャラは5千万。たいした金額じゃないから手早く済ませましょ」

「うわー、おつきなビルですねー」

「そうだなー」

背中に巨大なリュック、両手にはスーツケースのようなものを持ちながら、全く疲れた様子を見せない横島と、その隣でビルを見上げて声を上げるおキヌ。

なんとも緊張感のない一行である。

「しっかし5千万でたいした金額じゃないって、GSって儲かる職業なんやなー」

「すごいですよねー？ 5千万って」

「言ってみただけどう分らんなー。なんせ金に殆ど縁がないところ

で過ごしとつたから」

なにせ住んでいた場所が外界とは隔絶された人狼の里である。お金が必要になることもなかったし、使ったのも今回のアパート確保がほぼ初めての横島である。金銭感覚など無いに等しい。

「むう…なんにせよ、この仕事の頑張り次第で給料が決まるからな！ 頑張ろうおキ又ちゃん！」

「私はお給料決まっていますけど、初めてのお仕事ですから、頑張ります！」

初仕事と気合を入れる2人を余所に、依頼人と交渉していた美神は上機嫌で戻ってきた。

「ラッキー、報酬さらに5千万上乘せですって！ 勤労意欲が湧いてくるわねー。さあ、行くわよ、あんた達！」

「ういっす！」

「はい！」

GS美神除霊事務所、出勤である。

とりあえずビル内に入った美神達は、ロビーを通り抜け、非常階段へと向かう。

「あれ？エレベーターっての使わないんですか？」

「上で悪霊が暴れてるのよ？ あんな閉鎖空間に入って機械でゆっくり上がっていくわけには行かないでしょ？ それに今回は荷物持ちもいるんだし」

「俺がいなかったらどうしたんですか？」

そのまま非常階段を32階までひたすら登りつづける。浮いているおキヌや、手ぶらである意味体力勝負な面もある荒仕事に慣れた美神はともかく、どう見ても大人一人より重そうな荷物を持ったまま、汗もかいていない横島は、さすが人狼、といったところか。

「さーて。少なめの装備で階段使うか、それとも最大限の装備で危険を冒してエレベーターを使うか。まあ今みたいに大荷物もって階段上がったたら、除霊に入る前に疲れるし動きは鈍くなるし」

何より様々な種類の霊具を使い分けて除霊にあたる美神のようなタイプにとって、装備量とはイコールで柔軟な対応力であり、火力であり、…貴重な財産でもあるのだ。

それをよりにもよって危険な霊が暴れ回っている場所の近くで無防備に置いておくのは危険であるし、もしも失ってしまえば経済的にも相当なダメージとなる。

結界を貼るにしても面倒くさいし、それよりなによりお金がかかる。

よって、機動力もあり、大量の荷物が搭載可能で、いざという時

には戦力にもなるであろう忠夫は、この上なく便利な存在なのだ。

「へえー、すごいです美神さん！」

「だ・か・ら、横島くんっていう荷物持ちもできる助手ってのは、けっこう重要なのよ？」

「まあ、これくらいならまだまだ平気ですけど、「も」って言うのはなんですか？」

「へっ？ そりゃ…あ、着いたわよ。32階社長室。ここね、準備はいい？！」

「はい！」

「ういっすー！」

「横島君、神通棍を！」

「えーっと…」

荷物を降ろし、背中のバッグから言われた道具を取り出す横島。出発前に使いそうな霊具と装備は一通り説明を受けているし、なにせテレビに彼らを題材にしたドラマが流れる事もある程度には世間に認知されているのがGSという職業である。

彼が持っているのは齧った程度の知識であるが、とりあえず簡単な説明と名前を覚える一助にはなったのだった。

「これですね！」

「よし、覚悟は良いわね？」

作戦としては単純に、美神が前に立ちおキヌと忠夫はサポートという名の見学である。

美神としては背後にだけは回さないように注意しながら立ち回り、必要な道具があれば投げ渡してもらっ、程度で今回は済ませるつもりだった。

人狼と言っても、幽霊と言ってもGSの仕事の経験がある訳もなし。

雰囲気を感じ取って慣れてもらうのも今回の手頃そうな依頼の目的だった。

…先発のGSがやられた、と言う追加情報が無ければの話ではあったが。

……しかもそれを理由に何時ものようにゴネて、倍額まで持つて行った辺りで二人の素人の事を思い出して今更断れる雰囲気じゃない事に気付いた辺りでちょっと血の気が引いたものの。

「3…2…1…GO！」

ともかく、こうして、3人組での初除霊が幕を開けたのである。

勢い良く部屋の中に突入はしたが、悪霊の姿は無く、辺りに広がるのは瓦礫とガラスの破片、高級そうなソファやテーブルなどの内装の無残な姿ばかり。少なくとも、かなりの破壊力を持った悪霊であることは間違いないだろうが、なにせ情報が少なすぎる。

せめて先発のGSが生き残ってくれていれば、少しは情報が望めたものを！

と、胸の中で毒づく美神であつた。

もちろん後ろの2人にはそのことを伝えてはいない。ただ、大変危険な悪霊であるとか。この程度でビビってもらっては、せっかくの助手（しかも結構使えそう）がいなくなってしまうではないか！　というのは建前で、その本音は、胸の中。

そんな美神を余所に、先制したのは悪霊であつた。

「うわっ！」

「っ！しまった！荷物！」

美神が横島に指示を出し、もしもの時に身を軽くする為に、と部

屋の入り口に置いてきたバッグ。見事に裏目となって、悪霊に崩された天井によってその道具への道はあっさりと閉ざされてしまったのである。

「ウケツ…ウケケケケツ！」

「人格が崩壊しているタイプか…一番厄介な手合いね…」

突然虚空に現れた、うつろな眼窩を持った髑髏を中心にナニカが集まったかと思うと、数瞬後には今回の除霊対象である悪霊が出現していた。

「交渉は…無駄のようね。なら、このGS美神令子が、極楽へ」

澄んだ音を立てて伸びる神通棍。

「いかせてあげるわっ！」

だが、鈍い音と共に打ち負けたのは、

「ケーーーーーっ!!」

「うそっ！強い」

「美神さんっ！」

美神の振り下ろした神通棍であつた。

「くっ！精霊石よっ・・・！」

美神のネックレス、「精霊石」が閃光放つと共に、互いに跳ね飛ばされる勢いのまま離脱、距離をとると、そのまま壁の裏に転がり込む。

「いたたたた…、やっぱりわねー。神通棍じゃ歯が立たないわ」

「…えーと、まずいつすか？」

「下手するとあんたと私が死んじゃうくらいには、ね」

「え”」

「一億じゃ安すぎるわねー」

頭を押さえて舌打ちする美神の横で硬直した横島、そんな彼におキヌのフォローの言葉がかけられた。

「大丈夫！ 死んでも生きられます！ ちょっと死ぬほど苦しいけど」

本人的にはフォローしているつもりである。悪気は無いのだ。

「まだ死にたかないわいつ！」

「…しょーがないわねー。横島君！」

「は、はいつ！」



「あんだ囃やんなさい」

「はっ？」

突如、脈絡もなく美神の口から紡がれたその言葉に固まる横島。

「えーと、美神さん？」

「なによ！早くしなさいってーの！あんだ人狼の血引いてんだから、それぐらいわからないでしょう？！」

「ええと、2人の間にナニカ誤解があるようですが…」

「誤解も何もあるかーっ！男ならとったと行けー！！」

怒声とともに悪霊の目の前に蹴りだされる横島。当然ながら反応する悪霊。

「ちょっとまってー！！」

「おキ又ちゃん！すこし派手なのやるから離れてて！」

「は、はい！」

横島を蹴り出し、おキ又に一声かけた後、美神は深い集中に入る。それと共に額の前に垂直に構えられた神通棍には、大きな靈力が溜められていった。

一方その頃横島は

「ぎゃー！！ こっちくんないっ！ 死んでまうー！！」

「けーッケッケッケ！」

「うひーっ！！」

父とその親友に真剣で毎日のごとく斬りかかられる事により極限まで鍛えられた回避能力と

「けーーーーーーッ！」

半人狼としての瞬発力でひたすら悪霊の攻撃から逃げ回りつつ、見事な囷つぷりを見せていた。どこまでも締まらない避けっぷりだった。

「ま、人格が壊れてるっただけあって、動きが単調で助かった」

ひよいひよいと悪霊から逃げ回りながら、その背後に回り込み視界から外れる。そして悪霊が高まる美神の霊力に反応し、向かおうとした瞬間にその眼前に踊り出て、単純であるがゆえに目の前の事に気を取られてしまうのを利用して攪乱する。

そして彼に完全に気を取られた所で再び視界から外れて、の繰り返し。

知性がない為フェイントなんて使わないし、攻撃パターンも大抵りで単純なものだ。しかし、それを補ってあまりある力と速さ。それがあつたればこそそのGS第一陣全滅であつたし、トップレベルのGSである美神に厄介と言わせた理由である。

それを短時間であっても、ある程度余裕を持って避け続ける横島  
いや、犬飼 忠夫と呼ぶのがふさわしいか。

伊達に人狼の里1、2を争う剣士の訓練につき合わせられた訳ではない。

「犬塚のおっちゃんの居合に比べればなあっ！」

悪霊が伸ばした右手を皮一枚で左側に踏み込みかわしつつ、次の回避に繋げる為の移動を開始する。避けて、動く。避けて、動く。避けて

「ハエが止まってみえるわい！」

「横島さん…すごい、すごいっ！」

どれだけ時間がたったのか。実際には、数分も経っていなかったろう。

「良くやったわ、横島君！」

そして直視できないほど光り輝く神通棍をもった美神が、

「後は任せなさい！ このGS美神が、極楽へっ！」

とどめの一撃を

「いかせてあげるわっ!!」

悪霊の額に振り下ろした。

そして、その帰り道。

依頼を神通棍というコストパフォーマンスの良い霊具だけで片付けられたせいもあってか、ホクホク顔で帰路に就く美神と、その肩に手を置いてふよふよと浮きながら、後方を少し心配そうに振り返るおキヌの二人。

そしてその後を少し焦げながらも二つほど増えたトランクを巨大なりユツクの上に乗せ、少し不満げながらも特にふらつく事は無く二人を追いかける横島の姿があった。

「いやー、なんとか全員無事に済んで良かったわ」

「無事じゃないでしょーがっ!」

「とつとと離れないあんたがわるいんでしょーが」

「だからってまとめてふつとばすこたあないでしょーがあっ！」

そう言つて地団太を踏む横島。しかし荷物を放りだしたりしないあたり、人狼としての律義さか、実の母親の教育が行きとどいているのか。

「いいじゃない　もう傷なんか殆どふさがっちゃったんでしょ？さっすが人狼の超回復って感じよねー」

「もう、美神さんったら」

と、苦笑いを浮かべるおキヌを余所に、今度は美神が不満げに振り返る。

どうして私だけが悪者なのか、とその表情は語っていた。

「だいたいあんたがとつとと霊波刀を使えば、もつと楽に片付いたのよ」

「え？」

きよとん、と動きを止めた横島に何か変なことでも言ったか、とつられて歩みを止める美神。おキヌは霊波刀自体が何か分からなかったのか、疑問を浮かべていた。

「どーしたのよ？」

「…あれ、言つてませんでしたっけ。使えないっす、俺。霊波刀。」

「つか、霊力自体使えないっす」

「…はあ?!」

彼が、半分とは言え、『人狼である』という先入観から、当然使えると思っていた霊力がまともに使えないと初めて知った美神が、実は物凄く危険な事をさせていたと気付いて真っ青になると言う一幕があつたものの。

「ま、まあとりあえずそこそこ使えるみたいだし、給料はこれくらいね」

と、誤魔化す様に示した額は、事務所にいる時の食事と、仕事中の食事、それから歩合給での骨付き肉（横島はこれに一番喜んだ）、時給250円（相場を知らない横島は、とりあえず頷いておいた）であつた。

## その夜

「東京つて所は、本当に星もまともに見えんのやなあ」

無事に？初出勤を終えて食事も食べさせてもらい、安アパートに帰り着いた横島は夜空を見上げながら一人呟く。

「GSねえ…確かに、命懸けの仕事だ、ありゃ」

空には星が見えずとも、細い、細い、まるで裂け目のような月が浮かんでいる。

「…ゾクゾクしたなあ」

その体の震えは、恐怖でなく

「あんなもんばっか相手にしてるなら、GSってのは強いんやろーなあ」

狼の、本能。戦うものとしての、本質。自分にあるとは思わなかったそれらが生み出した身体の、心の震え。

「…また、ああいうのがでるのかなあ？」

武者震い。

「…寝よ」

畳に直接寝転がって、天井を超えた先の月を眺めながら、目を閉じる。

「そっぴやシロ、タマ、元気でやってるかなあ。まさか、あんなに吹っ飛ばされるとは思わなかったなあ。ま、ほとぼりが冷めたら里にも顔くらい見せにもどらにやならんか」

あくびを一つ。そのまま眠りに落ちる彼の呟きを聞くでもなく。

月は、ただ、そこにあつた。

丁度その頃、人狼の里、長老の家では。

「ふうふうう」

深い、ふかあゝい溜息をついたのは、人狼の里最高齢にして、周  
囲の者達から長老として慕われるこの里の長。

「ぐびぐびぐびっ！ …しろおおおゝ。ぐしぐし」

部屋の隅で酒をあおって家出した娘の名を呼んでは、また盃に酒  
を手酌で注ぐことをひたすら繰り返している泣き上戸、犬塚家の大  
黒柱。

「沙耶…」

縁側に座って「もう少しだったのに、誰かに殴られたせいで川の  
向こうの妻に再会できなかった」と嘆いているのは犬飼家のポチさ  
ん。

「おめでとつっ！ 生きてるってすばらしいっ！-」



「さあ、この幸せを皆で分かち合っただっ！！」

「そっちもおめでとー！ あっちにありがとー！！」

「おおおおっ！ 飲め！ 全部飲むんだー！！」

「「「おーっ！！！」」」

庭では奇跡の生還を果たした（馬鹿）者達が、丸く座り込んで騒がしくひたすら宴会をやっている。

「ふうふうふうふう」

長老は、ただ、おもゝい溜息を吐き出した。

そして、もう一組。横島を追いかけて里の結界をぶち破って駆けだした二人。

「ここはどこでござるかー！！なんで吹雪いてるでござるかー！！」

「きゅん」

「ああっ！ 寝るんじゃない狐えっ！！」

「…「ン」

「寝たらずもつ起きれないでござるよー!」

「……………キュー」

「兄上に会わずに逝く気かあああつ!」

「っ!」

「よし!もう少しでカマクラができるでござる!手伝つでござるよ!」

地点  
シロ・タマ現在地  
南アルプス 標高2800メートル

「兄上!」

「!」

さてさて、彼らも動き始めたことだし、こっちも少し忙しくなるかもしれないねえ。

とはいっても、別に干渉するわけじゃあないし、したくとも、で

きはしない。ただ、見てるだけ、さ。歯痒く感じた頃もあったけど、もはや昔の話さ。女性に歳をきいちゃあいけないよ？

まあ、今、「私」が女性であるだけかもしれないけどね。

もし、男の「私」っていうのに出会えたら、聞いてみるといいよ。

それはそれは、興味深い話が聞けるかもしれないね。

それでは、良い夢を

## 第六話

忠夫初出勤の日から一週間後。

人狼の里、犬飼宅にて、長老は頭痛を堪えるように頭を押さえていた。

日の出を静かに迎えるはずの里が何時になく騒がしい。それもそのはず、里の中心にある長老宅からは、大勢が騒ぐ音がここ一週間程絶えることなく聞こえているからである。

「ちつくしょー!!」

「ただでさえ少ない人狼の女子が!!」

「また犬飼家かー!!」

「忠夫ー!! 駆け落ちー! うらやましいぞー!」

「自棄酒じゃあああー!!!!」

「「「うおおおおつ!!!!」」」

ようするに、生還の宴を開いていた彼らのところに、「シロが忠夫と駆け落ちした」という話が聞こえてきたのである。

実際にはそんな事実はないのだが、噂好きな女衆によって付けら

れた背びれ尾ひれと、物的証拠として発見されたシロの書置きのせいでもはやそれは確定事項として里の中に広がっている。

さらに言えば、昔からシロがあからさまに想いを寄せている態度であつたのが駄目押しにもなつた

もう、誰も疑つてなぞいない状況で、その事實は彼らの心を深く抉つた。

確かにまだ幼さを残していても、将来は美人になること間違いないであり、忠夫に（届いてはいないが）猛烈なアタックを繰り返していても、もしかしたら、万が一とかあるかも、と、独り者として僅かにそんな気持ちを持っていたのである。

それまで互いの生還を祝う宴会だつた筈のそれは、瞬時に嫉妬の自棄酒へと姿を変えたのであつた。それからというもの、一週間の長きに渡り続いている。

呑み過ぎで倒れては放置され、暫くすればゾンビのごとく蘇り、再び酒瓶を手にして管を巻く。

初めは心配していた里の者達も、原因の情けなさや延々と続く瘴気と嫉妬に満ちた騒音、そして放置していても何時の間にか復活しているのであらう大丈夫だろうと言う諦めがあり、彼らは鬱陶しがれながらも宴会を続けていた。

何故か、長老宅の庭で。

煩さに我慢できなくなった長老が制圧しようにも、近づけば集団で縋りつかれ、涙と鼻水と酸っぱいにおいのするナニかを服に付け

られ、しかも延々と呪詛のごとく愚痴を述べられ続ける始末。

ぶん殴っても酒のせいでダメージを受けず、何事も無かったかのようになんて戻ってくる。

しかも、集団でだ。

たまらずその夜のうちに犬飼宅へ逃げ出した長老は、一週間たっても収まる様子の無い騒ぎをどうしたものかと頭を抱えていたのだった。

とまれ、今、犬塚と犬飼と言う、この里でも指折りの剣士を呼んだのは、別にあつちをどうにかするとかそーいう事でも無いのだから、と長老は頭を切り替えた。

庭と酒蔵の惨状を想像してやや憂鬱になりながら、正面に座った二人の男に対して居住まいを正す

「全く…少し前まで女々しく陰に籠っていたかと思えば、すっかり元通りか」

ふう、と溜息を吐いた長老の前で、二人の男達は頭を掻いたり、腕を組んで頷いて見せたりとそれぞれ行動は違えども、同じようにどこかすつきりとした顔をしていた。

「まあ、我が娘もそろそろ大人。ようやくこの里から出ても獣の姿にならなくなったとことのほか喜んでおりましたからねえ」

「左様。我が愚息はあの生まれの性が、獣どころか、半獣人の姿さえ取れなかったからなあ」

「…この里では、場所や月にとられることなく人の姿を取れることが大人の証。そういった意味では、忠夫も十分に異端であるから」  
のう」

ふと、長老が昔を思い出すように遠い目を見せた。

「まあ、沙耶殿のおかげで、少なくとも人間全体に対する偏見は消えたわけだ…」

「妻も、喜んでおりましたよ…この皆は、私を受け入れてくれた、と」

それに対し、「当たり前じゃ」という誇りと自信に満ちた視線を返す長老。

長老と同じように、どこか昔を懐かしむような眼を見せながら、犬飼家の仏壇に置かれた位牌に顔を向け、呟いたのは犬塚だった。

「強い女性でありました、我等の奉ずる月とは真逆の、太陽のような」

と、何だか雰囲気醸し出している二人の隣で、しかし夫であった犬飼は腕を組んだまま微かに唸り声を上げていた。

目を閉じたままの彼の額からは、時折たらりと汗が落ちている。

ぶつぶつと「拙者は尻に敷かれとらん」とか「押しの強さで押し掛け女房に」とか呟き続けている所を見ると、本人達にしか分らない事も色々あったのだろう。

「あの子も、太陽を持っておる。炎の固まりのごとき、な。…しかし、同時に、危険な物も、その内に秘めておるように思えてしまう」

ふと、長老の口から呟きが漏れた。

不安と、心配。

出ていく事は分っていて、きっとそれはそんなに遠くは無いだろうと覚悟はしていたものの、やはりもう少し鍛えて、せめて靈波刀くらいは身につけさせてやるべきだったか、と。

血の繋がりは無くとも祖父のようなものとして、孫の一人の独り立ちにはやはり気持ち揺さぶられてしまう。

「妻の名沙耶は刀の『鞘』に通じます。その息子であるあやつなら美事、収めて見せるでしょう」

しかし、それを断ち切る言葉があつた。

実の父たる犬飼の特に焦った様子も無いその言葉には、確かに信頼がある。

誇らしさと、ほんの少しの、「なにか」の感情を隠しながらのその返答に、その親友は同じ、いや、隠された感情をこちらにははっきりと示しながら呟く。

「炎を、か。しかし犬飼。拙者は、不安なのだ。鞘は『莢』。その中に、『包み育てる』性を持ってしまふ。そうではないか？」



「……」

不安を隠しながらの返答でなく、はつきりとした犬塚の声に、沈黙で返す二人。

いや。

「……くつくつく。良いではないか」

長老は、先程見せた感情とは正反対の、全くの信頼をその声に乗せていた。

「それでも、あやつなら……忠夫なら、騒ぎながら、愚痴りながら、それでもきつと何とかする。そう、思っているのであろう?」

「……いやはや、流石は年の功、といったところでしょうか」

「……我が息子ながら、あれはまた沙耶の息子。ですが、真綿の様で、中身は神鉄で拵えられたような我が妻の鞘」

「……あいつじゃ碎くにや未熟すぎる!」「」

数瞬の後、犬飼宅は3人の爆笑に包まれ、更に数瞬の後、爆音を響かせてその玄関が吹っ飛んだ。

## GS 美神除霊事務所

事務所のソファ―に座って…いや、舌を出しながら「ぐてえ」、として寝転んでいるのは、元 犬飼であり、現 横島忠夫であった。

「畜生うちの所長人狼使いが荒過ぎだ…」

ほぼ力尽きた野良犬の様相を呈している理由は、雇われてからの一週間で、まさに嵐のように依頼をこなしていった美神に主な原因がある。

新たな助手を得て、GS 美神除霊事務所はその対応力を増した。

それまで数々の依頼を、美神一人しかいない為どうしても人手が足りずに断ってきたその鬱憤晴らしのように、ひたすらポンポンとこなしまくったのである。

海に行き、山に行き、異空間に行き、時には幽霊と共に銀行を襲い、またあるときは女子高で校長に青春を取り戻し、その拳句宇宙にまで事務所の活動は及んだのである。

「結局、まともに嫁探しは進まんし…」

女子高では「危険物」と書かれたトランクに入れられて厳重に鍵

をかけ、さらにごつい鎖で巻いたあと呪縛ロープで巻かれて、そのまま依頼終了まで放置され。

海では生まれて初めて逆なんば、とかいうやつをされたが、人妻と知って泣く泣く諦めた。

『人狼の里・独り者の鉄の掟』その四。子持ちの人妻に手を出すな！』に引つかかった為である。

ちなみにこの掟、破ればもれなく夫と独り者集団からの血の制裁があるため、正に鉄の掟となっている。

銀行員のおねーさんがたは、現金を持たない横島を歯牙にもかけなかった。

視界にも入れて貰えないほどの冷たさに「嫁に来ないか？」の「よ」さえ言えなかったのである。

「…えぐえぐ」

現実の厳しさを知り、一人涙する横島であった。

だが、そんな彼を気にもかけず、笑顔でおキヌを連れて帰ってきた美神は、上機嫌に彼の座ったソファアを軽く蹴って声をかけた。

同じようなペースで働き続け、しかも一部はおキヌに任せて始めているとはいえ接客から事務、経理までこなし、依頼の際には最前線で霊力を振り除霊にあたる。

そんな彼女は、何故か半人狼である筈の忠夫が疲れきっていると

言うのに元気澆刺だった。

しかし、忠夫は見た。

どんなに三人疲れて帰ってきてても、従業員二人がぐったりしているのを横目に札束を数えたり、通帳を睨んだりしているうちに見る見る疲れが取れていく美神の姿を。

正直この人の方が人外何じゃなかるうか、と思いつつ、すっかり馴染んだ除霊道具を担いだ忠夫を車に乗せ、依頼現場に向かう三人だった。

が、事務所のメンバーが三人揃ってからの快進撃も、ここまでだった。

「きょ…協同作戦?!そんな話、聞いてないわよっ!!」

ここ一週間というものの順調にその業績を伸ばし、上機嫌で次の仕事へと向かった美神であったが、ここに来て、とうとうその悪運も尽きてきたようである。

「え〜。私は令子ちゃんと一緒にお仕事できるのを楽しみにしてたのよ〜。そんな言い方無いじゃない〜」

そのまま身を翻して逃げ出そうと……いやいや、厄介ごとを回避しようとしていた美神の髪を掴み、間延びした話し方で美神を引き止めた肩までの黒髪を持つ女性　GS「六道　冥子」は、楚々とした雰囲気を持つ、洋風お嬢様であった。

見た目は。

そして、そんな年頃の女性、しかも、可愛い女性を目にした横島は、久しぶりの新たな出会いと言う事もあり、本能と煩惱がゲージを振り切った。

カタパルト、オンライン！　発進、どうぞ！

そんな脳内メッセージが流れたかどうかは知らないが、横島の身体は無意識のうちに宙を待っていた。

犬飼　忠夫　いきまーす！

弾道ミサイルのごとく、正確に目標「名も知らぬ美女」の向かって飛び立つバカー一匹。

「お嬢さん！」

着弾まで、3秒

「嫁につ！」

おキヌが何時の間にか隣から突如消えた横島を見送り、美神が靈力を高めた右手を振りかぶり、残り2秒

「来ないっ」

が、美神の拳が振るわれるより早く冥子の影が光を放ち、残り1秒。

「か あぶろべしっ！！」

美神の渾身の右ストレートより早く、迎撃ミサイルのごとく炸裂したのは、12本、いや、12匹。

「あゝ。靈の気配でこの子達、今殺気立ってるので、近づくとあぶないですよ？」

GSの大家、六道家に伝わる、12神将と呼ばれる、現代では一国の軍隊にさえも匹敵する式神達であった。

不埒者に対するお仕置きなのか、それとも主人を守ろうとする行動なのか、忠夫は直撃を受けた後も、十二支を模した式神達に纏わりつかれていた。

ギャーッス！

「あゝれゝ？」

ギブ、ギブギブギブ！

「あのバカ…。なに、どうしたの冥子？」

電気はいーやーっ！！

「んゝ、なんていうかゝ、あの子達、攻撃してるんじゃないわゝ」

うおっ！あぶなっ！かすった！かすったって！！

「へ？」

キヤインキヤイン！

「なんていうかゝ、久しぶりにお父さんにあつてゝ懐いてるみたい  
なゝ？」

俺がいったい何をしたーーーー！！

「あの、横島さんが大変な事になってるんですけど…」

がぶ。

「「「あ」「」」」

なんかかかんとか逃げ回ってはいたが、何せ相手には悪意や殺気というものが無い。

しかも冥子曰く、子供がじゃれているような　それにしては激しすぎてはいたが　ような物である。

個々でも反則気味の連中が集団で来るからたまったもんじゃない。

何時の間にやら彼らに追い詰められていた横島は　大口をもった式神に啜えられていた。

しばらくじたばたと動いていた彼の下半身も、三人の前でその動きを徐々に緩慢にしていく。

おろおろとおキヌが手を出そうか出すまいかその周りを飛び回り、美神はどうしたものかと額に手を当て呆れた様子。

ひとりのほほんと眺めていた冥子は、忠夫を啜えた式神と目を合わせると、笑顔でこくりと頷いた。

彼女の的にはもう良いから離してあげて、と言ったつもりで頷いたのだが、何故か彼らは横島を離す事無く彼女の影へとどんどん沈ん



でいく。

あれ〜？ と首を捻った冥子に対し、もはやピクリとも動かない横島を啜えたままの式神が最後に影に飛び込み、そのまま消えていった。

どうやら、気に入られた横島は彼らの棲み家である六道冥子の影の中へとおっ持ち帰りい されてしまったようだ。

「…どうしましょ〜？」

「…さつさと出して…まあいいか。十二神将もいるし、戦力的には問題ないから、そのままほっとしましょ。どーせ死にやしないわよ」

「美神さぁーん！」

頭痛をこらえながらの美神の台詞に、おキ又は必死で呼びかけるも、「除霊に入る前から疲れたわ」という風に除霊対象の新築マンションに入って行った美神には届かなかったようである。

それから数時間後、ようやく式神の『甘噛』から開放され、式神の涎でべたべたのまま影から引っぱり出された横島が見たものは、記憶の中では新築マンション『であつた』瓦礫の山であつた。

非常に疲れた様子の美神曰く、色々あつて、こつなつた。予想はしていた（冥子が来た時点で）、反省はしているし（冥子と組むとこつなる）、後悔（冥子とはもう組みたくない）もしている。

が、ちよつとまあ…結果を見れば除霊には成功したのでOKだろう、とは思うが、依頼人が納得しないかもしれない。

そう言つて、後方で膝をつき、呆然とマンション後を眺めている依頼人を指さす。

「はあ。で、どーするんすか」

「ゴネられる前にばつくれるわよ。さつさと乗りなさい」

「良いのかなあ…」

後ろめたそうな表情で依頼人を眺めるおキヌを助手席に押し込み、何となくばつちい横島を後部座席に蹴り込む。

運転席でキーを捻り、タオルを一枚後部座席に投げながら、そのまま流れるような動きでアクセルとハンドルとサイドブレーキを操作。180°ターン。

呆けたままの依頼人と、「お母様に叱られるわ〜」と慄いている冥子を置き去りに、嫌な事があつた場所からとつと離れたい、と言つた様子で、美神はアクセルを踏み込んだ。

その夜、六道邸にて。

「ん〜」

「あら〜？冥子どうしたの〜？」

その夜、六道邸にて

「あ、お母様〜」

「珍しいわね〜貴方が考え事だなんて〜」

「そんな〜、お母様ったらひどいわ〜」

なんとものんびりとした会話を交わす、六道冥子。

が、その余裕も眼前の女性がまとう雰囲気が一変するまでだった。

「そんなことより〜、貴方、また除霊に失敗したんですって〜？」

「あ〜、ごめんなさいお母様〜！」

それまで冥子の影の中で大人しくしていた式神達が、その女性の放つ威圧感とともに冥子にプレッシャーをかける。

母と呼ばれたこの女傑こそ、六道 冥華。<sup>メイカ</sup>

先代の式神十二神将の主であった。母子だけあって、その面立ちは良く似ているが、こちらは着物の着こなしからして熟練された「大人の風格」がある。

「で？ 何を考えていたのかしら？」

「えつくえつく、お母様酷いわ〜」

しばらくの間、奪われたコントロールを返してもらってようやく一息ついた 何処となく煤けている 冥子と、母の会話は続けられる。

中心は久しぶりに出会った旧友たる美神と、その従業員であり「六道に伝わる」十二神将に「異常に懐かれた」少年、横島 忠夫である。

「…そんなはずは無いわ〜。あの子達は先祖代々伝わるれっきとした『六道家の式神』よ〜？」

「え〜、でもでも〜」

「そんなにほいほい懷いてちゃ〜、式神としては致命的よ〜？」

「…ほんとなのに〜」

拗ねた顔をして部屋を出て行った娘を見送った後。しばらく、そ

の絶えない笑顔の裏で何かを考えていた冥華は、なにかに思い当たったような、同時に凄まじく、ここ数年、睡眠中以外は殆ど崩さなかつた笑顔を忘れるほどの驚いた顔をした後、軽い音を立てて手を叩く。

「フミさん。フミさんはいるかしら」

何事もなかったかのように、筆頭侍女を呼びつける。

「ここに」

何処からともなく、音どころか、気配すら出さずに背後に現れた懐刀の侍女に、全く崩れない笑顔で。

「お願いがあるの」

「ハッ」

冥華は、お願いと言う名の『六道家当主としての命令』を出した。

「やあ」 また来てくれたのかい？

客人も来なければ、動き出す歯車も無い。

そんな時間に比べて、ここ最近の時間のなんと「楽しい」こと。幸せすら感じるね。

見えるかい？あの歯車が。一つの歯車の動きが、次の歯車を動かし、その次の歯車を動かす。

しかも、この歯車って言うのが曲者だ。予想なんかできやしない。ついでに言えば、分かっているかな？ 君もまた、私と同じなのさ。

君は、一体何を見ているのだろうかね？

答えは、自分で、見つけたまえ

それでは、良い夢を。

「あー寒かったでござる。しかし、あの女、何が「すべて凍るはずなのにー！ー」でござるか」  
「……」

「あの程度で、この犬塚シロに流れるエモ・・・ごほんっ！もとい、兄上への想いが凍るわけがないでござる！」

「……………」

「どうした〜狐 そんなに凍ったことが悔しいんでござるか」

「…グルルッ！」

「わーっはっはっは！ ん〜どっちに行くでござるかな〜？」

ぴた（止まって）。じーっ（何かを確認した後）。…ふっ（もう一人に向けて嘲るような笑みを浮かべて）。ずだだだだだっ（全力疾走）

「ちょっ！ まてーい！ このクソ狐ー！！」

「しくしくしく…この世にまだ凍らせられないものがあるなんて…  
また雪女修行のやり直しね」

## 第七話

ボロボロになつて吹き飛んだ玄関、もうもうと煙を上げるそこからふらふらと千鳥足で出て来たのは、顔を朱に染めた酔っ払いもだつた。

各々刀を持ったり、全く安定していない靈波刀をぶら下げたり、武器のつもりか酒瓶とたくわん一本まるごとを刀の如く腰に差したりと、一言でいうなれば「駄目だこいつら…はやくなんとかしないと…」である。

「くおらああああ！ ポチさーん！ 出てこーい！…ヒック」

「ずるいぞー！ 犬飼家ばかり良い目見やがて…ういっ」

「くおのエロエロむつつりー！ ケタケタケタケタ！」

「ひっく！というわけでえゝ殴りこみなのだうおぼろろろろえー」

当然ながらそんな彼らを目にした彼らの上司たる里の長は、酔っ払いどもを成敗する為にこちらも武器を構えた。

長老は額にぶつとい血管を浮かべながら、へらへらと笑つたりあるいは蒼褪めて入口の影に蹲っている輩共に躍りかかる。

「こーの、馬鹿たれどもがあああああつー！」

先日からの庭の占拠の事もあつてか、大分腹にすえかねていたよ



うで、結構な勢いで振り回された霊波刀に叩かれてぽんぽんと飛んでいく酔っ払い達。

すっかりバーサーク入った長老の振り回す霊波刀と、吹き飛ばされた彼らと、ふらふらながらも相手が誰だか分っていない様子で反撃に出る酔っ払い。

当然ながら酔っ払いの攻撃がまともに目標に行くわけもなく、殆ど適当に暴れ回っているだけである。

酔っ払いが頭から突き刺さって破れる障子、割れる窓ガラス、吹き飛ばす襖、ひっくり返るちゃぶ台、真つ二つになる絵、霊波刀に切り裂かれあつという間にボロボロになる畳。

「あああああつ！ 拙者が描いた沙耶の絵（等身大・輝く笑顔ばーじょん）がああああつ！」

途中で家主の寝室に飾ってあったらしい入魂の一作が破れたようだ。

怒りで増えたバーサーカー二体目が、殺意の波動に目覚めながら戦場へと突撃していくのを横目に、犬塚はぽつりと呟いた。

「…あいつ妙な所で器用だな」

一向に収まる様子の無い騒ぎをよそに、犬塚は一人安全圏である庭の外まで非難しており、どこからか飛んできた絵の残骸に描かれた、それはもう気合いの入ったフルカラーな全身が描かれた彼の妻の絵を見て、気楽に呟いた。

今度娘の絵でも描いてもらおうかな、と思いつつ、彼は庭の地面に突き刺さって気絶しているアホ達をてきぱきと縛り、医療班の所へ御世話を押し付けに歩き出す。

と、いうわけで。突如として酔っ払った嫉妬狼侍どもの襲撃を受けた犬飼宅では、相変わらざるの混乱が起きていた。

「あー。ポチさんが増えたー。ヒック」

「むう・・・分身の術かつ！ 流石だなっ！ ……ういっ」

「エロさも掛け算だー。ケタケタケタケタ」

「（気絶中）」

「全員其処になおれー！ 沙耶（の絵）のかたきiiiiiiiiっ！  
！！」

「はっ！ 落ち着けポチッ！！ 流石に真剣はまずいぞおおお！」

「おーやれやれー。あ、ポチー？ あとでうちの娘も描いてくれ」

「犬塚ああああっ！！！！ お前もポチを止めんかああああ！！  
！」

里は今日も平和である。

さて、そんな里の日常はともかく、こちらは東京。

そこで生活を始めた横島の朝は、早い。

「いてててて… 梃子摺らせやがって」

都会のコンクリートビルに囲まれた木造アパートを日の出より早く抜け出した少年は、今、東京を遠く離れた山中にいた。

「今日の戦果は猪が二匹に鴨が一羽か。よしよし、好調好調」

そう呟く彼の手には、狼としての本能をフルに使った「狩り」で手に入れ、既に血抜きなどの下処理を済まし、ロープで吊り下げられた猪と鴨があつた。事務所での給料では賄いきれない栄養を、自給自足で確保しにここまで 散歩がてらに 来ていたのである。

「あ、そろそろねぐらに戻らんと、遅刻しちまうな」

そう言つて鼻歌交じりに山中を自動車並みの速度で、しかも獲物を肩に担ぎながら駆け出す横島。

東京に来てはや一カ月。当初は不慣れな環境で迷子になったり、ふいに襲撃してくる冥子とその式神達に絡まれたり、時給250円では家賃と切り詰めた生活費で精一杯という事に気づいて「東京って建物も物価も高いっ！」と驚愕したり、その他色々と問題があつたものの、すっかり都会での生活にも慣れ、今では毎朝狩りに出か

けられる程度にはなっていた。

そんな彼は、無駄にサバイバル技能と適応力の高い、都会に暮らす半人狼である。

そして日もすっかり山裾から顔を覗かせ、都会の喧騒が一気に目覚めて騒がしくなった頃。

G S 美神除霊事務所は、一人の客人を迎えていた。

応接室のソファーに腰掛け、目の前の友人であるぽやばや雰囲気  
を漂わせる女性と雑談に興じながら、美神はその最中に飛び出した  
とある人物の名前に驚きを露わにする。

「ドクター・カオス？ …… ってあの、錬金術師の？ まだ生きてた  
の！？」

「そうなの……」

その友人、G S 六道冥子はケーキをつまみつつ、フォークをぶら  
ぶらと、言うには遅い速度でふらふらと揺らしながら、その時の  
事を思い出す。

「古代の秘術を使って、不死になったのは良いけどここ百年ほど姿  
を晦ましていたじゃない……？ それが今、日本に來ているのよ」

」

「へー。どうして知ってるのよ、冥子？」

とは言え驚きはしたものの、商売敵になる訳で無し、まあそんなに自分に関係は無いだろう、とふんで、あまり興味を引かれた様子もなく、こちらはさっさと食べ終えたイチゴシヨートを片付ける令子。

「この前、空港であってサインもらっちゃった」

「…有名なら誰でもいいのね」

「でも、聞いた話だけだと、なんとなく怖い人かもしれないじゃない」

そんな相手からどうやってサインもらったのかしら？ その疑問が表情に出たのか、冥子はその理由を告げる。

その理由を軽く答える冥子であった、がその際に飛び出したまた別の人物の名前で、事態は急転する。

「たまたまその人と一緒にいたお友達に頼んだら、快くサインしてくれたわ」

「オトモダチ？」

その「お友達」に心当たりがあるのか、イヤーな雰囲気を漂わせ始める美神。

「うん、エミちゃんよ」

「小笠原 エミっ!!」

二人の共通の知り合いであり、美神にとっても商売敵であり、ライバルであり、そして因縁の宿敵である女性であった。

都内・某所

ここで日付は一日戻る。

「と、いうワケで、このGS小笠原エミが、あんた達と協力することにしたってワケ」

「なるほどのう。その、美神令子とやら、たしかに求め得る素材としては申し分ない。我が秘術の栄えある被験者としては、文句なしじゃな」

「イエス。ドクター・カオス」

ある喫茶店では、今日突然訪れた不幸を店長が店の裏で嘆いていた。

今日の朝までは平和だったのだ。ビル街の狭間、主要道路から一本外れた土地であるにも関わらず、それなりには存在する常連の客に何時ものモーニングセットを出し、自慢のコーヒーで目をしゃつきりと覚ました会社員たちが職場と言う戦場へ出かけていくのを見送った。

その後は時折ベルを鳴らして入ってくるまた別の常連達 何時も新聞を30分きっちり読んで、コーヒーを二杯飲んで出勤していくどこかの重役や、徹夜の仕事明けで朝食を食べながらうとうとしている若い社員、ほぼすっぴんで訪れてはカフェオレ一杯を飲みながらものの数分で化粧を完成させ、別人のような風貌で契約先へと出撃していくOL、そんな人達に憩いの一時を提供する筈だった。

しかし、今日はそんな常連達も店内を覗くなりUターンして出て行った。

「くつくつく。これで、私はあんのにつくき令子を消すことができるし」

「わしは目的を果たすことができる」

「くつくつく。笑いが止まらないワケ！ おーっほっほっほー！」

「わーっはっはっはー！！」

「そこでよ、まず

」

「なるほど、しかしそれならこうした方が」

「レコード・開始します。演算・開始。ドクター・カオス・情報出力媒体の・使用許可を・求めます」

せめて隅でやればいい物を、店の真ん中のテーブルで怪しい雰囲気をつんだんに撒き散らし、時折高笑いや含み笑いを放つ三人組。

一人は見た目は綺麗な、褐色の肌と長い黒髪の美女。きっと静かにコーヒを飲んでいれば非常に絵になるであろうし、眼福であつただろう彼女はしかし、周囲の視線も気にせず高笑いを放ち、誰かに向かって呪詛を吐き、と迷惑度では一番だつた。

もう一人はこれまた非常に奇妙な女性だつた。

短めの赤に近い桃色の髪をした女性は、見た目はまさに人形の如く整つていた。

しかし、動くごとに小さく機械音がしたり、妙に片言だつたとはつきり言つて怪しい。

付け加えるならカチューシャから突き出しているアンテナがさらに怪しい。

が、怪しさだけで言うならば残つた一人も負けてはいない。

皺と年季の入った風貌、整えられた白髪、見た目外国人なのに異様に上手い日本語、そしてなによりも季節と場所を無視した吸血鬼のようなマントと服。



「どこの中世貴族ですか、と言っかなんのコスプレですか、と言った服装ながら、妙に威厳と風格のある老人である。」

「そんな奴らが店の真ん中で怪しい会話に耽っているのだ。」

「当然客は帰るし営業妨害甚だしい。」

「店長ー。今日はもう店閉めましょうー」

「…いや！ 負けはせん！ いままで幾多の地上げにも負けず、毎日店を開き続けてきたこの私が、この程度の嫌がらせで屈するわけには…！」

「でも、あいつらコーヒー2杯でもう3時間も粘ってるんすよー？」

「…あれでも客。あれでも客。あれでも客。あれでも客。あれでも客。あれでも客…」

「あー。もう、しょーがねー人だこと」

結局その日は6時間ほど新しく注文もせず、コーヒーのお代わりも無しに居座った彼らが帰った後、店長は塩をまいてそのまま店を疲れた表情で閉めたのだった。

そんなことが昨日あったとは露知らず。今日も今日とて事務所に元氣良く出勤する横島である。

「しまったなー。里じゃねーんだから竈も鍋も無いのすっかり忘れてた　　ん？」

早朝にゲットした獲物を調理しようとして道具が何もない事に気付き、残り少ない現金でどうやりくりして料理道具を入手しようかと悩む彼であったが、出勤時間まで残り少ない事に気付いた。

捨てるのも勿体ないので大家の老婆に全部渡し、今日の食事は事務所でなんとかしてもらおうと鼻歌交じりに通勤路を歩いていた所で、ふと、その前方に立ちふさがる2人の女性を発見。

忠夫リーダー、感ありっ！！

総員、対衝撃よーいつ！

はっっしんっ！！

残像さえ残さず接近すると、

「おねーさんがたっ！　嫁に來ないか？」

「対象・接近を・確認。捕獲モード・作動。捕縛用スタン・ガン発射」

そして、真っ黒いコートを纏った女性が、その手首から飛ばしてきた先端に端子のついたワイヤーにあっさりと絡めとられ、黒焦げ

になって昏倒した。

「…ちょっと、マリア。これ流石にやりすぎなんじゃない？」

「ノー。ミス小笠原。収集したデータによれば・これ以下の電圧では・作戦開始前に逃亡する可能性・70%オーバー」

「70%オーバーって…流石人狼なワケ」

黒焦げ、というか炭になった横島に、その2人の女性は近寄っていった。

小笠原と呼ばれた女性に、人狼についてなにかとんでもない勘違いを与えたようではあったが、ともあれ彼女達はてきぱきと横島をロープで縛ると、近くの路地に止めてあったワンボックスカーにマリアが抱えて連れ込んでいく。

（小笠原さんとマリアちゃんかー。しっかりと美女の名前を覚えたぞう！…がく）

とは言え、今まさに絶賛拉致られ中の横島は、気絶しながらも余裕があるようだ。

その夜。

GS美神除霊事務所は、ここ最近の三人組でなく、美神とおキヌのみという2人で今回の依頼人、いわゆるヤーさんの大手、地獄組・組長宅にいた。

どうも最近身の回りで警察に出頭しろだとか、自首して罪を償えだとか言う不気味な声とともにポルターガイストが発生し、夜も眠れないと言う彼の顔にはくつきりと隈が浮いており、かなり消耗している様子である。

そんな依頼人、しかも高額報酬を約束してくれた組長を前に、美神はイラついた雰囲気隠そうとしてもいない。

（横島君が来ていない。前日までの情報を踏まえるとこの仕事にエミが関わっていることは間違いない。と、いうことは）

「ふ、ふふふふふっ！」

おキヌと組長に背を向けたまま、不気味な笑い声を洩らす美神。

突然発生した迫力ある彼女のオーラの前に、慣れない二人は思いつきり背筋を震わせていた。

「ゆ、幽霊の嬢ちゃん、美神さんはいったいどうしたってんだ？」

「さ、さあ。今朝からあんな調子で…」

「ふふふふふふふふふふっ！！！」

昨日までの不可思議な呪いよりも、とりあえず目の前の夜叉の方が危険だと感じたヤクザの組長は、護衛人からの距離を大きく、おおく開けたのであった。

「と、いうわけで、だ」

組長宅より少し離れた公園で、人払いの結界を引いたエミとカオス、マリア。

周囲は鬱蒼とした木々に囲まれ、また公園の中心部からも離れているせいか辺りは電灯の明かりがあっても薄暗く、また地面に描かれた複雑な魔法陣も相俟って、サバトでも開かれそうな雰囲気となっている。

「今日の材料はこの半人狼の子と、イモリの干物、鼈、マンドラゴラ、玉葱、その他諸々の呪術材料ってワケ」

「ひー！イモリと玉葱はだめっスーーーー！！！」

そして、なんというか、禍々しさを十二分に放つたたくさんの怪しい物体（と、玉葱）に囲まれた、鎖でぐるぐる巻きの忠夫の姿があ

った。

「安心するが良い小僧。今回のお前の役割はいわばブースターと対美神令子用の霊波コーティングじゃ。手強い相手のようじゃからな、そやつの霊力に対抗するには、その霊波を日常的に浴びて、慣れたお前さんが丁度良かったもんでの」

「私が送り出す呪いの力をあんたの血の力で増幅して、それをあのじいさんがマリア用に調整！」

「その力に更におまえさんから取り出した…アンチ美神フィールド、とても言うかの。それを転用しつつ、マリアが目標を撃破」

「そして護衛がいなくなった依頼対象をじつくりと「説得」するってわけ」

「「完璧なワケ！（じゃっ！）」」

「マリアちゃん、って言うんだよね。可愛いねー。ねね、歳いくつ？結婚の予定とかある？ 嫁に來ないか？」

「ノー。その質問に対し・回答権は・与えられていません お褒めの言葉に対し・アリガトウト・のみ返答させて・いただきます」

「聞きなさいよっ！」

「…余裕じゃのー小僧」

上機嫌で今回の作戦を説明していたエミとカオスをよそに、マリアと共になんだかい雰囲気の下地を作り始めていた横島は、二人

の突込みに対し「やれやれ」といった表情を浮かべると、答えた。

「あんたらさー。わかってないと思うよ?」

「なにをよっ!?!」

「…ふむ? 面白い事を言うのぉ」

「…横島・さん? マリア・信用・できませんか?」

「「…へっ?」」

出会ったばかりの協力者ならまだしも、数百年一緒に存在していた製作者でさえ全く予想外の疑問符を放つ人造少女に対し、横島は慌てて言葉を続ける。

「いやいやいや! そーゆうことじゃないんだってっ! マリアはすごいと思うよ、実際!」

「…アリガトウ・と返答させて・いただきます」

「あの一、マリア?」

自分の知らない姿を見せられて、なんとなく戸惑う製作者を余所に、なんとなくさっきの続きをはじめそうな二人であったが、イラついた様子で、今度は褐色の肌を持つ女性が激しく問い掛ける。

「それじゃーどー言うことなワケっ?!」

「相手があの美神さんだってことっすよ」

「ワケわかんないわよっ！」

「つまりですねー、そのー、実はですね？ …一度しか言いませんから、良く聞いてくださいよ？」

「くだらない前置きは良いからさっさと」

苛立った様子で横島の胸ぐらをつかみ上げるエミ。

ドクター・カオスもまた興味深げに彼の言葉の続きを待っていた。  
が、その続きが語られるよりも早く、彼女達の背後の茂みで靈力の輝きが膨れ上がる。

「ふっふっん。やあっぱり横島君を拉致ってたわねっ！ 見つけたわよ、エミッ！！」

「…あの人は、「性格的に」攻める方が得意なんですよ」

突如エミの背後にあつた繁みを掻き分け現れたのは、亜麻色の長髪を持ち、神通棍を構え、戦闘態勢万全の美神令子とおキヌ。横島と話していた為に完全に不意を撃たれ、しかもその特性から接近戦



の苦手な小笠原エミは　その奇襲の一撃で落ちた。

実は忠夫、東京に来てすぐに、そのあまりの人の多さと交通の複雑さに大混乱を起こし、迷子になって「えぐえぐ」と泣いて歩いていたところをおキヌに保護された、という事実があった。

それならば、迷子になったときの為に、とバンダナに発信機を付けていた美神であったが、六道冥子襲来時にサンチラの電撃によってあっさり故障。こういった仕事で、迷子で助手が使えませんでしたー、では話にならないと、耐電、耐水、耐熱、耐衝撃の高価な発信機に付け替えたのである。

「いちいちぶっ壊れるような奴を使つてたんじゃ、経費も馬鹿にならないからねー」とは美神の弁。今回は、その発信機が思わぬ効果を表した結果となった。

「ふむ。あっさりとこちらの計画が潰されてしもーたか。」

「ドクター・カオス。ミス・エミの脱落により・勝率・ダウン。撤退を・推奨・します」

先ほどまでの戸惑った雰囲気はすでになく、味方の脱落さえも冷徹に受け入れるドクター・カオス。

そしてその娘、マリア。

「あんたが『ヨーロッパの魔王』ドクター・カオスね」

「いかにも。して、美神とやら、小僧の方に気を引かせての奇襲とは、なかなかやるのう」

「…なんのことよ？ あんた達が勝手に横島君に絡んでたんでしょーが」

「なるほど、一流の呪術師が結界を抜けられて気付かない程興奮しているとは、妙に挑発めいた戯言だとは思っていたが お前の策略か、小僧」

そういつて、横島を眺める目線には先ほどまでは確かに欠片も感じさせなかった、超一流を超えた錬金術師としての、深い 正に深海のような 知性と、底知れなさがあった。

しかし、その人類の超越者に対し、

「え、なんのことっすか？」

と返す、悪戯の成功した子供ののような顔を、隠そうとして隠し切れていない横島。

「…ふ、は、はははははっ！！」

そして、堪え切れなくなつたように大声で笑い出すと、そのままロングコートを翻して夜の闇へと消えていくカオス。

「行くぞ、マリア！ 今回はわし等の負けじゃ！」

「イエス。ドクター・カオス」

彼は、自らの最高傑作である人造少女を共に、そのまま公園の外へと歩き出していった。

「ほーっほっほっほ！これで20勝18敗1引き分け！私の勝ち越しねっ！」

「うっうっ…次こそ見てなさいよ令子おおお…」

「美神さん。そんな死人に鞭打つようなことしなくても」

「甘いわよ、おキヌちゃん！！この前は私が黒星だったんだから、これぐらいはぜんっぜんOKよ！おーっほっほっほ！…！」

その後ろでは、臍をかむエミと、それを足蹴にしている得意絶頂の美神、それを宥める幽霊少女の姿があったが。

「…くっくっく。面白い小僧じゃ。なあマリア？」

「その問いに・答える・機能・持ちません・ドクター・カオス」

「ならば、こう問うでしょう。あの小僧に、また会いたいか？我が娘よ」

「…イエス。ドクター・カオス」

「わーっはっはっは！…！」

「どこでござるかあっ！！狐えええっ！！」

意味深な笑いを浮かべて走り去ったタマを追いかけてシロが見たものは

「…狐が9匹いつ？！」

強烈な妖気を漂わせる岩を囲み、タマが9匹・・・綺麗な円を画いて遠吠えを繰り返す様であった。

『くおおおおおん』

鳴き声が共鳴しあい、その響きがあたりを満たすと共に、その中心から沸き出でる妖気はその密度と、量を増し、

『くおおおおおおおおおおん』

！

一際長いその鳴き声の元 砕け散った。

舞い起こる粉塵に視界をふさがれ、あたりに満ちたあまりにも強烈な妖気は人狼の鼻を狂わせ、シロに見えたのは、その衝撃に巻き込まれる9匹の九尾の狐と

「狐ええええつ！」

その姿が、9本の光り輝く金色のナニ力となって、混ざり合う光景だけであった。

「やあ」 また会えたね。今回は残念ながらこの後用事があってね。あまり相手をしてあげられないんだよ。

だから、手短にお話をするでしょう。君は、磁石というものを知っているかい？そう、あの、子供の頃に君達ならば一度は触れたところのあるあの磁石だよ。

アレを砂場に落としたことはあるかい？

するとだねえ、真っ黒い小さな者達がたっくさんくっついてくるわけだ。

何が言いたいのかって？ 私が、今まで、君に伝えたくて話したことは、全て無関係なことではないよ？ もっとも、戯言の中に含まれるソレを見つけるのは君だ。

『今の私は観察者。』

只見つめる存在なのだから。

おっと、お呼びがかかったようだ。それでは、今日はこの辺で。

良い夢を。

## 第八話

その日、GS美神除霊事務所で、美神は窓の外に降る雨音と、電話の応対に出ているおキヌの声を聞くとともに無しに聞きいていた。

「はい、美神さんは今日は靈的に良くない日だから、予定を変更したいとおっしゃってまして、どうもあいすみません」

天気予報では一日中振りつづけるらしい雨が事務所を包む。降りしきる雨に打たれ続けている事務所には、すっかり互いの存在に慣れた三人の姿があった。

事務所の内務係が板についてきたおキヌの後ろには、ソファアに寝っ転がり雑誌を読む美神と、その傍にぼけーっと立って外を眺めている横島。

おキヌが電話を置いたチン、と言う音にふと、特に意味もなく口から押し出されるようにして忠夫が美神に話しかける。

「雨が降ったから仕事は休みですか。大名商売やなー」

「この雨の中一晩中墓地にいたい？ギャラも安いのに私はやーよ」

別に責めるような雰囲気は無く、ただちよつとした雑談と言った風に話しかけた横島の問いに、やる気の欠片も見せずに答える美神。

大して面白くも無かったのか、ページの中ほどまでしか読んでいたない雑誌をテーブルの上に放り投げて身体を起こし、美神は大き

く背伸びをした。

閉じられる事無く中を見せたまま放りだされた雑誌を拾い、代わりに電話が終わってすぐお茶を入れてくれていたおキ又が美神の前にティーカップを置く。

軽く礼を言つて一口啜り、会釈を返して今度は横島にも飲み物を届けに飛んでいくおキ又を見送りながら、美神は睨みつけるように雨雲を見る。

「それに、今夜は私の靈感がずくのよ。なにか事件が舞い込んできそうな予感がするの」

不敵な横顔を所員達に見せつけながら、美神は続ける。

「…大きくて、とても厄介な事件が、ね」

厄介、と言いながらも美神の表情には不安は窺えず、むしろその事件を待ち望んでいるような様子さえ垣間見えた。

その答えを聞き、考える表情になった横島は、おもむろに美神に接近。

その鼻の頭を舐めた。



「なにすんのよこの馬鹿犬っ!？」

当然のごとく繰り広げられる阿鼻叫喚の地獄絵図。その中でも、横島は

「…ふ、ふ、ふ。お、俺の行動までは美神さんの靈感も察知できなかったようですね」

「…脳みそぶち撒けなさい」

とつても馬鹿だった。

横島に絶対零度の視線を向けながら、美神は三割増に光り輝く神通棍を振り上げる。横島忠夫、絶体絶命の危機。

「ちよつ、まつ、美神さんそれは死ぬっ!？ おキ又ちゃんヘルプーっ!」

「死んだら私の仲間ですね」

そして美神の神通棍が今にも振り下ろされようとするその瞬間、玄関のチャイムが機械音を立てて来客を知らせる。

横島を救ったのは、笑顔のままで美神を止めなかったおキ又ではなく、突然の来訪者が鳴らした玄関のチャイムであり、その来訪者に彼は心からの感謝の念をドア越しに贈ったのだった。

翌日、イタリア、ローマ空港

「へー、いたりやって空港ってところにそつくですねー」

「……空港なんだってば」

明くる日の昼下がり。早朝の便で東京を出発した事務所員たちの姿が、日本から遠く離れた地中海の国、イタリアの首都にあった。

「……これは夢だこれは夢だあんな馬鹿でかい鉄の塊が空を飛んだのは夢だったんだっ！ 絶対にそうだ間違いない間違いないはずだああああっ！」

「うるさいわよ」

物珍しげにきよろきよろと周囲を見回しながら、しかし平然としているおキヌを余所に、忠夫は初めての飛行機体験にちよっとトラウマっていた。

虚ろな瞳で空を睨みながら、ぶつぶつと同じ言葉を繰り返していたかと思うと、突然頭を抱えてわめき出す。

周囲の視線を集める事に恥ずかしくなった美神は、そんな田舎者に迷わず突っ込みの一撃を叩きこんだ。

初めての飛行機にとち狂った横島を、腰の入った振り下ろし気味のフックで元に戻す美神。

頭に直撃をいただいて、しばらく唸りながら蹲っていた横島の目に光りが戻る。

「…はっ！ ここはどこだ！ 外人のおねーさんがたがいつぱい？！ここは極楽かああっ！！」

「本当に逝つときなさい！」

かなり本気の込められた一撃で、今度こそ正気を取り戻した横島であったとさ。

「シニヨリータ美神！」

「どーも」

「おう、ピートじゃないか」

「ピートさん」

人込みでこつた返す空港で、美神たちに声をかけてきたのは、昨日、美神曰く「大きくて、厄介な事件」を持ち込んできた依頼人のピート。彫りの深い、整った顔を持つかなりの美形である。

「お前も大変やなあ。あの後、こつちにとんぼ返りやったんやろ？」

「まあ、事態が事態ですから」

親しげに話し掛ける横島に対し、そんな彼にほんの少しの警戒心を持ちながら答えるピート。

ちなみに、犬飼忠夫、相手が美形だからってあんまりどうこう思ったりはしない。なんてったって実の父親が「アレ」である。

あの、凶悪面で、泣く子をひたすら謝ら「せた」という伝説を持つ犬飼ポチである。そのポチが、とっても優しい美人を嫁にした、しかも押し掛け女房で。

それは今でも人狼の里、七不思議の一つのとなっているが、そんな凶悪な風貌の父親を持つ彼である。

いまさら顔なんぞで自分の理想の嫁さんが簡単に手に入るものでもない、と幼少の頃からなんとなく悟っている。

しかも、だ。

彼が来客としてあの雨の日にこれ以上ないグッドタイミングで訪

れてくれたおかげで死なずに済んだという、ある意味命の恩人であるからして、生まれ育った環境もあってか、彼には結構恩を感じており、悪い態度を取る筈もない。

また見た目には同年代である事も手伝って、それなりに親しさを籠めた対応を取っているのだ。

余談ではあるが、かの伝説を作った後、その現場を妻に見られ、3日程生死の境をさまよい、さらにその後誤解を解くまで全く喋ってもらえず、その度に泣きながら長老宅でやけ酒と愚痴に付き合わされる羽目になり、長老がとっても迷惑したそう。

「え、ええと、お疲れでしょうが、時間ありませんのでまっすぐにチャ ター便までお願いします」

乗り込むときに横島が抵抗したので一悶着あったものの、とりあえずぼろっちいプロペラ機に乗り込むご一行。

が、そこには美神と横島にとって、あるいはこの先の命運を占うような人物達の姿があった。

「あゝ令子ちゃん」

「令子ですって?! なんてあいつがここにいるの?!」

「げっ! 冥子にエミっ! まさか、協力するGSってあんたたちのこと?!」

外観どおりせまっ苦しいキャビンには、先日出会った式神使いのGSである六道冥子と、横島を攫って怪しい儀式に使おうとしたG

S、小笠原エミが驚きの表情でこちらを見ていたのだった。

昨夜、東京・GS美神所霊事務所

「今回の依頼ですが、貴方の師匠であるGS唐巢神父からの依頼でもあります。報酬はこの黄金の鷹の像 歴史的にも貴重な品です。それと、相手が相手なものですから、あなた方以外にも、何名かのGSに協力をお願いしています」

「そんなに厄介な相手なの？ 私と先生の二人でもまだ足りないほどの？」

「ええ。とても手ごわい相手です。…あなた方も十分に気をつけて」

それだけを言い残して、ピート・ド・ブラドーと名乗った青年は事務所のドアを閉め、雨の中外へと出て言った。

「ふーん。報酬は文句なし。さっすが先生、わかってるじゃない」

「へー、美神さんに師匠がいたんすねー」

「まあ、ねえ。それにしても、あの唐巢先生が私以外のGSに渡りをつけなきゃいけないほどの相手、ねえ」

手に持った人の二の腕ほどのサイズはある黄金でできた鷹の像を弄びながら、美神は眉を顰めた。

「すごい人なんすか？」

「ええ。確かに冴えないし馬鹿だしお金に疎いし頭は薄いけど、この業界では、間違いなくトップ10にはいるほどの凄腕GSよ。ただ、教会では悪魔祓いは認めていないから、ずっと昔に破門されたらしいけど、ね。神父っていうのも、通称みたいなもんよ」

半分くらいはボロクソに貶しているような台詞であったが、彼女の表情には負の感情は無く、むしろ苦笑いの方が大きく存在している。

何せ彼女自身の母親も凄腕として鳴らしていたGSであり、そんな母を見ながら育ってきた美神も当時からそれなり以上の自負を持っていた。

そんな彼女が 修行中は金銭面に不満を感じていたとしても 師匠として師事し、現在もその師匠が独り立ちした弟子を応援に呼ぶ程の信頼があり、美神もまた彼を凄腕のGSとして認める発言をする、そんな良好な関係を保っているのだ。

生き馬の目を抜くGS業界に置いて、同業者でありながらも子弟として信頼しあえる相手、それは彼女にとっても貴重なものであつ

た。

「ふえー。そんな人が美神さんの先生なんですか、すごいですねえ」

「そんな先生が、こういう物を報酬にして、しかも複数のGSに声を掛けるって事は…こりゃ一筋縄では行きそうにないわね」

だが、今まさにその師が応援を求めている。

その事実は、彼女にこの先に待ち受ける事態の厄介さを伝えていた。ようだった。

「まあさか、あんたがここに来るとは思わなかったワケ！」

戦闘態勢っ！

「そりゃ、こっちの台詞よ。この前の痛手はもうなおったのかしら?!!」

デフコン1っ！

「……………づう~~~~!!」



…決して、このように因縁の相手と一緒に仕事をしなければなら  
ない、なんて言う意味の厄介さでは無いと思うが。

ライバル同士が視線を争わせ、火花散る視殺戦を繰り広げる傍ら  
では、押し倒され、伸しかかれ、顔を舐められ、巻きつかれ、と  
式神達に一方的に親交を深められている横島の姿があった。

しかし彼も笑顔でそれらを受け止めている様子からすると、特に  
嫌がっている訳ではないようである。

幾度となく冥子が事務所を訪れるたびに繰り返されてきた状況に  
もすっかり慣れた横島は、手慣れた様子で彼らを優しく引き剥がし、  
長い胴体から抜け出し、小脇に抱えて、と手慣れた様子でちゃっち  
やと動けない状態から離脱していた。

そして漸く落ち着いて、十二神将 一部の大きな者達は出てこ  
られなかったようだが 一声かける。

「おう！ お前ら元気してたか？」

ぶるるっ

ヒヒン

シャー

ばうっ

元気に返事を返す彼らの頭を撫でてやりながら、忠夫も顔をほこ  
ろばせていた。一方的とはいえ、好意を向けてくる存在に対し、嫌

な感情を持つのは難しい。

そんな彼らを微笑ましげに前方の座席から眺める二人も、何度か顔を合わせているだけあり、リラックスした様子で互いに挨拶を交わしている。

「あら、おキ又ちゃん。こんにちわ」

「あ、冥子さん。今回もよろしくお願いします」

式神達に纏わりつかれる、ムツゴロウさん状態の横島を横目に、二人の少女は、そのほんわかとした空気に溶け込みながら、雑談に花を咲かせていた。

まだまだ慣れの足りないピートを余所に、なんとも妙な空間が形成されていく。

「え・・・ええと、それでは全員揃ったようなので、出発させていただきます」

とは言え何時までものんびりしている訳にもいかず。

ピートの一声に、各人それぞれに座席に着いたり、シートベルトを締めたり、再び張り付いていた式神達を和やかに話す主人を余所に、勝手に一声をかけて戻ってもらったりと用意を整えていく。

「え、ぴーとおもっとゆっくりしていきましようよお」

「いや、そういうわけには...」

「…ふ、色ボケ女」

「…レズは黙ってるワケ」

「「やるかつ?!」」

が、一部はそんなの関係ねえ！ といった様子でいがみ合い始めていたりもする訳で。

なんでも無い一言であっさりと再開された夜叉達の視殺戦に気おされ、思わず横島の背後に隠れるピート。

「おいっ！ なんだあの二人一緒に声かけたんじゃっ…！」

「そんなこと言われても、僕は先生の言われた通りに…！」

睨みあう二人を背景に、横島とピートはこそこそとしゃがみこんで小声で怒鳴り合う。

その視線がゆっくりと背後の掴み合いを始めた美神とエミ、その間に割り込んで宥めるおキヌへと向かう。その向こうではシートベルトを締めて大人しく座席に座っていた冥子が今にも泣きそうになっ  
っており。

「互いに生き残れるように頑張ろう」

「協力、感謝します」

引き攣った笑顔で肩を組む美神とエミを尻目に、二人はがっちり

と握手をするのであった。

「ところでピート、この車は何処を走るんだ？」

「へ？ これは飛行機ですから、勿論飛んで…」

「馬鹿だなあピート君は。空を飛ぶのは鳥だけで十分だぜ？」

ああもう駄目かもしれない、とちよつとイラツとしながら彼は心から思つたそうな。

その後も色々ごたごたは有つたものの、飛行機は無事、乗り換え地点の島に到着し、そのまま近くの港で借りた漁船に乗り換え、目的地ブラドー島へと一行はその足を伸ばす。

彼女らとしても、吸血鬼の活動できない昼間のうちにできるだけ接近し、あわよくばブラドー島内部に橋頭堡を作っておきたいという考えがあるからだ。

美神、エミ、ピートの三人は、漁船から降り立つと、海鳥の声一つない不気味な静けさに包まれた砂浜を警戒していた。

「…妙ですね」

「…ええ。見られてる感じはするのに、ここまで接近しても全く反応が無い。静か過ぎるわ」

ブラドー島至に辿り着いた美神達。しかし、彼女達のとおり、全く持ってそれに対するリアクションというものが無い。

「やーな予感がするワケ。いったん撤収して、ここは様子を見たほうが良いんじゃない？」

「しかしっ！こうしている間にも先生たちがっ！」

ある意味冷たいエミの言葉に、ピートは彼女に詰め寄り激昂したが、その焦り混じりの怒りを目にしても、エミは冷静な表情を崩さない。

突き放すようではあるが、先ず情報と退路の確保はやっておきたい、それは普通のGSなら当然の思考であり、また彼女達はその道の一流のプロ。

命の賭け所を間違いたくは無いし、そもそも命を賭けるような事態に陥る事こそ失態でもある。

「で、突っ込んでいって私達もピンチって言う展開が望み？」

「っ！」

眼前に突き出された指と放たれた言葉、二つに動きを止められたピートは、それでも何かを反論しようとして、その口を開く事無く悔しさで食いしばるに止めるのが精一杯だった。

「頭を冷やすワケ。そうカッコしてたんじゃ、まとまる考えも纏ま

らないワケ」

「…で、エミ。ほんのところ、どう思う？」

ふと、なんでもないことのようにエミに言葉を投げかける美神。

「…確かに、誘いにしてはあからさま過ぎるけど、だからといってこのまま引き返したんじゃGSとしての沽券に関する問題なワケ」

「…珍しく意見があつたわね」

だが同時に彼女達は普通のGSでは無く、己の能力に自信と誇りを持ち、傲岸不遜で大胆不敵、そしてそれに相応しい実力を持ったプロであり、その性格ゆえに罠と理解して食い破るって、悔しがる相手を笑ってやる事が好きでもあった。

「…それなら、やることは一つ、なワケ」

二人揃って不敵な笑みを浮かべ、横目で睨み合いながらも、楽しそうな表情。

「「まっ正面から、堂々と乗り込んで、逆に挑発してやるわ（ワケ）！」「」」

これから派手な喧嘩を仕掛ける子供のような顔である。

その頃、飛行機の中で再び錯乱して暴れ出そうとした横島は、美

神に鳩尾に良いのを貰って気絶し、砂浜で騒ぐ美神達を遠くに眺める留守番のおキヌと冥子の足元で、波に揺られて白目を向いていた。

昼間だと言うのにその空間には日の光が一切入り込んでいなかった。真紅に染め上げられた上等な布の掛けられた、玉座に当たるその場所に腰掛けた人物の前に、二つの足音が近づいていく。

不遜なる侵入者を待ち受けていた城主の眼前に、古い記憶の中にある忘れられない顔に良く似た人物が現れた。  
いや、似ているのではない。

長い年月による老化を重ねさせ、面影を残して、しかしその眼だけは相変わらず底の知れない知識と好奇心に彩られている。

「ふん。懐かしい顔を見たかと思えば、貴様が、『ヨーロッパの魔王』」

「ひさしぶりじゃな、夜の王」

「貴様に負けた以上、その名を語るには少々プライドが勝ちすぎだな」

「ふむ、ならば吸血鬼ブラドー、と呼ぶでしょうか」

「それで、何のようだドクター・カオス？ 機械人形を連れて、今度こそ我が存在を滅ぼしにでもきたか？」

男が立ち上がると共に、這い出すように彼から強烈な威圧感が吹

きつける。

が、老人は何も気にしていない様子で口元を吊り上げた。

「いやいや、何　ちよつとした戯れじゃよ」

「失せろ。我を、『夜の王』であつた我を一度は退けた者として、今回だけは見逃してやる」

男は威圧感を収め、再び玉座に腰掛ける。

が、老人は拒絶とも脅しともとれる言葉を受けながら、その余裕の表情は小揺るぎもしていない。

それどころか、久方ぶりの旧友に会つたかのような親しさで、腰掛ける男に話しかけた。

「まあ、そう急ぐでない。一つ、提案をしにきただけじゃよ。老いたりとはいえ、『ヨーロッパの魔王』と呼ばれたこのワシ、ドクタ―・カオスと、その最高傑作『マリア』が、お前の手伝いをしてやるうというのじゃよ」

「…何を企んでいる？」

眼前の老人が放つた言葉の意味を図りかねたか、男は眉を顰めて訝しげに声を低くする。

しかし、老人は黙して答えない。

返答を問うように、楽しげな表情を保つたまま、受諾の握手を求



めてその手を男に突き出した。

「…ここまで入りこんだつていうのに、歓迎のセレモニーもなし？  
全く、ふざけてるんだか、余裕かましてるんだか…」

前進を決定した美神たちが舟を浜辺に固定し、そのままブラド―  
島唯一の村の入り口まで、その歩を進める。

だが、予想していた妨害どころか 村民達の姿さえも見えず、  
ただ、ゴーストタウンが彼女らの目の前には広がるのみ。

「そんなばかなっ！ 先生！ みんなーっ！ 誰か居ないのかあー  
ーっ！」

ピートの声だけが、むなしく響き渡る。小さいながらも、百数十  
人は生活していたであろう村は、不気味な古城に見降ろされながら、  
今は只その抜け殻を其処に残すのみであった。

## 第九話

未だ時計の針は夕暮れ時を指し、太陽はその姿を水平線の向こうに隠してはいない。

だが、その古城の一室では、その光を無視するように蠟燭の灯りだけが彼らを照らしていた。

三十二個の駒が盤面を飛び交い、相手の王の首を掻き切らんとぶつかり合う鬭いの差し手らは、しかしその場面を見てはいない。

駒の移動を指示するのは互いに深く椅子に腰かけた老人と男で、駒を動かすのは彼らからは数歩離れた位置に置かれたテーブルの隣に控えるマリアで、動く駒とチェスボードはそのテーブルの上だ。

盤面を見ずに、マリアの操る駒の動きと同時に一言づつ会話を交わしながら、彼らの局面は進んでいく。

「ポーンをe - 4へ。下の村に住民は存在していない」

「ポーンをc - 5へ。ふむ、ということ？」

ほんの少しの思考の上に前進した黒の駒の隣を、反射にも近い速度の指示で白の駒がするりと掻き分け陣地に潜り込む。

「む、なかなか厭らしい手を指す。なに、半分は我が僕となり、残

り半分はこの島の地下に広がる洞穴に避難しておるのだよ。…ナイトをc - 5へ」

が、白の駒は前線から舞い戻った騎士にその首を刎ねられ、そのままボードの外へと消えていく。

「そやつらを放っておくつもりか？ ルークをd - 4へ」

しかし騎士が抜けたことで密度の薄くなった兵士達のファランクスの中央を打ち破るように、戦車がそのライン上へ躍り出た。

「……いらぬ世話だ。追い詰められた鼠は、猫に反撃することもある。ビシヨップをc - 3へ」

戦車によって開かれた隙間を埋めんと僧侶が立ちはだかる。

が、しかし、その連携は既に断たれ、今となつては最後に王へと振り下ろされるであろう女王の剣を遅らせる程度の効果しかない事は、差し手たちが互いに悟っていた。

「鼠が追い立てられ無いからと静かにしておる道理もあるまいに。まあ、あやつらがこの島の現状を知るには、地下の住民達と合流する必要が出てきた訳じゃな。ならば…」

ドクター・カオスが立ち上がり、静かにその織手で駒を操っていたマリアの前に立ち、一つの黒い駒を摘みあげた。

空を飛んだ騎士は崩れた兵士の列に突き刺さり、女王の為の花道をこじ開ける。

「合流する前に、退路を絶ち、数の力で一気加勢に攻め落とすがよ  
かろう」

白の女王は既に落ち、白の騎士もその動きの中で王を守るには一  
手足りず。

「…ふん、チェックメイト、か。良いだろう。このブラドー、気には  
いらぬが、貴様の指示に従ってやろうではないか」

結果を見ることなく漆黒のマントを翻し、すでに日の落ちかけて  
いる空へ向かって窓から飛び出していく吸血鬼を見送る。

「…くつくつく。さあ、小僧。今度は、どのような悪戯を仕掛けて  
くるのか。失望させてくれるなよ？」

嘯くカオスの前には、白の王をその狙いに収めた、黒い女王の姿  
があった。

すっかりと日も暮れて、丸い月が空にその表情をはっきりと見せ  
始めた頃。

「おーっほっほっほー！！ このGS美神にかかれば、吸血鬼なんて  
ちよちよいのちよいよー！！ しかも報酬アップのおまけ付！ さっ  
さとしばいて、大儲けよっー！！」

「ねえくんぴーとお？追加報酬はいいからさあ、私の事務所で働かない？」

「いえっ！ あ、あの、そのっ！」

「えーなー、えーな。美人のおねーさまに誘われるなんて…なんだかとってもチクショー！！」

「れいこちゃん、これ、とってもおいしいわよ？」

「あは、あはははは…」

麓の村では、とりあえず一番堅固そうな建物に籠り、ピートから相手が吸血鬼であること、この島の住民が全て吸血鬼か半吸血鬼である事、そして、相手がピートの実の父親であることを聞き、交渉の末追加報酬をゲットしたGS陣による大宴会が始まっていた。

「な、何なんだこの人たちのこの余裕はっ！」

周辺の空家から、日のあるうちに保存の利く食べ物と上等そうな酒類を持ち込み、壁や窓に板を打ち付け、玄関を全開にして簡易な「要塞兼罠」を作り上げた後、床下に「ある物」を見つけた美神たちは、一先ず鋭気を養うことにしたのである。「これが日本に古くから伝わる由緒正しき『天ノ岩戸作戦』よっ！」という美神の一言から始まった宴会は、日が沈んでも全くその勢いを衰えさせることも無く続いていた。

天の岩戸で騒いでいたのは外側であつて、内側にいたのは神話の時代の引き籠もりであるが。

「こんなんでだいじょぶなんでしょーか？」

「んゝまあ、大丈夫なんじゃね？ここが相手の手のひらの上つて事は、攻めるも守るもアドバンテージはあっちのもん。あんまり氣を使つても、疲れるだけだつて」

上質のウインナーをかじりながらの横島の台詞は、あんまり説得力が無かつた。

「それに、よく見てみるつて。あの人たちはああ見えてもプロだぜ？酒なんて、始めの数口以外、舐めてもいねーよ」

そういわれてピートがその視線を忠夫から騒ぎの中心へとやると確かにテーブルの上には、散々喰い散らかされたウインナーやらハムやらパンやらの残骸と、ホンの少しだけかさの減つたワインの入っているコップがいくつか。

「確かに……。横島さん、よく見てますねえ」

「わははははっ！！ 美人ぞろいだからな！ 眼福眼福つてやつよ！ ……ちっ！ あわよくば、とかちよつと思つてたのに」

「何か言われましたか？」

「なんも言つてねーぞ！ うわはははっ！」

何故か冷や汗をたらしながらの忠夫の台詞に、不思議そうな目でそんな彼を見るピート。居たたまれなくなったのか、

「ちょ、ちょと小便！」

「あ、横島さん！」

そのまま、忠夫は小屋から飛び出していった。

「うーん！！今日はいいい月だなー」

降り注ぐ月光を浴びながら、気持ちよさげに背伸びをする。

「里の皆、元気にしてっかなー」

そのまま、ふと月を見上げるも、その下に僅かに何か大きな建物から突き出した細長い塔が引っかかってせっかくの月が台無しだ。

残念だなー。：そう思って、しばらく月を眺めていると、その障害物から、小さな、その本来のものと比べれば劣るとはいえ、人狼としての視力が微かな違和感を見つけ出した。

「ん？　なんだ、あれ」

其処に意識を集中して、更に『よく見る』。

「ん~~~~」

その障害物、古ぼけた城の尖塔に、建造物とは違う何かがある。

屋根の上の小さなモノ、それが何かは分らないが、しかし彼の持った違和感が、徐々に焦燥感へと変わっていく。

すぐさま身構えた、その瞬間。その小さなモノが、動いた。

丁度その時ゆっくりと登っていた月が、その尖塔から抜け出し、小さく見える物をはっきりと横島の眼に写し込む。

「っ！！！」

満月を背に、全長2メートルはあろうかという巨大なライフルを構え、こちらを狙う先日出会った鋼鉄の少女、マリア。



彼女はその銃口を、長大な銃身に見合った人では支えきれぬであろう重量と暴力を持つそれを、海に向けて静かに佇んでいた。

「マリア！……ってことは、あの変な爺も居やがるのかっ！！」

瞬間、彼女の持つ巨銃の先頭が光りを放った。

目視できる速度ではないが、ややあつてその銃口の向けられた先で巨大な水しぶきが上がる。

夜空にぶちまけられた海水の中には、粉々に砕かれた漁船の破片が踊っている。

直線距離にして約7？。常識外れの超々距離から放たれた弾丸は、着弾の後で、長く響く銃声を聞かせながら、忠夫たちが乗ってきた舟を粉碎した。

「っ！……しまったぁ！！」

銃声でようやく逸れていた意識を取り戻した横島は、そういつて小屋に向かって駆け出す。彼の背後には、茂みを掻き分け、家のドアを打ち壊し、その眼を真紅に光らせた村人達がいた。

「海の孤島で逃げ道無しとか、えっげつないことしてくれやがるっ！！」

走り出す横島の耳に、今度は別の方角から、しかも今度は連続で

着弾音が響いている。

射手は彼らが狙いではないようだが、その足は一隻たりとも見逃すつもりはない様子で、淡々と同じリズムで引き金を引き続けた。

が、突如その赤熱した銃身が半ばから歪み、最後に放たれた銃弾は何もない海へと突き刺さり水しぶきのみを夜空へかち上げる。

「…間接部・ロック・解除。火器管制・停止。望遠モード・通常モードへ・移行。試作型・長々距離狙撃ライフル・『ベヒーモス』破損、即時破棄。…通常モード・復帰します」

古城の尖塔部、頂上にて、役目を終えきれなかったライフルを投げ捨て、その連続した射撃に耐えるために固定していた関節部を開放しながら立ち上がるマリア。

「……ヨコシマ・さん」

その人工知能に去来するのは、先ほど望遠で捕らえた青年の姿。

「ふーむ、機関部はともかく、銃身が先にヘタリオったか」

何時の間に現れたのか。

階段も無く、マリアでさえ登ってくる為にロケットブースタを使わねばならなかったその場所に、静かにロングコートを夜風になびかせるカオスの姿があった。

興味深げに打ち捨てられたライフルの銃身を、顎に手を当て眺めるその表情にはマリアを責める色は無く、ただ己の思いつきで作った装備品の不足部分をどう改良しようか、と悩んでいるだけである。

「ドクター・カオス。質問を・よろしいですか？」

「ほう？ わしの行動に疑問を持つようになったか。ええぞ、聞いてみる」

「なぜ・このようなことを？」

背中を向けたまま問いかけてくる彼女は、ほんの少しながらも、育ちつつある感情が生み出した不満の色が見て取れる。

それを聞いたカオスは、少し微笑んだ後、大きくその口の端を吊り上げた。

「決まっておる。おもしろそうだったから、じゃ」

「ノー。ドクター・カオス。その答えでは・納得・致しかねます」

「ふははっ！！さあてな、それこそ、あの『傍観者』ならば、こういうじゃろうよ。真実は、自分で見つけてこそ、価値がある、とな」

いつに無く饒舌な娘に、愉快そうに、心底面白そうに答えるカオス。

「それとな、マリア。それはロジックではない。納得していないのは、お前の、『感情』じゃよ」

「…エラー。その回答は・私自身が・否定しています」

「わーっはっはっはっはっはっは！！！！」

高笑いを上げるカオスを見るマリアの表情には、だがしかし本人が否定した感情が、微かな苛立ちがあった。

「むう。現代のGSとやら、なかなか侮れるものではない、か」

GS陣営が要塞として固めたその小屋は、もはや、ただの木の壁に囲まれた小屋でなく、呪術師エミと、GS美神の結界術により、まさに鉄壁の要塞として機能していた。仕方なく狭い入り口から入ろうとする操られた村人達は、その狭さの為人数の多さを活用できず次々と各個撃破の憂き目を見るばかり。

「大分相手の勢いも落ちてきたわね、もう一頑張りよ、ピート！  
エミッ！」

「はいっ！」

「そんなこと、言われなくてもわかってるワケ！！」

進入してきた相手に対し、ピートがその満月で絶好調の吸血鬼としての能力で攪乱し、美神ががっちりと浸透を防ぎ、エミが大技で

一気に殲滅する。正に、軽騎兵・重歩兵・砲兵といった組み合わせである。

「眠れっ！！」

ピートが一気に懷に飛び込み、吹き飛ばし、

「喰らいなさいっ！！」

美神がさらに切り崩し、

「霊体、撃滅っ、波ああああっ！」

エミがその広範囲技能で仕留め続ける。

攻防戦は、たった「三人」のGS陣営の有利なままに移行しているようであった。

その光景を、まるでケーキに群がる蟻のような村人たちの動きをその後方で見守るのは、城から飛び立ち、夕暮れの闇に潜んで操り人形となった彼らを集結させていたブラドーである。

「ふむ、やはり『夜の王』としての誇りは捨てきれんとみえる。この期に及んで、最大戦力である自分自身を出し惜しみするとは、な」

その様子を、さらに遠く離れた樹上より眺めるカオス。

マリアのロケットブースターで一気にここまで駆け下りるように移動してきた彼は、娘を木の下に残したまま一人観察を続けていた。

「最初から、己が飛び込んでいけば、あの程度の結界など、ものの5分と持たずに破れたであろうに」

どこか、物足りなさを感じさせる表情で、そう呟くカオス。

「詰まらんが…やはりアヤツ程度ではここらへんが限界か」

「ドクター・カオスっ!!」

「なんじゃマリ…うおっ!?!」

いつに無く慌てた様子でマリアがカオスに声をかける。

と、同時にその目の前をすさまじい速さで、なにかがすっ飛んでいった。

「ちいっ!! 外したかつ!!!!」

「え〜〜そんなあ〜〜」

「まずい、冥子君、私の後ろに下がりたまえ!」

その声に慌てて聞こえた方を振り向けば、真後ろの木の枝の上にいくつもの握りこぶし大の石を抱えて、一つ目を投げつけ終えた格好で舌打ちをしている忠夫と、その木の根元で背後に冥子をかばっている唐巢神父の姿があつた。

少なくとも老人に向けて投げつけるような威力と速度では無いそれを不意に食らえば、いかなカオスとは言えたただでは済まない。し

かしそれを全く容赦なくやってみせた横島に、カオスは久しぶりに驚きと焦りを感じさせられた事もあってか感嘆の声を上げる。

「ほおう！！ どうやってこの場所、いや、このわしのところまでたどり着いた！？」

それまでのつまらなさ気な様子など無く、まるで出来の良い生徒を見た、と言わんばかりの表情でそう尋ねるカオスに対し、

「あほかっ！！あんたを追いかけたんじゃねえ！！ 俺の鼻は、一度見つけた美人のねーちゃんを自動で追尾するんだよっ！！」

と、胸を張りながら大声でそう返す横島。

どうやら彼の鼻が探り当てたのは、カオスとともにいたマリアの方だったようである。

「動くんじゃねえぞ！ もし動いたら、この石をつ、満月下の半人狼がつ、思いつきりあんたに投げつける！」

「…ほう、で？」

「わからんのかあああ！ ものすごく痛いにきまつとるやろがあああ！！」

「……痛いじゃすまない速度だったような気がするんだがね、横島君」

カオスと顔を合わせ、追いつめている筈なのに追いつめられたような表情の横島を見上げながら、少々髪の毛の薄い人物が呆れたよ

うに呟いた。

種を明かせば、こうである。

要塞作成の際、美神たちが見つけた「ある物」とは、地下へと続く扉であった。

ピートも知らないその扉の中には一本の通路があり、途中に横道が無く近くの森の中にある出口まで一直線に伸びている事を調べ、とりあえず使える物は使おうと判断した彼女達は、簡易な結界と偽装をしていたのだ。勿論その周辺に誰か居たり、侵入者があれば分るようにした上で、である。

後は、相手をおびき出した後、背後から大将を強襲するつもりだったのである。

そして、作戦決行の時、地下を移動中の忠夫と冥子は、その戦いの音を聞きつけて、巧妙に通路に隠されていた扉を開いて偵察に出てきた唐巢神父と出会った。

初めは警戒したものの、冥子が唐巢神父を知っていた事、また長々と説明している場合でも無かった事もあり、三人はそのまま鼻が効くと主張する横島を先導としてここまでやってきたのである。

そして樹の上で美神達が居る方向を眺めながらぶつぶつと呟いている黒いマントの怪しい人物を発見。

警戒しながらも声をかけようとする唐巢を余所に、横島はその辺にあった石をいくつも拾うと、するすると無音で樹に上り、いきなりそれを投げつけたのだ。



唐巢も止める間の無い早技であった。

ちなみに、何故この人選になったかというと、冥子がもし小屋の中で暴走した日にはまずGS陣営は全滅するのは必至。

しかしあまり戦力を割きすぎると大将を倒せない可能性があるし、時間がかかり過ぎれば要塞が落ちてしまう。

そこで横島が護衛兼宥め役としてその貧乏くじを引かされたのである。

ちなみに、冥子には「大将の近くで開ける」と、横島は存在さえ知らされずに、本人は中身を知らないビクリ箱が渡されている。

使用目的は、押して知るべし、だ。

しかし、その結果として人違いではありながらも、王手をかけたように見える横島の眼前では、腕を組んで木に寄りかかった力オスがにやにやと笑みを零していた。

「ふゝむ」

「なんだよっ!!」

「小僧。お前、『ヨーロッパの魔王』を、ちと舐めとりやせんか？」

「…まずいつ！横島君、引きたまえ!!」

「えっ？」

瞬間、横島の斜め下から連続した銃声が響いた。

それは一発も外れることなく、彼を 彼の足元を襲う。

銃弾に挟られた枝は、それまで支えていた横島の体重にあっさりと負け、彼を空中へと放りだした。

「うそーん!!」

石つぶてを大量に抱え込んでいた横島は、空中で姿勢を正す事も出来ずにそのまま茂みへとその姿を隠す。

どうも若干生々しい音がしたことから察するに、姿は見えないが、受身には見事に失敗したようである。

「目標の・排除を・確認。ドクター・カオス・お怪我は・ありませんか？」

「全く問題ないのお。ピンピンしとるわ」

「イエス。ドクター・カオス」

忠夫が立っている木の枝を正確無比な射撃で打ち落としマリアは、カオスに寄り添うようにその傍らに立つ。

「詰めが甘いぞ、小僧。相手の戦力は、キチンと確認しておかんな？」

「いたたたたっ!! ちつくしょー!」

「大丈夫かね!? 横島君!」

頭を振り、茂みの中から木の枝と葉を振り払いながら立ち上がる横島の隣に唐巢が駆け寄る。

「全然平気っすけど…、あんの爺い……!!」

その手を借りて足元に絡みつく茂みから脱出し、先ほどまでカオスが立っていた樹上を見上げるが、すでに其処にその姿は無く。

「それでは、諸君！ また会おう！ わーっはっはっは!!」

「ソーリー。横島・さん」

その声だけが、月夜に響いていた。

その後は特も問題は無く、作戦どおりに背後から高みの見物をやっていたブラドに唐巢神父を加えた三人での強襲が成功する。

幸いにも、例の箱は弟子の考えがなんとなく読めた師匠によって使われることが無かった。

使い手はともかく、最強の火力である十二神将と、彼らと完璧な連携を取りながら十三番目の式神のごとく襲い掛かる八つ当たり気味の横島の投石と、操られた村人を人質にとられること無く凄腕GSとしての能力を存分に振るいまくった唐巢神父の手によって、全戦力を投入し、全くの無防備となっていたブラドは一気に追いつめられる

しかし流石に相手は歳経た吸血鬼。

満月下であつた事もあり善戦するも、その影響下に置かれていなかった村人達が帰つて来ない唐巢神父を救出に出て来た先がGS二人とピートが立て籠もる小屋だった事で顔見知りのピートのお陰もあつて合流、支配下の村人達を突破してきた美神たちが参戦。

最終的には集団リンチの無残なありさまとなり、怒りに燃える村人達とGS、十二神将、そして相性最悪の神父の手によってフルボッコに。

こうして時代錯誤にも世界征服を企んでいたらしい吸血鬼は、味方であつたカオスの名を呼ぶもとくに逃げ出した彼が合流する筈も無く、そのまま息子のピートによって、その影響を取り除かれ、島には、平和が戻つたのであつた。

「ありがとうございます！ これも先生とみなさんのおかげです！」

「いやいや、全ては神のおぼしめし、だよ」

「どーでもいいけど、ちゃんとして、追加報酬の方、おねがいしますね、先生」

「…あいかわらず、君は師匠への尊敬って物が足りないのだね」

翌朝、父を封印した棺桶を背負つたピートともに、GS一行は残

っていた船の前で別れの挨拶を交わし合っていた。

ちなみに島に残った船はこれが最後である為、ピートは彼らを見送りがてら父を海に沈めてくるつもりらしい。

何となく、どこか別の場所で引き揚げられた棺桶を、金目の物が入っていると勘違いした漁師が開いて復活し、奇妙な冒険の第二部とかが始まりそうだな、と横島は思った。

「まあ、頑張れよな、ピート」

「え？ はあ、よく分りませんけど…はい」

友人の肩を叩く横島であるが、彼にもこの後再び空の上を飛行機に乗って飛ばなければならないと言う試練がある。

人を元気づけている場合でも無いのだが、しかし彼の頭にはそんな考えは欠片も無かった。ただ、時間が止まったり加速したら友人のよしみで助けに行つてやろうか、とは思えるほどには氣遣っている。

頬を引くつかせて弟子の態度に頭を痛めている唐巢神父。

追加報酬の内容に期待を膨らませている美神。

おキヌと会話に花を咲かせている冥子。

ピートの腕に絡んで従業員に誘っているエミ。

それを羨ましそうに見ている横島。

彼らの上に、さんさんと地中海の陽光が降り注いでいた。

タマと呼ばれた狐を巻きこんだ粉塵は、しばらく漂っていたかと思うと、突如それまで禍々しい妖気を放っていた岩があったところを中心に渦巻き始める。

「くそおっ！　ここで見捨てては、寝覚めが悪いでござるなっ！  
」

それまで呆然とその光景を眺めていた人狼の少女は、その中心に向かって走っていく。

「狐っ！生きていなくても返事をするでござるっ！」

かなり無茶な呼びかけをするが、それに対する返答はなく、再び、

粉塵に動きが現れた。

「ぷわっ、なんでござるか！！」

「よっしやああああっ！！！！」

粉塵が吹き飛ぶと同時に、眩い光が差し込み　現れたのは、

「やったわ！！　私はやったのよ！！　九体に分けられた金毛白面  
九尾の狐の分御魂！　その主人格をとったわ！！　これで私の女の  
魅力にあの朴念仁もめろめろよー！！！」

輝くナインテールを持った、少し釣り目の

「これであんたに馬鹿にされることも無いわ！どう、この私のなあ  
あいつすばでいは？！」

年の頃13、4の、無いつすバディをもった美少女であった。

「…あれ？」

それから少し後の事。

「ひっく、ひっく」

「あゝなんというか、元気を出すでござるよ?。」

体育座りで膝の間に顔を隠し、泣き声をもらす少女と、それを良く分らないながらも慰めるシロがいた。

「ふえゝゝん」

「あああああ、泣くなでござる!! まるで拙者が悪いみたいではござらぬかあつ!!」

「わたしのないすばでいゝゝ」

「泣いても兄上は渡さんでござるよ」

「……あんたに許可もらう必要があると思ってんの?」

しかし、それまで泣いていた筈の少女は、シロの声に反応して顔を上げる。

その顔には涙の跡など一筋も無い。

「やはり、狐は狐でも、女狐でござったか」

「……………」

しばし睨みあう二人の間を、乾いた風が吹き抜けた。

あーっはっはっは! いやいやいやいや!! まさか、まさか私



の事を覚えている人が居たとは！！　これは久方ぶりの驚きだよ！

流石はドクター・カオス。人にして、人を超えた天才だ。あの邂逅をその記憶に残せるものが、そしてその言葉を聞くところができるとは、なんつとも最高だよ！

あー、驚いた。おや、客人。なにをそんなに驚いているのかね？

ひどいなあ。私だって、たまには声をあげて笑うとも。

いつも言っているだろう？　「楽しい」って。

いやいやいや。今日は美味しい酒が飲めそうだ。どうだね、客人も一杯？

そうかい、それなら、君にも

良い夢を。

## 第十話

人狼の里、鍛冶場にて。

昨夜から響いていた槌と鋼の音はすっかり鳴りを顰め、今は砥石と刃の擦れ合う音がその空間を占めていた。

襷掛けで一心不乱に短い刃物を砥石で研ぐ犬飼と、こちらは刃物の柄であるうか、木屑を吐息で吹き飛ばし、最後の仕上げにやすりで形を整える作業に入った犬塚、その二人が居る。

ややあつて、大きく息をついた犬飼は顔を上げ、満足げにその短刀の艶やかな刃に顔を映した。

「よし、できたぞっ!!」

「ほっほー、見事な仕上がりじゃないか」

その声を聞いて寄つて来た犬塚の手には、何やら細いノミと筆が握られている。先程まで彼がいた所を見れば、そこには途中まで数文字削られた柄があつた。

「むう…、昨日の不埒者は腕はたいしたことは無かったが、こうして見れば獲物だけは業物だったようだな」

「まあ、月夜に刃物を振り回しながらうちの里に突っ込んでくるからには、そりゃ何かしらの自信はあつたんだろうが」

鍛冶場の隅にはどうやらその短刀の元半分であつたらしい柄付き

の日本刀が転がっている。

途中から見事に折られたそれは、かつての禍々しさを失いつつも、しかしその刃物としての切れ味は残っており、まだまだ切れるぞと主張しているようでもあった。

「…昨日の客人は、久しぶりの真剣勝負で少々興奮しすぎたとは言え流石にやり過ぎたか？」

「武器無を無くして気絶した上、あの程度の腕なら良い刺激になったんじゃないか？」

ちなみに件の客人こと不埒者、気が付いたらまるで一晩中山中を駆け廻っていたようにボロボロの服と筋肉痛で、今も大量の疑問符を浮かべながら、放置されていた山道を下山中である。

怪しい日本刀を全く警戒せず握ってしまった上に、暴れるだけ暴れて姿を消した彼を発見した上司、某反社会的組織とその組長に、訳の分らぬまましばらく追いかけまわされる目に会ったのだが、まあ、余談である。

「そう言う事だ。さて、勢いで作ってしまったが、これ、どうする？」

「…バカ息子に押し付けるか」

「親馬鹿だなあ。素直に様子を見に行くって言えば良いじゃないか」

「何のことだ？」

「さーて、な？」

横目で犬塚を睨むも全く答えた様子が無いのに鼻息一つ。

犬飼は素知らぬ顔で短刀を布で拭った。

「…まあよい。行き先は百合子嬢から聞いておる。行くぞ犬塚」

「さてさて、いま仕上げるから」

そう言い残し、先程まで作業していた場所に戻った犬塚は、犬飼の手から受け取った刃物を柄と合わせ、その握る部分に薄くノミを当てていく。

そして最後に彫った部分をなぞる様に筆を動かしていく。

「よし、完成」

それを覗きこんだ犬飼は、感心した様子で頷いた。

「『伝家の包丁・しめさば丸・まあくつう』…なかなか面白い名前ではないか」

「だろー？」

元妖刀、現包丁のそれを和紙に包んで箱に入れると、懷に突っ込んで鍛冶場を出て行く男二人。

…そして、それを離れた物陰から観察する二人の少女の姿があった。

「聞いたでござるか！父上たち、兄上のところに行くつもりでござるよッ！！」

「まあ、あの犬飼っておっさん締め上げる手間が省けたわね」

「死ぬ気か狐」

「…えっ？ そんなに？」

「おっと、どうやらもう出発するようでござるな、行くぞ狐っ」

「ちょ、待ちなさいよ、そんなマジ顔で言われたら怖いじゃないっ」

その日、人狼の里から二人の人狼と、頭に木の枝を括り付けた人狼と狐の少女が出て行ったのを、太陽だけが遙か天上より見つめていた。

場所は変わって、こちらは都会のとある地下。

縦横に走る下水道の通路である。

「くっさいなー。もう鼻が馬鹿になってますよ」

「あんたにはきつつい依頼だったかもね。なんてったって下水道が除霊現場なんだから」

東京の地下深く、まるで高速道路のトンネルのような、人が歩けるほどに整備された下水道。そこにはおなじみの事務所のメンバーの姿があった。

『最近になって化け物が姿を現し、職員が多数被害にあった。早急に退治して欲しい』

要約すれば、今回の依頼はそういうことであつた。除霊対象の正体は不明。正確な出現位置も不明。その強さも不明。しかし、できるだけ早くやって欲しい。

当然のごとく危険度は高く、しかし報酬も大きい。美神は、その依頼を聞くと迷う事無くOKを出し、その日の内には下水道へと潜った。

が、その広い事。

発見された場所まで行き着くにもそれなりに時間がかかり、その間中廃液や生活排水の匂いの只中にいた横島の鼻は、すっかり麻痺して使い物にならなくなってしまった。

「はああ」

「どーしたんですか、横島さん」

「いんや、なんでもないよ。それより美神さん。そろそろ化け物とやらが目撃された地点ですよ」

「ええ。…来るわよ！」

美神がその歩みを止めるとほぼ同時に、

「しねやあ！」

化け物が水中から姿を現す。下水道の水を撒き散らしながら、しかしその匂いに負けないほどの腐敗臭を放つ妖怪、西洋で言うゾンビそのものの外見をした敵だった。

「雑魚が面倒くさい事してくれるじゃない！ いいかげん、極楽へ行きなさいっての！！」

いつもの不定形の悪霊と違い、腐りかけ、変貌した元人間の肉体を持っている。

ネクタイをし、元はスーツであつたろう襤褸切れを身に纏つたその

姿は、かつてはどこかの家庭の良き夫だったかもしれない、頼もしき父であったかもしれない彼が、既に人を襲う化け物へと堕ちてしまった事を示しているようだった。

何処で手に入れたのか、そいつの体の一部とでも言うのだろうか、えらく妖気を放つ金属バットをもっている。

啖呵を切った美神は、輝く神通棍を振りかざし化け物に向かって、一気に振り下ろす。

「げは、げははははっ！」

しかし、化け物はその手に持った金属バットでその一撃をあつさりと防ぎきる。

「かったあああい！！ 何よこいつ！ いつもの奴らとは一味違う！」

「援護します、美神さん！！」

そう叫ぶと忠夫はおもむろに懷に手を突っ込むとなんとなく、輝いているようにも見えないことも無い石ころを取り出した。

「くらいい！唐巢神父お手製の聖水をまぶした、人狼・だいなみつく・すとれーとお！」

勇んだ横島の取った行動は、どうやら前回の吸血鬼の事件の際に学んだ投石だった。



しかし、綺麗なピッチングフォームでそれを投げた横島の眼に、往年の超有名打者のような一本足打法で待ち受けるゾンビが見えた。

バットが一閃。

次の瞬間、横島の額から凄く良い音がした。

「はう！ ……いたたたた、こんちくしょー！！ 人の新技あつさり破りやがってー！！」

「げはげはげはげは！！」

忠夫の手から凄まじい速度で投げ放たれた『人狼・だいなみつ・すとれー』とやらは、あっさりと強烈なピッチャー返しとなって忠夫の額に直撃する。が、コンマ2秒で復活する辺り、その威力もタ力が知れているのか、忠夫が非常識なのか。

「馬鹿やってんじゃない！！ しょーがないわね！ ちょっともったいないけど、それでも喰らいなさい！！」

そういつて美神が取り出した破魔札には、燦然と輝く一千万の文字。

高笑いしていたゾンビが気付いた時にはもう遅かった。

靈気を籠められ飛んでくるそれをよけるには時間が足りず、さりとて迎撃するにも態勢が悪い。

「ぐばっ？！ げはあああつー！！」

そのまま破魔札の巻き起こした光と爆発に巻き込まれて、その姿を消す化け物。

もうもつと上がる白煙の向こうに、上半身だけになって動きを止めたゾンビが見えた。

「ふう…仕留めたみたいね」

「美神さん！まだっ！」

が、しかし、ほんの少し息をついた美神を嘲笑うように、彼女の背後で水しぶきが上がり、その中から何かを吐きだした。

「うそ、もう一匹っ！！　　っあ！」

「げはははははははっ！！」

油断をした、とも言い切れないが、背後から化け物の下半身のみが突然浮上し、美神に一撃を加えると、そのまま上半身と合体する。おキヌの声によって致命傷は避けたが、それでも頭部に喰らった一撃によりふら付く美神。

「美神さん！　ちつくしょー！」

横島は激怒した。

しかし美神の前に佇むゾンビは彼女を見ながらも、横島を挑発す

るように指を一本上げて、くいつと自分に向かって招く動きを見せる。

よろしい、その挑発に乗ってやるうではないか、と決意した横島は、大きく振りかぶって第二球を投げた。

「これでもくらえい！！ 人狼・だいなみつく・ふぁーくつ！！」

唸る剛腕。

迫る球。

そして自分の手には金属バット。

その瞬間ゾンビの腐った脳裏によぎったのは、いつか見たあの球場と、そして炎天下の中ともに覇を競ったライバル達の闘志に溢れた若々しい姿、そしてベンチから見つめるマネージャーの

何かがゾンビの脳裏に溢れかけ、動揺したが故にか振られたバットに手ごたえは無かった。

そして、よぎった物を全て吹き飛ばす様な痛みが股間から頭頂部まで突き抜けた。

ボールではなく歪な形をした石ころは、横島の手によってフォークとはとても言えない、まるで生き物のような動きで見事に化け物のバットを掻い潜り  
まあ、その、いわゆる『漢の急所』に直撃したのである。

「…………ふおおおお…………」

切ない声を上げるゾンビの脳裏に、あの日の記憶が蘇る。

あの夏、自打球を同じように食らった彼の腰を優しく叩いてくれたのが、もしかしたら今も家で帰りを待っているかもしれない妻だった。

早く帰ろう、帰って、遅くなつたと謝らなくては

その瞬間、復活した美神が叩きつけた破魔札で、彼の記憶と思いは、自らを縛っていた怨念と共に儚く散って、逝つたのだった。

「  
ということがあつたんですよ」

「…横島君。もーちよつとましな使い方は無かつたのかね？」

「いやー…あつはつは…」

次の日、唐巢神父の教会には、額に打撲の治療痕がある美神と、その助手、横島忠夫。そして、何故かこちらも少々腰が引け気味の唐巢神父とその弟子、ピートの姿があつた。

「やはり、悪霊全体が少しずつ強くなつてきているようだね」

「…殺虫剤と害虫の関係ですね？先生」

「その通りだよ美神君。やれやれ、まだまだ修行が足りないということか」

例えば、ある細菌に良く効く薬があるとする。しばらくの間その薬で細菌は殺すことができるだろう…だが、もしもその薬に抵抗できる細菌が現れたら？

繰り返される人の知恵と極小生物の融こっこ。

単純にして、だからこそ難しい答えの一つが、より強い薬を持つてその細菌に当たる事だ。

「その事ですけど、先生。『妙神山』への紹介状・・・頂けませんか？」

「…美神君、君にはまだ早すぎる」

「あら、こつこつ修行を続けて…また相手に負けそうになったら修行するんですか？」

「…むう、しかしだね」

「私達のお仕事は…そんなに甘いものではないことは、先生もよくご存知でしょ？」

「…下手をすれば命に関るんだぞ？」

瞳に不敵な輝きを宿し、美神はその言葉を舌先にのせた。

「あら、そんなこと やってみなくちや、わからないわ！…！」

シリ阿斯な光景を見せる師弟の背景では…

「あれ、ピートじゃないか、お前エミさんとこ行ったんじゃないかったのか？」

「僕は先生の弟子ですってば！…！」

「ほーか。そーいう割に、あん時は少し靡いてただろ？」

「…だってあの人のところに行ったら、「血を吸って」とかなり  
そうですから」

「…まあ、日ごろの行いといつかなんといつか」

顔に縦線を入れたピートと、自分の日ごろの行いに自覚が無い忠  
夫がのんびりと会話を楽しんでいた。

時は少し流れ、GS美神除霊事務所の面々は、とある山、しかも霊峰とされる山にいた。

妙神山。世界でも有数の霊格を誇る大霊山であり、神と人間の接点の一つといわれる霊峰である。その山中には、霊能力者間では有名な修行場がある。

その存在を知る者達曰く、「強くなつて帰ってくるか、死ぬか」

その修行場に続く一本の細い道。いや、道というのもふさわしくない。まさに、断崖絶壁の崖にできた一筋の亀裂。彼女達は、現在、そこをひたすらに歩いている途中であつた。

「な、なんちゅーとこですか、ここは」

「あんたは落ちてもいいけど、荷物だけは落とさないでよ」

「…落ちるときは横島さんの命と荷物、一緒に落ちそうですね」

「不吉なこと言わんといってくれー！ー！！」

彼らに緊張感を求める事自体が間違っていたようだ。

そうこうやってるうちに、目的地へと辿りつく。

「見えたわよ」

「ふええ〜。おつきな扉ですねえ」

「へんな顔がついてるけどね」

木造の、古めかしくも威厳を放つ、いかにもな扉の前で、何気なく会話する彼女らの間に

「誰が変な顔じゃいつ!!」

「うひゃあ!!」

突然の怒声が鳴り響く。驚いて飛び上がるおキ又と忠夫を尻目に、美神はその声の主達に話し掛けた。

「修行希望者よ。さつさとコ・コ、開けていただけないかしら？」

「我らはこの門を守る鬼。我らの許可なくして、この門をくぐる  
ことまかりならんつ!!」

その声が終わるか終わらないかのうちに、内側から、その扉が開かれた。

「あら、修行希望者の方ですか？」

「5秒と持たずに開いたわよ？」

「小竜姫さまあつ!!」

扉を開けて顔を覗かせたのは、二本の角を持った、いささか妙な服を着ていたが間違はなく美少女であった。



瞬間、風が吹いた。

「嫁に來ないか？」

「「うおっ！！」」

「はあ？」

「美神さん、私、ぜんっぜん見えませんでしたよ、今の」

「：こんなところだけレベルアップしなくてもねえ」

もはや人の目どころか、おそらく鬼の目にさえ止まらなかったであろう速度で動いた忠夫は、塵一つ舞い上がらせずに少女の前に慣性の法則さえ無視しつつ停止すると、とりあえず口説いてみた。

頭を抑えつつ忠夫が　驚くことに、小竜姫を口説き始めると同時に地面に落下した　落とした荷物の中からおもむろに神通棍を取り出した美神は、とりあえず、打撃音が生々しい音を出すようになるまでシバキあげた。

「：えー。私がこの修行場の管理人を務めます、小竜姫と申します」

「小竜姫さんっすか！！　いいお名前ですね！！　嫁に來ないか？」

「何者ですか、この方は」

「只の「ぶあか」です。今片付けます」

真っ赤に染まっていたはずの横島が、瞬時に復活し、性懲りも無く小竜姫の手を握り、口説こうとしたところで再び美神の躰が行われた。

決め顔のままで沈んでいく彼の手をどうしたものかと握る、ちょっと困った表情の小竜姫を目に焼きつけながら、そのまま横島は暴力の海へとなすすべもなく飲み込まれていった。

そして、再びぼろ雑巾と化した忠夫が眼を覚ましたときには、美神と管理人を名乗った小竜姫どころか、心優しき幽霊少女の姿さえあたりには無く、代わりに何故か扉の顔に張られた巨大な札があった。

「しくしくしく」

むせび泣く2鬼の声と、開かれた扉。むさくるしいふんどし姿の首なし石像がこけている光景だけが広がる中、流石の横島もちょっとリアクションに困るのだった。

妙神山・修行場

「だれか。おキ又ちゃん。美神さん。小つ竜っ姫いさあああ  
あんっ！！！」

誰もいない中で復活し、とりあえず泣きが鬱に変わった鬼達を無視し、扉の隙間から内部へと侵入する。なぜか先ほど出会った角付美女の名前を2倍近く大きな声で叫びながら、辺りを見回す忠夫。

「誰かいませんか。特に小つ竜っ姫いさああああんっ！！！」

「あうち！…石ころ？！…そっちですね！！！」

突然、頭に飛んできた手のひらほどもある石を見つめると、とりあえず飛んできた方向に当たりをつけ走り出す忠夫。

「今行きますよ小竜姫さん！！」

と、視界に何かを振りかぶって投げようとしている美神が見えた。打ち出された岩はそのまま横島の顔の横を通過していく。

「わざわざこんな所まで来て恥晒すんじゃないわよこの馬鹿犬っ！」

美神の怒声とともに、今度は大人の頭半分ほどの石が頭上から降ってきた。

「お、おういえ」

流石に警戒していなかった真上からの一撃はきつかったのか、そのままふらふらと崩れ落ちる。

「ちょっとやりすぎちゃいました」

「…お、おキ又ちゃん？ 何してるの？」

「はい なんですか」

「なんでもないわっ！！ ええっ！ 全く問題なしよっ！！」

某幽霊少女がほんの少しずつ黒い何かをその背後からゆらゆらと溢れさせながら半人狼を回収に向かう。

それを見送るんだか冷や汗だらだらの2人であった。

「こほんっ。えー、気を取り直して私がこの妙神山の管理人「小竜姫」と申します」

「えー…つまり貴方が先生から聞いてる竜神様ってわけね」

「先生？ どなたかの紹介ですか？」

その問いに懷から封筒を取り出し、美神は小竜姫にそれを手渡す。開封し、小竜姫はそれに目を通すと、納得した様子で頷いた。

「唐巢…ああ、あの方。ここ最近の修行者の中では、人間にしてはかなり筋の良い方でしたね」

「OKかしら？」

紹介状を封筒に戻すと、それを懷に収め、小竜姫は先頭に立って歩き出す。

「いいでしょう。こちらにどう「あー、死ぬかと思った」ってなんであれでもう立ち直ってるんですかつー！」

おキ又引きずられてその辺りにうち捨てられていたはずの忠夫が、何時の間にか頭を振り振り立ち上がり、もうダメージの欠片も無い様子で辺りを見回していた。流石にこの動く非常識に慣れていないだけあって、反応が新鮮である。

「あー、あの子半分人狼の血が入ってるからよ、きっと」

「へえ、珍しい…じゃなくって、それにしても非常識すぎますっ！それに、純血の人狼なら、昔、幾人か修行に來られましたが、あんな風な方はいませんでしたっ！！」

「え？」

そう言われて考えてみれば、確かにあんだけタコ殴りにしたり、とんでもない衝撃を受けたりしているにもかかわらず、何時の間にか復活している。今はおキ又の笑顔に怯えながら「もうしませんもうしません」とエンドレスで土下座タイム中であるが。

違和感に近いしこりを心に覚えながらも、所詮は横島、と美神はその思考を放り投げた。

「…まあ、いいでしょ。どーせただの荷物もちだし」

「…へ？ 人狼の血を引く者が、荷物持ちですか？」

本日2度目の小竜姫の呆れ顔を拝むことになる美神。

「だって、体力とすばしっこさ『だけ』はあるけど、霊能力が無いんじゃない？」

「あ。ひどいなー美神さん」

「…人狼が、霊力を持たない？ そんな訳無いじゃないですか」

「「へ？」」

「彼らは、そういう姿を取っていても『妖怪』なんですよ？ その中でも稀な霊力を使う…というか、霊力を元にして存在しているのですが…彼らにとって霊力とは己の存在エネルギーそのもの。いかなれば、体を動かす為の力の延長線上にあるものです」

「あー。俺は混血だから「それでもです！」…はい」

人狼に限らず、生まれつきの妖怪、神族、魔族等は、程度の違いこそあれど、正に「歩く」「走る」それと同レベルで霊力の使い方を覚える。それが彼らにとっての生存手段であり、周囲に危険の多い環境であれば更にその「使いこなせる」程度が大きくなる。

人狼の一族であっても、その体は完全に肉体化しているわけではなく、ある程度霊的要素に基づいた存在のしかたをしている。だからこそ、霊力不足や自分の意志で獣形態や半獣人形態への変化ということが出来る訳であり 彼らにとっては成長によって霊力を制御

し、『入れ物』をある程度変化させる事は自然な事であるのだ。

また、基本的に「か弱い」人間の血が人狼の血に負けるといったことも考えにくく、例えば半人狼と言えど、どこぞの半吸血鬼同様、その人外としての能力、少なくとも霊波刀、もしかすれば半獣人化をえるはずであり、どちらかというと『妖怪寄り』な存在の仕方となるはずである。

「へっ」

「へっって、あんたのことでしょ」

「いやだつて、半人狼なんて俺以外に知らないし」

小竜姫と美神は、そろって頭を抱え込む。

「でも、なんとなくその理由分かるような気がします」

「…で？」

「親父、血まで尻にひかれてたんやなあ……」

「…んなわけあるかい（ありません）」「」

二人は揃って否定する物の、彼の故郷で話せば間違いなく全員が納得するであろう答えなのだが。

若干一名は否定するかもしれないとは言え。

「え〜と、今回の修行者は美神さんと其処の男性…横島さんですね」

「いいえ？私だけよ」

「へ？横島さんは修行受けられないんですか？」

「さっきも言っただけど、只の荷物持ちだし」

「…素養はあると思うんですけどねえ」

不思議そうに横島の顔を覗き込む小竜姫。

「嫁に来ますか？」

「………えいつ」

可愛らしいとも言えるような声で、小竜姫は腰の神剣を抜き打ち様に薙ぎ払う。

「うわたあっ!？」

が、それが横島の首の皮一枚を切って止まるよりも早く、上下から挟みこむように閉じられた掌で抑え込まれた。

「ほらほら、私の剣を白羽取り出来るところとか」

「無茶なことせんでくださいっ!!」

「残念ですねえ」



いきなり真剣で切りかかる辺り、この女性も見た目通り浮世離れた所があるようだ。

「とりあえず、修行者の方はこちらへどうぞ……」

そして一行は修行場へと小竜姫の誘導に従い歩きだした。

途中で、ふと思い出したように小竜姫は修行を受けにきたという美神に忘れていた質問を投げかける。

「ところで、今回はどのような修行をお望みで？」

「一気に短期間でバーンと強くなれるやつ！　ちまちましたのは性に会わないわ」

「クスクスクス…威勢のいいこと。それでしたら、今日一日で強くして差し上げましょう。そのかわり　強くなってここを出るか、それとも、死ぬか。そのどちらかになりますか？」

脅しのような小竜姫の言葉を、だが美神は眼を逸らさず傲岸不遜に笑って見せた。

「私は美神令子よ！　例えば地球が吹っ飛んでも、私だけは生き残って見せるわ！」

「結構です。ではその扉をくぐって中でお待ちください」

そついい残すと、小竜姫はまるで銭湯のようなドアをくぐってその先に進んでいく。

「おキ又ちゃーん！ 横島君はどうー？！」

「ええつとー！ まだピクピクしてますー！！！」

「覗かれる心配だけはなさそうねー」

着替える前に何をしたかは定かではないが、覗かれる以外に忠夫の命が心配では いや、心配する必要性が感じられないのは日ごろの行いと言っやっだろうか。

「あ、悪夢のような光景やなあ」

いつものごとくやつぱりあっさり復活した忠夫が、幾分しょんぼりしながら扉をくぐると、背後には扉がなく、辺りにはストーンヘンジのように巨岩が乱立しており、その中心に立つ小竜姫、そしてその前方でなにやら法陣の説明を受けている美神の姿があった。

「要するに、この法円を踏めば・・・」

「はい。貴方の「影法師」つまり、貴方の霊格、霊力、その他様々なもの『のみ』を取り出した貴方の分身が生まれます」

「そして、その「影法師」を鍛えることで、直接霊力そのものを鍛えるって事ね、りょーかい」

美神がその法円を踏むと、一瞬後には美神の2倍ほどの身長を持

った女性型の、体を黒いボディースーツで覆った複雑な模様の彫りこんである槍を持つ、式神のような「影法師」がその姿を現していた。

「これが私の……」

「ええ。貴方の影法師です。それでは早速修行を開始しましょうか。

剛練武、出ませいっ!!」

「ウオオオオオン!!」

小竜姫の一声に答えて出てきたのは、体中を岩で覆った　　とい  
うか、岩でできた体をもった一つ目の歪な人型をもつ存在であった。

「先ほども言いましたように、負ければ命は無いと思ってください。  
そのかわり、勝てば新たな力を得ることができるよう」

あくまでも事務的な口調でそう美神に話し掛ける小竜姫。対して  
美神は

「オール・オア・ナッシングって奴ね。

上等っ!」

その眼に戦意を乗せ、影法師を岩の怪物に向かって突撃させる。

「まずは先制　　いただきっ!」

勢い良く繰り出された槍の穂先は、しかし、その体を構成する岩  
に防がれる。

「……~~~~ツク~~~~。やっぱ正面からじゃ無

理みたいね」

「おや、もう気付きましたか」

「当たたり前でしょ？どうみても、重装甲、大質量って感じじゃない！そんでこの手のタイプは

ごうっ！！

その大質量で構成された繰り出される右拳を掻い潜り、懷に飛び込む影法師。そのまま相手の膝に足の裏を乗せ、跳ねるように飛び上がり

この辺りが弱点でしょっ！！！！」

生々しい音と共に、今度こそその槍の穂先を一つ目の巨人のその眼を貫いた。

「よしっ、楽勝楽勝！」

「わぁ、流石美神さん！！」

岩の怪人が崩れ落ちると、その体を構成していた岩が微粒子となり美神の影法師に纏わりつく。

一瞬後には、ボディースーツの上から新たな鎧を身に纏った戦乙女が存在していた。

「へえ。こうやって力っていつのをもらえるんですねー」

「ええ。美神さん、これで貴方は今までとは比べ物にならないほどの靈的防御力を手に入れたことになります」

「ふーん、ま、あのくらいなら何とかなるわね」

「……次からは見た目も重視してみますか」

何気に次からの修行者に対してのレベルが上がったようである。

剛練武の残滓が完全に掻き消えると、小竜姫は次の試練を呼び出す。

「禍刀羅守っ！出ませい！」

しかし、先程のような光が起きる事も無ければ、何かが出現すると言う事も無く。

「…あれっ？」

「……」

「禍刀羅守っ！出ませい！」

ただ、沈黙が広がった。

「……」

「ち、ちよっと待って下さいっ！禍刀羅守ーっ！出ませい！！」

だが、何も起きない。

「あ、あれ？」

「どーしたのよ、小竜姫様？」

「い、いえ私にも何がなんだか・・・」

「しっかりしてよねー。全くこれで竜神だって」

「美神さんっ！！！」

「っあ！！！」

小竜姫の声に、さっきの様に修行場の中心から出てくるものと思つていた美神は、周囲を取り囲む巨岩の影から突如飛び込んできた4本の刃でできた足を持つ昆虫のようなソレに、背後からの不意打ちを受け、深いダメージを負う。

「へえ、宮本武蔵のつもりかねえ。真っ正直なばかりと思つていたけど、なかなかやるなー」

「横島さんっ！！！」

「いや、だつてさー」

「「だつてさー」ではありませんー！！これはっ！」

「命をかけた真剣勝負、何でしょ？」

「分かっているなら、何故っ！！」

傍から見れば卑怯な行為に、激昂する小竜姫を余所にあくまでも平然とした忠夫。その瞳には、非難する色は無い。

「それでも侍の端くれ。ソレくらいのことは当然です」

「それは、でも美神さんは只の人間なんですから……」

「それに、いつちゃ悪いけど小竜姫さん。あなた、あの人のことぜんぜん知らないっすから」

「当たり前ですっ！！ 今日出会ったばかりなのですよ！」

「あの人は、ただの人間だけど超一流のGSで、汚い手でもなんでもありな所で生きてて、そんでもって……やられたことは、千倍にして返す人なんすよ」

横島の前で、美神が膨大な霊力を纏いながら立ちあがる。

その表情に不満は無く、むしろ自分に痛撃を与えた相手に対する怒りが燃え上がっているようであった。

「よっくもやってくれたわね！ この蠅螂もどきっ！！ この痛みは、高くつくわよっ！！」

こみあげる笑いを噛み殺しながら、美神の台詞を聞く忠夫。

「さて、小竜姫さん。一つ提案があるんっすけど」

「…なんですか？」

良くも悪くも真っ直ぐな性格なのだろう。

納得がいかない！という顔をしながらも、とりあえず聞き返す小竜姫。その後ろでは、やはり結構なハンデとなったのか、いまだ動きに精彩を欠く美神の影法師を、少しずつ、鉛筆の先を削るようにして更に細かな攻撃を繰り出す禍刀羅守。美神もいまの動きでは、その小さく、速い攻勢に対応しきれず徐々に押され始めている。

「不意打ちするんなら、助太刀もありっすよね？」

「……………」  
「……まあ、いいでしょう。特例として、あくまでも『特例として』、認めます」

かなりの長考の後、搾り出すようにして特例の部分を強調しながら小竜姫は忠夫にそう返した。とはいえ、その表情はいまだ不満の色を濃く残してはいたが。

「それでは、貴方の影法師を抜き出します。動かないでください」



そのまま忠夫の額にその右手のひらをあてると、忠夫の体から「ナニカ」が抜け出していく。その抜け出た「ナニカ」は忠夫の背後五メートルほどの辺りで収縮し　　狼の頭と、人の体をもち、真つ赤な下地に、白色で「鳥獣戯画」風の様々な動物の絵が画いてある上衣に、金縁の黒い生地で作られた直垂、左右に太刀と脇差を一本ずつ計四本の刀をぶら下げた、キセルをふかす、美神の影法師よりも一回り大きな、異形の歌舞いた侍らしきものを生み出した。

「…なんっすかあれは」

「…貴方の影法師…のはずなんですけど」

狼頭をもつ忠夫の影法師は、ゆらり、と歩き出すと、そのままその辺のちょうどいい感じの岩に腰掛け、のんびりとキセルをふかし始めたのだった。

「…俺、タバコとか吸った事ないんですが」

「……………貴方の影法師……………のはず……………」

「横島さーんっ！　美神さんがーっ！」

おキ又の悲鳴まじりの鳴き声を聞きながら、一柱と一匹は呆然とそいつを眺めていた。

「やあ」 たしか、そう迎えるのだったかな。

まったく、君はよっぽどここが珍しいようだね。そんなに辺りを見回しては、いつかその足元に開いた奈落に気付かないまま、いつのまにか動けなくなってしまうそうだ。

たまにはよく目の前を見ることだ。この天文台にだって、それなりに見るべき物はあるのだから。それが例えなんでもないようなものに見えたとしても、本当は大事なものだということもある。

たとえば、ほら、今君が座っているその古い椅子。君が座る前は、一体誰が座っていたと思う？

ふむ。そう途方に暮れた顔をすることは無い、たまには回答が与えられても良からう。答えは

「僕」が座っていた、と。そう言う事だ。

彼女から伝言を預かっているよ。「その顔が見たかった」だそうだ。

実に悪趣味、実に彼女らしい。

さて、謎は謎のまま。君には一言だけ

良い夜を。

## 第十一話

美神の影法師が槍を横薙ぎに振う。

「ケーっ！」

が、禍刀羅守は嘲笑うように後方に飛んでかわすと、お返しとばかりに着地で決れた岩を足で蹴飛ばして来た。

慌てて眼前に構えた槍で防ぐ影法師。

が、その一瞬の隙に回り込んだ禍刀羅守は、その防御した腕を僅かに掠めるように鋭い刃を振ってくる。

使い慣れない武器であるせいもあるうが、若干反応が遅れた美神が腕を押さえて顔をしかめ、だが反撃に振われた槍の届く頃には、禍刀羅守は既に離れている。

「こんのくそ蠅螂ー！！ 昆虫なら昆虫らしく単純に來なさいよー！！」

「…グケエ」

「あああっ！！ 今馬鹿にしたわね！ 虫のくせに！！」

「グケケケケ！」

「…ぶっ潰す。絶対にぶっ潰す！！」

「ああっ！美神さん落ち着いて！！」

先ほどから細かく細かく攻撃されている美神は、堪忍袋の緒がつくの昔にブッチ切れていた。

おキヌの声も届かないらしく、握った槍をしごいて突っかけていく美神の影法師。命懸けの試練の割に子どもの喧嘩のような雰囲気が見え隠れしていた。

其処から少し離れた巨岩の列。ド派手な狼侍の姿をした忠夫の影法師が、相変わらずキセルをふかしながらのんびりと寝そべっているそのそばで。

「とりあえずアレを動かせば良いんですねっ？！」

「ってやっぱり横島さんが動かしてたんじゃないんですかっ？！」

「俺は煙草吸いませんからっ！！」

「そっいうことじゃなくてっ！！」

地味に混乱している忠夫と、今まで無かった事が起きたせいで状況把握に困っている小竜姫が大変困っていた。

どうにも彼女、生真面目な性格である為か突発的なトラブルには少々弱く、処理しきれていない様である。

ともあれこうして混乱してばかりも居られない、と自分がやや焦っていた事に気付いた小竜姫は、大きく息を吸い込んで、ゆっくり

と吐き出す。

ようやく落ち着いたのか、瞳に冷静さを取り戻した彼女は、横島の影法師を指さし、勤めて常のように声を出した。

「あれは貴方から生まれた影法師なんですから、貴方の考えた通りに動いてくれるはずです」

「勝手に動いてますよっ！」

「だから分からないといっているんです！ 私だってこんな影法師初めて見たんですからー！！」

「結局どうすりゃ良いんですか！！」

どうやら落ち着いていたのは一瞬だけの様で、あっさりと逆切れた小竜姫は八つ当たり気味に咆哮した。

こっちはこっちでドタバタと大混乱であったが、一方美神達の方では決着がつきかけていた。

もはや全身の鎧に細かな罅が入り、頭部の兜から生えていたであろう角は一本の先端が欠け、もう一本は根元から折れている。ボロボロの、という表現以外に考えられない様相となった美神の影法師の上に覆い被さるようにして、禍刀羅守はその右前足についている巨大な刃を振り上げた。

『命をかけた真剣勝負』

先ほど忠夫自身が言った言葉である。そのシビアさは良く分かつ

ているつもりであつたし、また、侍に成りたいのならば忘れてはいけないことの一つであるとも聞き育ってきた。

命を狩ると言う事は、命を獲られるかもしれない状況と表裏一体であるがゆえに、このGSという職業を、見習いとは言えやっていくつもりであるならば、もしかすると仲間の誰かが命を落とすかもしれない。

だが、それを本当に理解していたのだろうか。

美神が負ける訳はないと思っていたのか。

まさか、自分の仲間がそんな事になるはずがないと思っていたのか。

そんなはずがないと、思ってしまったのか。

それでも、忠夫の目の前で、その刃は確実に美神の影法師の喉元に向かって突き進む。

だが、だが、どうすればいい？

この身は無力。

そしてその心はいまだ未熟。

「美神さあぁんっ！！！！」

『未熟者』 叱咤するような囁き声が、自分の中から聞こえた気がした。

「ガオウ！！」

それまで周辺の状況など空に浮かぶ雲のごとく気にせずに、泰然とキセルをふかしていたはずの忠夫の影法師が、何時の間にか、そう、誰もが振り下ろされる禍刀羅守の刃にその眼を奪われた瞬間、ふらりと立ち上がると、生身の人間の侵入を拒んでいた修行場を囲む堅固な結界を、只一鳴きで打ち壊した。

その右手でそれまで寝転んでいた、どう見てもその影法師自身よりも大きな岩を片手で持ち上げ、そのままその声に一瞬固まる美神の影法師と、禍刀羅守の目の前にブン投げる。

そして巨岩が禍刀羅守と美神の影法師を纏めて潰さんと迫り、最早誰にも止められない、そのタイミングで、横島の影法師はその手に持ったキセルを巨岩に投げつけた。

左手で投げたキセルが閃光のような速度で目標に到達し、先端から砕け散りながらも、巨岩を粉々に打ち砕く。

が、圧死の危険からは抜け出したとはいえ、目の前で碎かれた欠片はショットガンの様に美神の影法師と禍刀羅守をしたたかに打ち据えた。

「うあつ！！」

「グゲエ！！」

両者共に吹き飛ばされ、そのまま動かなくなる。

いや。

「グ、ケエ」

ふらつきながらも立ち上がったのは、禍刀羅守が先であつた。

「くう」

禍刀羅守はふらつきながらも起きあがり、忠夫の影法師に一睨みをくれるが、ソレはその場で腕を組んだまま動く様子がない。

ならば

「ケケケエ」

今は目の前の獲物の息の根を止める事が先決、と禍刀羅守は警戒はしながらも、いまだ動く様子のない美神の影法師に近づいていく。

「美神さん！！　くそっ！！　何がなんだかわからんが、こんな



もん黙って見てるようじゃ、侍じゃねえよなっ？！

巨岩が砕かれた際にこちらまで転がってきた一抱えは有る石を拾うと、其処に向かつて駆け出す横島。

しかし。

「ぐけえっ！！」

「横島さんっ！？」

「がっ！！」

飛び上がり、振り下ろした岩ごと吹き飛ばされた。

おキヌの悲鳴を聞きながら、ごろごろと地面を転がり、横島の影法師の足元に叩きつけられる。

幸い岩が盾になってくれたらしく、大きな怪我はしていないようだが、かなりの距離を飛ばされ、打撲と擦り傷だらけになった身体を起こしながら、横島は上から降ってくる視線に気づいた。

「なんだよっ！」

僅かな、ほんの小さな溜息が頭上から聞こえ、見上げれば其処には呆れた表情の狼の顔。

狼頭の侍は、そのまま黙って、その腰の脇差の1本を忠夫の前に落とす。それは見る間に縮み、忠夫の手にちょうど良い大きさの小

刀へとその姿を変えた。

「…助太刀、感謝!!」

それを立ち上がりざまに引っかき、再び美神の影法師に覆いかぶさりその刃を振り落とさんとする禍刀羅守へと駆けだした。

小太刀を抜き放ち、そのままの勢いで一撃を、と速度を上げる。

「なんだこれっ?! 抜けねえじゃねえか!!」

しかしその鞘は、刃を抱え込み放さない。

「ええい!! それがどうした!!」

一瞬の逡巡。

武器を得たがゆえに、その武器が使えないと言う状況に落ち入り、そして横島が選んだのはそれでも前進する事だった。

ほんの僅かな時間で良い。

その時間さえあれば、彼女ならきつと何とかしてくれる。

信じて駆けつけ様に、まるで棍棒のように振るわれたソレは、邪魔者を排除しようとし振われた禍刀羅守の一撃を確かにその刃を受け止め、一瞬の隙を作り出した。

眼下の影法師ならともかく、まさかただの人間が吹き飛ばされる事も、真っ二つになる事も無く、その両足で地面を踏みしめながら己の刃を受け止めている、と言う予想もできなかった事態に、禍刀羅守の思考は完全に止まる。

「美神さん、これっ！」

「…つくー！！　ありがとうおキ又ちゃん！　食らいなさいっ！！！」

そんな分りやす過ぎる隙を、意識を取り戻した美神が見逃すはずも無く。

禍刀羅守が気付いた時には、胴体はがら空きで、しかも眼下の影法師は幽霊の少女が引つ張ってきたらしい槍を構えている。

慌てて刃を引き戻すも、もう遅い。にやりと笑った美神は、影法師に攻撃を念じた。

そして、起き上がりざまに突いた美神の影法師の槍は鈍い音を立てて、禍刀羅守の胸に大穴を開けたのだった。

「…はああああああ。ありがとう、横島君、おキ又ちゃん」

「…やばかった。死ぬかと思ったわい」

「二人とも大丈夫ですか！？」

「なんと言つ無茶を…良くその命あったものですね」

呆れかえる小竜姫の前で、倒れ込んだ横島と美神におキヌが慌てた様子で文字通り飛んでいく。

生身で巨体が争う戦場に飛びこむ少年も、霊体の身で必死に槍を運んだ少女も、あれだけ追い込まれた状況から一瞬の好機を逃さず逆転してみせた女性も。

それぞれ中々無いほどの無茶を見せてくれた事に、小竜姫の口元は僅かに引き攣っていた。

「今度ばかりは、やられたわね。とりあえず命が助かっただけでもめっけもんか、な。一応礼を言っとくわ」

「もう、美神さんったら」

「それって礼じゃないっすよ」

性も根も尽き果てた、とばかりに寝転ぶ美神と鞘付きの刀を持った忠夫。その様子を喜びと共に見るおキヌと、呆れた視線を忠夫に向ける小竜姫。

三人揃って緊張の糸が切れたその時、転がっていた禍刀羅守から光が溢れた。

一つ目の試練を超えた時のように、静かに佇む美神の影法師と、なぜか横島の影法師に向かって来る禍刀羅守から生まれでた新たな力の証。

そして美神の影法師の持つ槍は両端に刃を持つ薙刀へと姿を変え、もう一方に向かって行った力は、横島の影法師の手の上で金色のキ

セルへと変化した。

狼頭の侍の口からは、満足げな吐息と共に煙がどっかに飛んでいた。だったのであった。

「……え？」

しばし、何とも言えない空気が修行場に漂う。

コホン、と咳ばらいをし、最初にその空気を取り払うように動いたのは小竜姫だった。

「……え。それでは、最後の試練へと行きたいと思います」

「無視っすか、あれ？」

半眼の横島の問いに対し、小竜姫は悟った様な笑顔でこう告げる。

「何がですか？」

微かに残った管理人としての意識を砕かれまいとする防御行動か。

小竜姫は決して視線をそちらに向けず、仮面のような笑顔のままでの発言に、三人は互いに眼で触れない事を決定したのだった。

「…ふう。はいはい。んで？次のお相手はどんなのかしら？」

暫く後、何処となくすつきりとした表情で立ち上がった美神に、小竜姫は次の、最後の試練の説明を始める。

「最後は、私と戦っていただきます」

「…え」

笑顔でのたまう小竜姫に、絶句して固まる美神。

そして、「あんたの影法師のが一番効いたわよっ！！」という理由でばこぼこにされていまだノックアウト中の横島と、それをかいがいしくも看護するおキヌ。それを煙でまあるい輪っかを作りながら眺める横島の影法師。

努めて横島の影法師から眼を逸らしながら、小竜姫は三人を見回し、一つ頷いて見せた。

「なかなか面白いチームではありませんか。久々に面白い勝負ができそうです」

「…マジで？」

最後の試練が一番厳しいというのは、お約束という事なのだろう。

「ちょ、ちよつとまった!!」

「えー。なんでしょうかー?」

うきうきと神剣を素振りしながら修行場の中心へと向かう小竜姫。よっぽど何かストレス的なものでも溜まっていたのか、テンションが上がりっぱなしの彼女になんとか美神は声をかける。

「さ…作戦タイム!!」

そう告げると、残念そうな小竜姫をその場から追い払った。

「…さて、そこで逃げようとしてる横島君?」

「はいっ!」

何時の間にかこそこそと尻尾を丸めて修行場を抜け出そうとしていた横島の背後に回り込んだ美神は、彼の首筋に薙刀となった影法師の刃を当てた。

冷たい感触に硬直し、小竜姫が追い出された時に感じた嫌な予感がばつちり当たった事を悟って、横島は冷や汗を止めどなく流す。

「分かってるわね?」

「いやー、全く分からないっすよはっはっは！」

「…あの竜神に天罰喰らうのと、私に今ここで哀れに苦しんでぶっ殺されるの。どっちがいい？」

「俺の未来が無いじゃないですかー！ やだー！」

「さあ、さくさく決めなさいね」

「あっあっあっあっ」

音を立てて構えなおされた影法師の薙刀と、音を立てて拳を光らせる美神に挟まれ、もう傷はないが、なぜか涙が止まらない忠夫であつた。

「それでは、準備は「こうなったらもうヤケじゃああああー！」  
…なんで横島さんがそんなに気合はいつてるんですか？」

修行場の扉を開けて入ってきた小竜姫は、異様に気合の入っている忠夫を見ていぶかしげな顔をする。



悲壮なまでの表情で決意を固め、しかし同時にやる気も感じられる横島を、美神は慌てて叩き倒して沈黙させた。

「いいえ……何でもありませんよ?!」

「う……。そ、そうです。何でも無いです」

じとーとした半眼であまりにも怪しい二人を睨みつけるが、どうせ何か妙なことでも考えついたんだろう、とほったらかす小竜姫。

「それでは、これは私からのサービスです。面白いものを魅せていただきますから、ね」

そういつてチラリ、と横島に視線をやると、美神の影法師に向かって手を伸ばす。その手が光ると、影法師にあった大小の傷は全て消え失せていた。

「最後の試練、始めます」

「…OKよ」

その姿を神々しい、戦装束を纏い、光り輝く竜神としての戦闘形態に変化させ、修行場の真中へと歩を進める小竜姫。美神はそれに応じて影法師を小竜姫の正面へ配置につかせる。

「それでは小竜姫、参ります」

小竜姫は神剣を構え、その一撃目を繰り出した。

いいわね、あんたの役目は、なんとしても小竜姫に隙を作り出すことよ！

手段は選ばないわ。なんとかしてみなさい。失敗したら私が死んでてもあんたを殺すわ。でも、役に立てば、…ごほーびよ。

「ごほーびかあ、やる気が出て来たあああつー！！」

空を見上げ、未だ見ぬ褒美の内容を考え悶える横島。

「高級なお肉か？！ いやいや、もしかしたら嫁に来るとか！」

その口はだらしく開かれ、肉の味でも想像したか、それともいよいよ成功するかもしれない嫁取りの事でも思ったか、不気味な笑い声がこぼれていた。

「…ぐふふふふふふふふふつー！！」

が、彼の背後では今まさに小竜姫と美神の影法師が互いに武器を振って火花を散らす鉄火場が形成されていた。

「ヨコシマアツツツー！！」

「はいいいいいっ！！！！」

美神の怒声で妄想の羽を閉じた横島は、殺意の籠りまくった美神の視線を受けてようやく現状を認識することに成功する。

「やべっ！ 始まつてる！！！！」

焦った彼は、とりあえず走って戦場へと近づくのだった。

ちなみに忠夫の影法師は、四本の刀を枕元に置くと、岩の上で仰向けになつて鼻提灯を製作中である。

「ええ」と、ええ」と、とりあえず気を逸らせばいいんだから

」

小竜姫の繰り出す斬撃をひたすら防ぎながら、美神がこちらを殺気の籠った視線で見ている。なんと言うか「早くしないとヤルぞ？」と言つ意思が溢れすぎてて正直怖い。

その視線をうけ、おもわず尻尾を丸めながらひたすら考える横島。しかし、どうしても殺気が気になつて考えが纏まらない。

「どうしました？ 防戦一方では勝ち目はありませんよ」

「くっ！」

防御に徹すればしばらくは持ちこたえられる！ なにやつてんのよあのバカは！ さつさとちょっとでいいから隙を作りなさいっての！ こんなときくらい少しは役に立ちなさいよ！

先ほどのお礼は一体なんだったのか。

「やばいやばいやばいやばい！！！！」

焦りが思考を上滑りさせる。

早くしなければ殺される。美神の事だ、言った事は必ず実行するだろうから、もし失敗して命を落としたら、間違いなく末代まで崇られる、と横島は思った。

こういったときに慌てれば慌てるほど余計にいいアイデアなど浮かばないものだが、恐怖に脅かされた彼はよりにもよって、

「…小さい隆起で小竜姫、なんつって」

自分で地獄行きの片道切符を購入した。

瞬間、修行場の空気が死んだ。

何かが纏めて数十本ぶち切れる音がする。

彼女の顔は見えないが、その目の前に立っている美神の顔が引き

つつている。

そして、小竜姫から溢れ出たオーラが、怒り狂う龍となって咆哮した。

「いゝまゝ、何か言いましたかああああああ……！」

地獄の底から響くような低いトーンの声が聞こえる。

「母上……俺、死ぬかもしれん」

後悔とは、後で悔やむから後悔だ。いまさら後の祭りである。

ゆっくりと振り向く小竜姫。

その瞳は、すっかり怒りで染まりきっている。

あまりの殺気の密度に当てられたか、何か他の理由でもあったのか、或いは最初から寝て等居なかったのか。

完全に寝に入っていた筈の影法師は飛び起き、とてつもなく怒っている小竜姫を目にすると、横島に向かって顔の前で数回ぱたぱたと手を振った。

横島には分る、あれは「無理」と言っている。

三人と影法師二体は、迷わずダッシュで逃げ出した。

しかし怒り狂った小竜姫は、彼らを逃がすつもりなど無いのか、突如として身体から膨大な力と閃光を吐きだした。

それが収まった時に現れたのは、巨体を持つ、一匹の神々しくも荒々しい龍だった。

龍の咆哮で修行場が震える。

そして振り向いて確認した三人も震えあがった。

「このバカッ！！ 隙を作ればいいって言ったじゃない！！ なん  
でいきなり逆鱗に触れてんのよっ！！」

「だってだって、しょうがないじゃないっすかあああああつ！！  
」

「いいから早く逃げましようよっ！！」

出口があつたであろう場所に向かって駆け出す三人。

と、横島の影法師が先んじ、銭湯の脱衣所の様な扉に向かってその刀を振う。

ガラス片と木屑を撒き散らし砕け散る扉を潜って逃げ出した美神達を追いかけて、龍もまたその身体を修行空間から妙神山の敷地内へと現わさせていく。

出口に向かって逃げていく美神達。

何時の間にか横島の影法師が消えていたが、三人にはもうそんな

事を気にしている余裕は無い。

なんとか出入り口の扉までたどり着き、美神の影法師がこじ開けた隙間を縫うようにして転がり出た三人の後を、美神の影法師が扉を飛びだしざまに蹴って閉めた。

が、龍の怒りは収まる所を知らないようで、扉の向こうではまだ荒れ狂う咆哮と破壊音が断続的に響いている。

「お前らー！！ 一体何をやったのだー！！」

扉に張り付いた門番たる鬼達の怒声が息を切らす三人の背中に降り注ぐ。

溜息一つ、疲れた表情で立ち上がった美神。

「だいたいこいつのせいよ」

そう言って埃まみれの彼女は、背後の横島を指でさした。

「小竜姫さん怒らしちゃった。てへぺろ」

「死ねっ！！！！」

サラウンドで響いた悲鳴のような怒声に、美神とおキ又は思わず耳を押さえた。

結局暴れるだけ暴れた小竜姫は、美神の「とりあえず、こういうときは生贄よね」の一言で山門の中に蹴り入れられた忠夫を12時間に及ぶ追いかけたこの末、消し炭の上ミンチ前というすばらった！なするという光景を作り上げたところで正気に戻り、「ああっ！だれがこんな事を！」と荒れ果てた修行場を見ておっしやった。

「あんたよ、あんた」

「そんなっ！！こっこんな不祥事が神界に知れたら……」

「大丈夫よー。私がお金出したげる。一週間もあれば元通りに成るわよ」

「ほ、ほんとうですかっ！！ありがとうございます！！！」

「いいのよっ！！そのかわり最後のパワーちょうだいねっ！！！」

最後は金で解決した美神は「力が正義じゃないわ！お金が正義よっ！！」と力強く言い放ったとさ。



「…わん（ふう、やっと撒いたようでござるな）」

「ウォン（あの青い服着た奴等、てっぱうを持っているとは、中々めんどくさいな）」

「わおう（とりあえずこのまま忠夫のところまでいくでござるよ）」

「ワフ（りょーかい）」

コンクリートに爪音を響かせながら、人狼の2人が狼形態となつて街の真ん中を歩いていく。

街中に、巨大な犬（狼であるが）が首輪もつけずに、しかも片方はなんだかおどろおどろしい雰囲気を放つ風呂敷を首に巻いたのが二匹うつろっている。

「いたぞ、通報のあつた犬だ！」

保健所というものの一つの役割として、野犬の捕獲があったりするわけで。

「わう！（今度は何でござるか！）」

「ワンっ！（わからん、が逃げた方がよさそうだ！！）」

「逃げたぞー！！」

「捕まえるー！！ 猟友会を呼べーっ！」

でつかい犬と、市民の安全を守るという使命感に燃えた職員達の、昼間の大追跡劇が始まるのであった。

「…さつきまで『けーかん』とかいうのと大立ち回りやってたかと思えば」

「…」

「ねえ、シロ。あんたら人狼ってさ」

「何も言うなでござる。武士の情けっ」

「…全体的に馬鹿なの？ 死ぬの？ あと私は武士じゃないわよこのお馬鹿」

「くくく…。父上、犬飼殿。兄上のところまで案内したらその後は

用済みでござるよなあ……？」

「……はあああああ」

「やあ」

君って人は、暇なのかね？

いやいや、あんまり頻繁に会えるものだから、ちよつと心配になっただけさ。

それならば、せめてゆつくりとしていくといい。

さて、ここに来るのも何度目かな？今日はこんな話があるんだよ。

ある一人の人間の中には、もう一人の人間が住んでいる。そしてその中には、またもう一人。そして合わせ鏡のように一人の人間という個体の中には、無限の人間を内包する。それは、彼の中には、無限の世界があるということだよ。

世界は主観と客観とで作られる。

ならば、だれもその中にいない人間というのは、果たして存在しうるのか。

また、遊びにきてくれたまえ。いつでも歓迎するよ。

それではまた、

良い夢を。

## 第十二話

犬飼忠夫は考える。

侍とは何か。

仲間とは何か。

負けるとは？

ドクター・カオスに詰め甘さを指摘され、美神の危機に大した役にも立てず、結局自分はそこまでか？

そんな訳があるものかっ！

「ちわーっす」

今日も今日とてGS美神除霊事務所に青年の声が響き渡る。

空元氣も元氣の内、と言うではないか。何かに悩んでいようと、

そこらへんを見せると言うのは彼の男としてのプライドが許さない。

だからこそその空元気であり、そして彼の矜持でもある。ならば、結局どうこう悩んでる暇なぞない。やることやって、それから何を悩んで何が変わるか、とりあえずそれは後回し。

「あら、横島君だったの？」

「いきなりひどいっすよ、美神さん」

だから。

「んゝいま、ちょっと急いでてね。早いとこ届いてくれるといいんだけど」

「今日のお仕事に関することっすか？」

まずは、今を頑張ろう。

「日本にパイパーっていう『悪魔』らしきものによる被害があつてね、それで、ソイツに対する切り札の到着を待ってるところだったのよ」

「パイパー？」

「そ。なかなか凶悪な奴でね、能力としては相手を子供にするって言う只それだけ、なんだけど」

悪魔パイパー。

ヨーロッパにて散々その特殊な能力を振るいまくり、時の僧侶によつてその力の源である『金の針』を奪われるまで莫大な被害を撒き散らした世界規模での賞金首である。「ハーメルンの笛吹き」とも呼ばれる彼の力は、本当に相手を子供にするという以外には、それなりの魔族としての能力しかない。

それでも並みのGSにとっては十分に強敵となるだろうが。

『金の針』がその最も大きな弱点である、と言う事。

そして、その能力の半径がとんでもなく広い事。

特筆事項としてはこれらが挙げられる。前者は、その弱点が力の源であることもあり、僧侶に『針』を奪われたことでヨーロッパから駆逐された訳だが、後者はかなり文明社会にとって危険な能力となる。その範囲が一つの都市を軽く覆ってしまうほどに広いのだ。

もし、その能力が大都市のど真ん中で発揮されれば？

パイパーが猛威を振るっていた時代とは人口密度も、そして技術力とそれが制御を離れた場合の被害も比べ物にならない。はつきりいって、そうなってしまうえば只一体で一国どころか、オカルトにあまり耐性のない国ならばまとめて数ヶ国ぐらいは無くなってもおかしくない。

だからこそその高額な賞金であり、国連が世界中のゴーストスイーパーに抹殺を呼びかける程の危険性を持っているのだ。

「…なんだがセッコイ能力ですね」

「甘く見ちゃダメよ。確かに子供にする、って言うところだけなら大した事はないように見えるかもしれないけど、実際は厄介な事この上ないわ。効果範囲にいる人間の力と記憶を纏めて奪っちゃうんだからね」

社会は歯車と現されることもある。別に歯車を卑下している訳ではない。

まるで複雑で超高度な技術の集大成である機械の塊のように、多くの人々が組み合わさって、それぞれ動くことで社会と言う物が動いていく。その様子が、『歯車』と言う表現につながる訳である。

では、その歯車のうちいくつかが抜け落ちてしまえば、その機械はどうなるだろうか。

多少の不備ならばこの機械は自力で補修できるであろう。

しかし、あくまでも「多少」である。幾つかの都市に存在する人間が、ごっそりと子供になってしまう、つまり機械の中から、幾つかのブロックがごっそりと抜け落ちてしまうとと言う事態になれば、さすがの高度な社会も、いや、高度であるからこそ機能を保つことは不可能だ。

そうなってしまった場合、復旧までにどれほどの時間と予算が費やされる事か。

「…結構怖い悪魔なんですな」



「怖くない悪魔なんて聞いた事ないわよ、おキ又ちゃん」

とはいえ、その凶悪な悪魔もここ数百年ほどは力を蓄えるつもりであつたか、大人しくしていた訳だが。

「つまり、切り札って言うのは」

「そう、『金の針』、よ」

「……美神さん？」

「なによ？」

なんとなく汗をたらしながら、忠夫は美神に質問を続ける。それを横目でみながら、除霊道具の用意に余念がない美神。

「パイパーってのにとって、金の針は絶対に取り戻さなけりやならないモンなわけですよね」

「当たり前じゃない」

「……んで、今回の依頼はどっから？」

「解体業者よ。いきなり「うちの社員が変なの」に子供にされちまつた！ とうにかしてくれ！」って高額の依頼が来てね」

「変なの？」

「ええ。ピエロのかっこしてラッパを持った、変な笑い声の悪魔だ

つ  
た  
つ  
て  
…  
」

美神の手が止まった。

横島の言わんとしている事に気がついたのか、表情が焦りと驚愕の色に一気に染まる。

「そいつを見て無事だったんですか?!」

「つてまさか!!」

ちゅらちゅらちゅらちゅらちゅらちゅら

同時に放たれた美神と横島の声に含まれた焦燥を嘲笑うように、その音は事務所の中に届いた。

何処からともなく妙に明るい音楽が聞こえる。TVか、とも思っ  
たろう。その音楽に、強力な魔力が籠っていなければ。

「美神さんっ！！！」

衝動的にその音楽が聞こえてくる方、窓の方へ、美神たちを庇うようにポケットから石を取り出しながら飛び出す忠夫。彼が窓を開け放つと、其処には果たして。

ちゅらちゅらちゅらちゅーらーらー

悪趣味なピエロの格好をし、ラッパを吹き鳴らす悪魔。パイパーの姿があつた。

「ヘイツー!!」

「うおっー!!」

慌てて手に持つ石を投げようと振りかぶったが既に遅く、忠夫はそのパイパーの『子供にしてしまう』能力をもろに喰らうてしまう。

「ちいつー!!」

悪魔パイパーは最も大きな霊力を持った、おそらくGSであろう女性が無事であることを確認すると、そのまま中に飛び上がり、東京の空へと消えてしまった。

「しまったっ!! この依頼自体が罠だったのねっ!!」

「美神さん!! 横島さんが、横島さんがっ!!」

つまり、パイパーが目撃されたこと自体が罠であり、パイパーとしてはその姿と能力を見せ付けてしまいさえすれば良かったのである。

る。

あとは自分を悪魔パイパーだと判断した人間達が、放っておいても勝手に自分に対して最も有効な武器『金の針』を取り寄せる。

その受け渡しの現場を抑えるも良し。若しくは片方を先んじて潰しておき、後から来た獲物を狩るも良し。後者には、自分の存在がばれると言っリスクがあるものの、どちらにせよ『金の針』奪還という目的は果たせるはずであった、が。

「あの妙な小僧！！もう少しだったって言うのに、とぼけた顔して勘の良い！！」

忠夫が横槍を入れたおかげで、予定が大幅に狂ってしまった、と言う訳である。

「ちっ！！ やってくれるじゃないあの禿げ！ おキ又ちゃん、すぐGS協会に連絡を取って！ こっちから『針』を受け取りに行くわよっ！」

「わんっ！！」

窓の外を睨み付ける美神の耳に、甲高い子犬の鳴き声が届いた。

それは、彼女の背後から聞こえてくる訳で、そしてそこには先程パイパーの能力を食らった横島が、おキ又に抱えられている筈で。

恐る恐る振り向いた彼女の眼に、呆然と小さな子供を抱えているおキ又が見えた。

「この子、横島さん…ですよ」

「おねーちゃんたち、誰でござるか？ それにここはどこでござるか？！」

パイパーの攻撃を喰らった忠夫が起き上がると、其処には、狼の耳と尻尾を持った年の頃十歳を超えないであろう年頃の和装の子供が、腰に挿した全長50センチ程の木刀をその先っぽをぶるぶると震わせ、涙をこらえながら美神に向けている姿があつた。

「それじゃ、おねーさんたちは敵ではないでござるな？」

「いづるって…ええ、そう思ってくれてもいいわよ」

いまだにソファアの陰から警戒心剥き出しでこちらを眺める忠夫に対し、あまりの口調の時代錯誤っぷりから、違和感バリバリの美神。

「ええと、どうしましょう美神さん？」

「…足手まといを連れて行くわけにも行かないわね。先生のところ

で預かってもらいましょう」

「あしでまといとは無礼な！それでも父、犬飼ボチと母、沙耶の息子！れっきとした侍でござるっ！」

「でも子どもでしょ？」

会話の流れは分からずとも、なんだか自分が役立たずといわれたっぽいことは分かる。思わずソファアの陰から飛び出し、反発し反論する横島（小）であつたが、あつさと子供であることを指摘され、悔しさに唸る。

再び木刀を構えて唸り声を上げる横島にふと悪戯心を刺激されたのか、美神は子どもの構える木刀を片手で握りしめた。

驚き木刀を取り返そうとするも、いかに半人狼とは言え大人と子供。

しかも相手は女性と言えど、年がら年中荒事をこなし、神通棍を振り回している女傑である。

しばらくうんうんと唸りながら引つ張っていたが、ぴくりとも動かなかつた木刀が、美神が急に手を離れたことで勢いよく後方にすっぱ抜け、結果として横島は後頭部をソファアに柔らかく受け止められる事になった。

「…うううううううう」

「み、美神さぁん」



「どうしましょう、美神さん。私が横島さん探しましょうか？」

「……いいえ、一緒にこのままGS協会に行つて、『金の針』を受け取る方が安全ね。さつさと切り札持つて、パイパー倒さないと被害が広がっちゃう可能性が高いわ」

「そんなつ！横島さんはどうするんですか？！」

「……あれでも半分人狼なんだし、そうそう捕まったりはしないでしょ。あの逃げ足の速さといい、こっちがさつさと決着つけければ、問題無いハズよ」

「でも……」

事務所のドアに向かつて歩き出した美神の背を追いかけるながら、おキ又はちらちらと窓を振り返る。

見なくても心配そうな表情をしていると分かる彼女の声音に、美神は振り向いて叱咤する。

「いいから早く行くの！ これ以上グダグダしてたら、それだけあの子の危険も増えるわよ！」

どこにいったか、そしてその搜索にいくら時間を取られるかわからない以上、とりあえず所員である忠夫のことを後回しにして、元凶を一気に叩き潰す作戦に出た美神たち。それでも二人の足取りには、振り切るには少々ならず後ろ髪引かれる気持ちが見え隠れして



いた。

「……うまくいったでござる。これぞ奥義『逃げたふり』！ 役立たずじゃないことを母上に誓って証明して見せるでござる！」

事務所を出て急ぎ足で移動し始めた美神とおキヌの後ろ五百メートル程の場所に、頭に木の枝を括り付け、何時ぞやの妹分にそっくりの格好で美神たちの後をつける狼耳と尻尾の生えた子供の姿があったとか。

コンクリートで覆われた街中では、さぞ目立ったことだろう。

「……ったくあのハゲピエロ！！ 離れたところからちゅらちゅらちゅらちゅらっ！！ いいかげんうっとうしいのよ！！」

「でも、横島さんの方に行っていないのは分ったんですし……」

「この結界石、買ったら一体いくらすると思ってんの！ あの子の時給じゃ十年たっても払いきれないのよ！」

「無料で手に入れましたよね……？」

あの後、車に高価な対呪歌専用の結界を封じ込めたという、才力

ルト商品取り扱い「厄珍堂」の今月の目玉商品というひつじょくに怪しげな試供品を使い、幾度となくあったパイパーの能力を使った嫌がらせに近い攻撃を凌ぎつつ、最初にパイパーが発見された場所である「バブルランド遊園地」にたどり着いていた。

ちなみに、以外にも結界石自体の効果は高かった。

それを売りつけた厄珍堂の店主は、「たまたま」パイパーのうわさを「何処から」か聞きつけ、「たまたま」美神に商品を持っていたらしい。

美神は美神で、「そんな怪しげな商品、テストもしてないんでしょ？今ならレポートとGS美神のお墨付きをあげるわよ。役に立つたらね」と只同然の値で強奪していったのだからなんともはや。

ともあれ、この遊園地、バブルの崩壊とともにその建設計画も正に泡と消え、そのまま何年も放置されていたと言う曰く付きの物件であるが、今回のパイパーが目撃された地点もここである。

強固な結界の張られたGS協会にて『金の針』を受け取り、それを使った『ダウジング』でも確かめてみたが、やはり反応はここであつたことから美神たちはその根城を断定。

そのまま突入することとなった。ちなみに神父達は別件で除霊にかけているらしく、連絡が取れなかった。

「ちくしょうっ！あの小娘ども、とうとうここまできやがったか！！だが、なんとしてもアレを取り返して、またあの頃のように暴れまわってやるんだ！」

バブルランド遊園地の地下深く。そう呟くパイパーの周辺には大  
小様々の、それまでの被害者の顔の浮かぶ風船が浮かんでいた。

その頃。

「…なんでござるかこの惨状は」

呟く忠夫の前には、おそらく美神たちに対するパイパーの攻撃に  
よるものであるうクレーターや、転倒した自動車、砕け散った街灯、  
折れ曲がった看板などが道に沿ってずっと続いていた。

流石に途中で車に乗り換え、時速200km近い速度で一般道を  
道交法を無視しすつ飛ばす美神たちの車には追いつけなかったのだ。

「これを追いかければ、簡単に目的地にいけるでござるなっ」

そう簡単にのたまうと、再び自転車並みの速度で駆け出そうとし  
て。

「…おや？」

何かの声を聞きつけ、近くに横転しているトラックの荷台に近づ  
く。

「…むーん。何かがいるようでござるが、わからん。こういつときは、父上の耳が羨ましいでござるなあ」

そのまま、立ち去ることもできずに、仕方なく救助活動をはじめ  
る忠夫。

「困っているものを助けるのが、武士の役目と母上も言っていたで  
ござるからなっ！ …えいつ」

どうみても歪んで簡単には開きそうに無いその扉を、拾った棒で  
こじ開けてみれば、中には無数の輝く光点が。

おもわず仰け反る忠夫に、中身「達」は思わずといった様子で反  
応した。

「にやつ！！！」×無数

飛びつき、懐き、じゃれまくるのであった。

「こ、こらっ、拙者は狼なんだぞっ！！ うひゃひゃひゃひゃ！  
くすっぐったいって！ やめてー！！」

山中に、半人狼の子供の笑い声が木霊した。

「よし、頼んだわよおキ又ちゃん」

「はいっ！頑張りますっ！」

遊園地内部、その中心にある、おそらく完成の際は出し物が催される予定であつたのだらう広場で、美神から何事かを耳打ちされたおキ又は美神からペンチと細長い針のようなものを受け取ると空に舞い上がった。

「パイパーさああああん！ 早く出てこないと、この針折っちゃいますよおおおっ！！」

「マテエエエツ！！！！」

とりあえずパイパーを召還？した。

「お出ましのようね、悪魔パイパー！」

「お前らなあああっ！！ 人がせつかく色々と下準備して待つてんのに、どうしてそっいうことをだなあああっ！！」

その人質をとるようなあまりと言えばあまりの行為に、おもわず

隠れ家と言つか秘密基地と言つか、とりあえず本体のいるところから飛び出してきたパイパー。」

「ハン、ばっかじゃない？だれがそんなミエミエの相手の罠に自分から引っかかりに行くかってゝの」

「だからって何でいきなりそういう事をするかなあつ！ あれはお前らにとっても切り札だろうがあつつ！」

「別に切り札を使わなきゃ勝てないって訳でもなさそうだしねえ。あんだ、悪魔にしてはセツコイし」

「…グツ！？」

パイパーが美神たちにやってきたことと言えば、不意打ち、反撃の仕様の無い遠距離攻撃、トラップ、そして多少の、かなりの高出力とはいえ、それこそ呪歌専用のはずの結界でも防げるような魔力を使った砲撃。

「あんだ…エネルギー尽き掛けてるでしょ？ そうでなきゃ、あんなしみつたれた事ばかりやんないわよねえ？」

「当ったり前だ！そうでなきゃお前らやあの結界なんぞあつさり纏めて はっ！！」

「語るに落ちるとはこの事ね。さあ、さっさと諦めて 地獄に帰りなさいっ！！」

あつさりと自分の内情をばらしてしまい、振り下ろされた美神の神通棍を慌ててかわすパイパー。

「……くそっ！このパイパーを舐めるんじゃないっ！！」

そう叫んだパイパーは、口笛を高く響かせる。

ちちちちちちちちちちちっ！

その音に呼ばれ出てくる大量の鼠たち。

「はーっはっはっはあ！！ いけ、我が眷属たちよっ！！」

「ちっ！ 厄介な物呼んでくれるじゃない！」

現れた鼠たちそれぞれは普通の鼠である。しかし、その膨大な数と、パイパーによって制御された連携はまさにパイパー自体よりも厄介な壁となつて、パイパーに決定的な一撃を決めることができない。

「そらそら、どんどんいくぞっ！！」

まさに波のように襲い掛かる鼠たち。

「くっ！このっ！！」

美神も必死に神通棍で応戦するも、その圧倒的な数の前にはどうしても劣勢を感じてしまう。

そもそもが霊体でも無く、普通のネズミが操られているだけな為に、どうしても対霊、対悪魔に有効な手段が通じにくい。

油断すればあっさりとネズミの包囲に押しつぶされ、生きたまま齧りつくされるだろう。

そんな想像をしてしまった美神の額に、冷や汗が一つ流れた。

「はーっはっはっはあー！！ そのまま鼠どもの餌にしてやるわっ！  
！」

「ジョーダンじゃないわよ！ こんな奴らにくれてやるものなんて一つも無いわっ！」

「きゃーっ！ きゃーっ！ ネズミーっ！ いやーっ！」

ネズミから必死に逃げようにも、美神の傍から離れるわけにもいかず悲鳴を上げ続けるおキヌを背中に庇う。

実に楽しげに哄笑を上げるバイパーの姿に怒りを露わにした美神は、こうなったら、と切り札の一つであるイヤリングの精霊石に手を伸ばした。

が、それが効果を発揮する事は無かった。

ネズミ達が、その動きを一斉に止め、突然遊園地の向こうに見える山を向いたのだ。

訝しげにバイパーを見上げるも、彼自身も何がどうなったのかを把握しきれておらず、ひたすらに声を張り上げ美神を襲わせようとしている。

しかし、ネズミ達は動かず、じっと一点をその無数の眼で睨んで



いる。

「……………あああああ」

最初に気付いたのは、空高く浮かんでいるバイパーでも無ければ、美神の近くでふよふよと浮かびながらネズミの群れに囲まれた状況に耐えきれなくなって気絶しているおキヌでも無い。

一人だけ、地面に足を付けていた美神が気付いた。

「…地震？」

眩きが漏れたものの、それだけではネズミ達の反応が良く分らない。

そして、周囲とバイパーを警戒しながらもネズミ達の睨む方向を見た美神の耳に、その音が届いた。

「…あああああああああ！」

揺れは大きくなっている。  
声も大きくなっている。

そして、この距離まで近づいてきて、美神に正体を悟らせた。

「あああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

にゃー。

わんわんわんわんわん！！

きしゃー！

うほっ！うほっ！

かー。

ばおーん。

山の茂みを突き破り、小さな横島を先頭に、暴走とも言えるような勢いで動物達が突撃してきた。

「たーすーけーてーっ！！！」

大音声とともにやってくるのは、一体何処から集まったのやら、と思うほどの獣たちの群。犬やら猫やらに始まり、爬虫類、鳥類、哺乳類。ここら辺りの山の生き物全部ではないかと思うほどの動物たち。

ネズミ達の行動は早かった。

素早く散らばり、物陰に隠れ、その正面から逃げようとする。

しかし、そのはしっこさを持ってしても、既に最高速まで加速を終えていた動物達から逃げるには遅すぎた。

そして、数えきれない動物が、猛獣が、猛禽類が、彼らを捕食し、踏み散らし、隠れた物陰ごと粉碎しながら通り過ぎていく。

「な、なんだってんだ…？」

「隙ありっ！」

「ぐぎゃあっ?!」

呆然と自分の眷属が蹂躪されていく光景を見ていたパイパーだが、この場で最も眼を離して行けない人物から意識を逸らしたのが間違っていた。

美神が打ち出した霊体ボウガンの矢が、その身体に突き刺さる。

思わずバランスを崩し、重力に引かれ落下する。

そして、地面に叩き付けられた、彼の視界に、運の悪い事に今までに彼を踏み碎かんとするように突進中の動物達の足が入り込んだ。

「ま、待て待て嘘だろおおおっ!」

パイパーの眷属達は、あわれその質量差だけでも数倍はあるのではないか、と思われるスタンピードの前に、儚く蹴散らされたのであった。

「こわかったでござる! 怖かったでござるようっ!」

「よしよし、もう大丈夫だよー」

「しっかしまあ、異様な光景だったわねー…」

狂乱の大暴走が終わった後、いまだにぐずりつづける忠夫から美神たちが話を聞いたところによると、横転したバスから猫達を助け出した後、どこからともなく野犬の群が現れて、一緒になって懐いてきたので、しばらく遊んでやったのだが。

ふと気付くと、道路の横の森から覗く、異様に多くの視線。

その視線に怯えて、後ずさってしまえば、後から後から沸いてくる獣たち。

思わず逃げ出した物の、追いかけてこでもして遊ぼうとしたのか、或いはただ単に本能で逃げる者を追いかけただけか。

そしてひたすら一直線に走り続け、気付けば、ここに着いていておキ又ちゃんに抱きついていて、と言う訳である。ちなみに彼らは、そのまま何処かへ走り去ってしまった。

「ひっく、ひっく」

「ほーら、もう泣かないの」

「まったく、あんた男の子でしょ。もうちょっと頑張んなさい」

「ぐしっ。うん。ありがとう、えっと…」

「あ、そっか。まだ記憶とか奪われたままなんだ……。そっちおキ又ちゃん。私が美神よ」

「ありがとう！美神おねーさん！おキ又おねーちゃん！！」

子供の純粋な笑顔で言われたそのお礼に、柄にもなく照れたようにそっぽを向く美神と、笑顔でど「ういたしまして」と返事をするキ又。このまま大団円、と行く筈だった。

が。

「ふざけるなああつ！！」

「きゃっ！」

「なにっ！？」

「おねーちゃん達、あぶないっ！！」

その真下から地面を突き破って現れたのは、もはやその力をほぼ全て使いきり、分身を作り出すことさえできなくなったパイパーの本体。

そしてその手に掴まれたのは、またもや二人を庇ってその前に飛び出した忠夫であった。

「このくそガキがああああつ！！　よくも、よくも邪魔をおおつ  
！！」

「ぎゃー！！でっかい鼠がしゃべってるでござるー！！」

「横島くんっ（さんっ）！！」

「おおっと、動くんじゃねえぞっ？確かにもう俺は終わりだろうよ、もはやここから逃げ切るだけの力もねえ…だがなあ」

巨大なネズミの短い前足が、美神に向かって突き出される。

そして、放たれるのは、殺意の込められた黒い光。

「きゃっ！！」

「美神さん！」

「美神おねーさん！！」

横島の腕を掴んでぶら下げながら、美神に魔力砲を放つパイパー。かろうじて神通棍を犠牲に防いだが、足に傷を負い、神通棍も折れ、もはや防ぐすべも避けるすべもない美神に向かって

「貴様もツ！！ 道連れだあっ！！」

放たれようとする魔力砲。しかし

「させるかあああっ！！」

それを再び邪魔したのは、忠夫の腰にあった木刀の中から出てきた輝く刀身。それはパイパーの右目に突き刺さり、その手に溜められていた禍々しい力が霧散した。

「ぎゃあああああああつ?!」

「し、仕込み刀って…子供になんて物騒なものを…」

「このクソガキツ…最後の最後までええええつ!!」

もはや魔力砲を放つ力さえなくしたパイパーは、最後の意地とばかりに巨大な口を開く。

右目からは止めどなく血が流れ、残っていた魔力も先程の一撃に箆めていた分ではば終わり。

ならば、せめてこの小僧だけでもと牙の狙いを忠夫に定める。

「鼠がつ!! 牙で狼に敵うかあああああつ!!」

しかし横島は目に突き刺した仕込み刀をその臂力で引き抜くと、その勢いのままに、自分の腕を掴んでいる方のパイパーの手首を斬りつける。

手首が飛び、パイパーの拘束から抜けだした横島を、突然の片目の消失で距離感の掴めなかった巨大な鼠は、その口の中に獲物の感触を感じる事が出来なかった。

思わず吐き出そうとした罵声は、しかしその口を通る事はない。

「……カハッ」

地面に落ちた横島が、そのまま今度は地面を蹴って飛びあがり、巨大なネズミの喉笛を噛みちぎったのだ。

「ぺつ。不味っ、くっさーっ……」

返り血に口元を染め、噛み千切った物を吐き出し、しかし倒れ行く巨大なネズミから眼を離さないその瞳は、確かに狩をする『人狼』の眼であった。

「……ねえ……おキ又ちゃん？」

「……なんですか、美神さん？」

「……うしばらく、あのままの方が役に立つんじゃない？」

「……あは、あはは」

「……あはははははははははは……」

乾いた笑い声が、ついに完成しなかった夢の跡地に満ちていく。

空には綺麗に半分に分かれた月が、顔を出し始めていた。



「長老ー？いますかー？」

「なんじゃー？」

「犬飼さんちのてれびがなおったらしいですから、いっしょにいきませんかー？」

「ええのー。いまいくぞー」

人狼達の中でも特に問題児な奴らが飛び出したお陰で、里にはだらけ切って、一気に10は老けたような長老の姿があった。やはり、人生多少起伏があつた方が張りが出るようである。

「相変わらず器用じゃのー」

「忠夫君には負けますけどねー。それじゃ、えいっ」

「番組の途中ですが、予定を変更して臨時ニュースをお伝えしております！！ 突如街中に現れた時代劇のような格好をした男二人は、いまだその正体は不明、その姿が巨大な狼に変わったと言う未確認情報もこちらには伝わっています！！」

「「は？」」

「…ああつ！ あれです、あの二人がその二人のようです！！ 警官隊による突撃が だめですつ！！ 止まりません！！ 20人近い機動隊をふっ飛ばし、現在新宿区に向かって進行中！！ 進行方向の市民の皆様は、すぐに非難してくださいっ！！！！」

「……………」

「わーっはっはっはあ！！ ヌルイぞけーかんとやらっ！！ これなら息子の方がまだましであつたわっ！！」

「おーい、犬飼ー。そろそろいかないと日が暮れるぞー」

「犬塚、その手にもってるやつ、うまそうだな」

「いや、其処の店先に落ちてたもんで、つい」

「1本よこせ」

「ヤダ」

「……………」

「仲間割れです！！ 仲間割れをはじめたようですつ！！ そして  
どうやらあの二人の名前が判明しました、「犬飼」「犬塚」と名乗  
っているようです！！ それにしても意地汚い！ 本気です！ 大  
の大人が落ちていたフランクフルトを争って本気で刃を交わしてい  
ます！！」

「いー加減にするでござるよ！！ 父上、犬飼殿！！」

「ああつ！！ シロー！！」

「む、犬塚のところの娘ではないか」

「こんなに回りに迷惑かけて…まあそれは良いとして、いつになっ  
たら兄上のところに行くのでござるか？！」

「「さあ？」」

「……狐」

「……最初っからこうしてればよかったのよ」

「「くらえええええいつ！！」」

「「うおおおおおっ！！」」

「爆発ですつ！ 情報によりますと、新たに二人の怪人が乱入した

模様！！                      ここでいったんCMです」

皺くれた手が伸び、テレビのスイッチを押した。

真っ暗になった画面に、きらきらと輝く眼が映る。

張りを取り戻す所かはち切れんばかりに力の込められた腕から、  
徐々に皺が消えていく。

張りつめられた筋肉が、その上に被せられた皮膚を内側から押し  
上げているのだ。

「ちょ、長老？」

「…殺ル。オレサマ、オマエラ、マルカジリ」

「長老ー?!」

ふむ。誰だね君は。どうやら全く気付かずにこの空間へと入って  
きたようだが、ここのマナーさえも知らぬのか？

ほう、新入りか、ならばしょうがない。

なに？新入りとはどういうことか、だと？

なに、それはだな

「やあ」

どうしたんだい、そんな、狐につままれたような顔をして。

どうやら、疲れているようだね、しばらく眠ると良い。戯言には惑わされないことだよ。

いいから、ほら、目を瞑ってごらん？ 段々眠くなってきただろう？

それでは、良い夢を。

### 第十三話（前書き）

投稿遅くなりました。

何時もより長めでお送りいたします。

## 第十三話

「それでは、行ってくるでござる！」

「はい、いつてらっしゃい」

「全く、こんな朝っぱらから元気ねえ…ふわあ」

GS美神除霊事務所。午前5時20分、太陽が顔を出し、鳥達が餌を求めて飛び立ち始める時間帯である。

事務所の入ったビルの前には前には袴姿で箒を持った『お掃除する幽霊少女』がいて、その姿をパジャマ姿の、寝癖であつちこつちに跳ねた髪の毛を片手で抑え欠伸交じりに5階の窓から眺める女性がいる。

そして、どう見ても狼耳と尻尾が生えており、腰に木刀を挿している事以外は普通の、子供服を着た男児が新聞配達員のバイクをブツちぎりながら駆け抜けていくという光景があった。

話はパイパー戦後まで遡る。

「ええっ！ 横島さんの記憶と力が入った風船、見つからないんですか？！」

「そうなのよ…。おかしいのよねえ、実際、他の被害者の風船はあ

ったのに、何であの子のだけないのかしら？」

「そんな事言ってる場合じゃないですよ！ それじゃ、横島さんは……」

「解呪法が分かるか、あの子の風船が見つかるまではあのまま、ね」

パイパーを苦戦の末何とか退け、高額報酬がもらえるとほくほくの美神と、車の助手席で眠りこける半人狼の子供、そして、パイパーの開けた穴から飛び出してきた数百個もの風船を空中で捕まえながら、片っ端から忙しげに『金の針』で割っているおキヌ。

どれがどの被害者の物かが分からない為、結局全てを割らなければならぬ。

空を飛べて最も効率よく割れるのはおキヌであり、針が1本しかない為、他二人は見物に回っているのである。

「おキヌちゃん！！そろそろ終わりそう……？！」

「ええと、あと5個です……！」

「わかったわ……！！ 頑張っ……！！」

「は……い……！！」

車から身を乗り出し、地上から空飛ぶおキヌに向かって大声で叫ぶ美神。そしてその隣でひたすら寝こける横島（小）。



「全く…ガラにもない事するんだから」

すっかり子供になってしまい、もう夜だからとばかりあつさりせまつ苦しい助手席に丸まって寝息をかく横島の頭を撫でながら、なんとなく呟く美神である。

「ありがと、小さな侍くん」

とても小さな声と言つか、まるで囁くような声で、熟睡する半人狼にそう声をかける。その頬がほんの少しだけ赤く染まっているのは自分の言葉に照れた為か。

「…私のガラでもないわね。とりあえず、こいつが元に戻ったらちよつと上等な骨付き肉のボーナスでも出してあげようかしら」

「美神さ〜ん！ 終わりましたよ〜〜！！」

でもちよつと勿体ないかな、と美神の脳裏に少しだけそんな思考が走った。

それは横島にお肉を出すのが勿体ないのか、それとも、彼が元に戻った方が扱いが面倒くさい事とちよつとだけ思っただけからか。

そんな事を考えていた美神の頭上から、仕事を終えたおキ又が声とともに降りて来た。

益体も無い思考をおキ又を見上げて振り切り、そして二人の大きな会話を聞いてもぐっすりと寝こけたままの小さな横島を見て、その口元が苦笑いを零した。

「そう、お疲れ様…って?!」

思わず二度見した美神である。

「…え?」

そう呟き固まる美神のそばに、作業を終えたおキヌがふよふよと降りてくる。そして美神の様子を見て、何に気付いたか慌てたように助手席の方に回りこむ。

「横島さん?!」

「むにやむにや…えへへ…母上…」

全ての風船を割ったはずなのに、未だ元の姿に戻らない涎を垂らした寝顔の忠夫がいた。

結局その後周辺を考えられる全ての方法で探し回り、地下に潜って搜索するも収穫無し。ならばと使った『金の針』にも反応がなく、そのまま途方に暮れながらとりあえずいったん事務所に引き返したのである。

「どーします?」

「どーしようか」

それから一週間。

その間の除霊は全て断るか延期し、なんとか横島に、今、両親が忙しくて人狼の里から預かっていて、そう長くしないうちに里に帰

れること、しばらくは此処で過ごすこと等を納得させることに成功する。

親の躰が良かったか、礼儀正しく素直な少年として育っていたよ  
うで、しっかりとお礼を受けた美神達が、ちくちくと良心を刺激さ  
れつつ、どうしてこの子の将来はああったのだろうかと疑問を抱  
えたのは然もあらん。

その間に情報を集めるも現在めばしい物は無し。

様々な情報屋や文献、GS協会方面にもあまり眠らず当たってい  
た美神は、直前のパイパー戦の疲れも重なり、とうとう気絶するよ  
うに眠りに落ち、様子を見に来たおキヌが仮眠室まで運んだ。

そして目覚めたのが、丸一日以上経って、日頃まだまだ布団に包  
まれているこんな時間と言う訳である。

ちなみにおキヌはいつもこれくらいの時間から活動している。新  
聞配達員や牛乳配りの人たちとも仲良し。

「ま、手は打ったし、後は待つのみ。…ふああ。おキヌちゃん、  
私、二度寝するからしばらく起こさないでねー」

そう言っただけで眼下のおキヌに手を振り、再び仮眠室へと戻っていく  
美神。その顔にはまだまだ疲れが残っている。

少し心配そうな表情を浮かべながらも、おキヌは一旦筆を置き、  
温めるだけで食べられるメニューを考えながら事務所の中に戻って  
いくのだった。

一方その頃、散歩に出た横島。

「とーきよーって所は、色々あって面白いでござるなー!!」

独り言を言いながら、人の群の中を尋常でない速度で走っていた。事務所の所長と同僚の悩みなぞなんのその。もう日は頂天に差しかかるうというのに、元気に街中を走り続けている。

「人も一杯だし、てれびで見た車もたくさんあるし…これが『觀光』でござるなっ!」

辺りをきよろきよろ珍しげに見回しながら、爆走する。

それは、彼が人気の無い住宅街に差し掛かったときだった。

交通事故の原因でも多いのが、余所見運転である。半分とはいえ、人狼は人狼。当然その走行速度も頑丈さも反射神経も人間の比ではない。比ではないが、

「くぎやつ!!」

人狼だろーがなんだろーが、注意も散漫な状態で60kmという速度域にいれば、そりゃいつかは事故る。

「あ、ごめんでござる」

「……」

「えっと…そうだ！ 返事が無い。ただのしかばねのよーだ」

間違いなく父親の悪影響である。

物凄い音を立てて衝突され、塀をひび割れさせながら沈黙する変な帽子を被った異様にひよろ長いにーちゃんと、鉾つきジャケットを着込んだ逆に背の短いにーちゃんという奇妙な二人組。

当然のごとく気絶している。むしろ骨折や流血の様子が無いところが異常である。

「ええと、こういうときは…」

小首を捻る横島の脳裏に蘇る、父に受けた教えの数々。

こう言った時に使えそうなものは無かったか、と考えに考え、一つの言葉が思い当たった。

『よいか、忠夫よ。しかと覚えておくのだぞ！』

『はい、でござるっ！』

『犬飼家、戦の裏道、大人の策略編その四っ！！』

『そのよん！！』

『…目撃者は、消せ』

「ええと、たしかまずは目撃者を探して、と…」

記憶の中で、齒を光らせながら異様に怪しい笑顔でそうのたまう犬飼ポチ。

こうやって横島の記憶の奥底には色々なモノがすりこまれていったのだ。そしてそれを忠実に実行する、未だ父の怪しさとアホさを良く理解していない横島（小）。

そして程なく彼の眼は一つの違和感を探り出す。

「…むっ？！そこでござるっ！」

ゴミ置き場に置いてある青いバケツの蓋が、ほんの僅かであるが浮いているのである。そしてその傍にはまるでぶちまけられたかのような、いや、誰かがぶちまけたのであろうちょうどバケツに一杯分のゴミの山。

いかにもな現場に、とりあえず離れたところから石を投げて様子を見る。

「さあ、出てくるでござるっ！！」

そして威嚇の声を出した彼に帰ってきた反応はと言つと。

「…………ふえ」

「え“？”」

「ふえええええ…」

投げつけられた石によつて蓋の外れたバケツの中に蹲る、奇妙な服を来た、角の生えた女の子の泣き声であつた。

再び蘇る横島の記憶。

先程と違いがあるとすれば、彼の目の前に立っているのが母親であり、父親はその足元にボロ雑巾のようになって転がっている所だろう。

『良い、忠夫？ あの馬鹿の言うことはいいかから私の言うこととはしつかり覚えておいてね』

『は、はいっ！！拙者、まだ死にたくないでござるっ！！』

『あらあら、この子ったら…そんなおおげさな』

『い、医者を呼んでくれ…』

『えいつ』

ぐしゃ

『ち、父上ー！！』

『大丈夫よ。昔はあのくらいならまだまだ逝けたわ。そんなことは置いて、忠夫？』

『はいッ！！』

『貴方は、将来女の子や女性を泣かしちゃダメよ？』

『わ、分かりましたでござる！』

『でなきや…』『うっ』『よ』

思い出した事と、その内容と其処から導かれる現況のあまりの危険性にとめどなく冷や汗を垂らし始める忠夫。

やばいやばいやばい！！母上にはれたら折檻されるでござるっ



!!

もはや目撃者がどーたらこ　たらなどと父の言葉に従っている場合ではない。とりあえず必死に対抗策を考える。しかし、

「ふえええええええ…」

「あああー！ー！！」

目の前で泣き続ける少女のおかげで全く考えが纏まらない。

もしこんなところ母上に見られたら、絶対に口クな事にならんでじぎるよー！！

…もうその女性がいなくとも、彼はそのことを覚えていない。いや、経験していない。それがどれほど大切なことであろうとも。それが、パイパーの残した呪いなのだろうか。

「ええと…ごめんなさいっ！」

「ふえ？」

侍の誇りは何処へやら。

地面に擦り付けんばかりに下げられた頭と、泣いている少女本人よりも悲壮な感情の籠った謝り文句は、とりあえず女の子の涙を止める程度には、役に立ったようである。

「あの、すまなかつたでござる。拙者、てつきり怪しい奴かと」

ようやく泣きやんだ女の子であったが、横島の言葉に首を振る。

「あ、いや、お前が怪しいといってる訳じゃなくて、その…え？  
何でござるか？」

少女は、横島の言葉を遮るように、その服の袖を軽く引つ張りながら自分を指さし、小さな声で呟いた。

「……天竜」

「天竜？ ああ、名前でござるか！！ 拙者、犬飼忠夫と申すもの。  
侍でござる！」

「……耳？」

「む、なんでござるか？」

とりあえず初対面というか、一番最初にやったことが石を投げるという、今思えばかなり冷や汗モノの出会いであったが、自己紹介も済んでほっと一息。落着いて横島を見た少女が気になるのは、人狼としての部分であった。

「ああ、拙者半分人狼でござるからな」

「…おそろい」

「ん、おお！ 角でござるか！ なかなかっこいいではござら

んか！」

「……」

泣いた鳥がもう笑う。そんな感じにつこり笑う天竜と名乗った少女。

「……しっぱ」

しばらく横島の耳を興味深げに見ていた少女が、ふと横島のふりふりと上機嫌に動く尻尾を捕獲した。

耳もそうであるが、自分には無いふさふさの尻尾の動きに誘われたらしく、子どもであるせいもあってか結構遠慮なく尻尾を捕まえた。

「うひゃっ！い、いきなりは止めて欲しいでござるよっ！！」

「……ダメ？」

尻尾には神経も走っている為、結構敏感でもあるのだ。

急につかまれ離して欲しいと告げるも、少女はその感触に囚われた様子で、にぎにぎとつかんだり離したりを繰り返しながら、小首を傾げて横島に問いかけた。

ここで断ると、また泣きそうだな、と既に諦め半分に横島は溜息を吐く。

残り半分はせめてお手柔らかに、と祈る気持ちだった。

「ちょ、ちょっとだけでござるよ。」

「……ん」

「うひゃひゃひゃひゃー！」

とととと歩いて忠夫の後ろに回ると、いきなり尻尾に頬擦りを始める天竜。

一旦は断られ、少々落ち込んだもののOKを貰ってからはかなりお気に召したご様子で、辺りにはなんともいえない和やかな雰囲気漂っている。

子どもの泣き声を聞きつけて辺りの家から出てきた住人達も、なんだか癒されているようである。

尻尾とか角とか耳とかを気にしてもいないのはどうかと思うが。

人気のあまり無かった住宅街に、しばし少年の笑い声が響き渡った。

「ぜはっぜはっ」

「……大丈夫？」

「ぶふあゝゝ。も、もう大丈夫でござるよー！」

「……ごめんなさい」

そう眩きシユンと小さくなる天竜に、慌ててフォローを入れる忠夫。

「あああつ！大丈夫でござるよ！　ちょっと笑いすぎて苦しかっただけでござるから」

「……ふえ」

「ああああつ！！」

フォロー失敗。

「そ、そういえば！何であんなところにいたんでござるか！」

「……ふえ？」

「あのバケツの中でござるよ」

「……あのね」

「ふんふん」

と思つたが逆転セーフであつた。

天竜の話によると、親のお仕事で旅行気分で行ってきたもの、ある事情で宿泊先のお部屋から出られなかった。そのため、あらかじめ「こんなこともあるーかと」おうちのいるんなところからいろんな物を持ってきたらしく、そのうちの幾つかを使って其処から見て、観光していたという。

ところが、なんだかへんなおにーさんたちが追いかけてきたので逃げ出し、とりあえず隠れていたらいきなりすごい音がして、その後隠れ場所に石がぶつかってきたのでビックリした、と。

「そーいうことでござるな」

「……そーいうことなの」

「んで、その変な男とはどんな奴らでござったか？」

「……アレ」

そう言つて呟いた天竜の指の先には、先ほど忠夫が轢いた二人組の姿が。

流石に気絶から立ち直つてはいないようで、まだ意識は無い物の手足がピクピクと震えていた。

「む、さすが拙者！ いつの間にやら悪者を退治しておったか！！」

「……結果おーらい」

あさつての方角に2人揃つて親指を立てながら、一仕事終えた後の表情で笑う横島達であった。少年の方はちよつと汗を流していたが。

ともあれ、それまで和みながらも二人の話を聞くとともにしに聞いていた善良なる地域住民の方々は、その台詞を聞いて速やかに動いていた。

女性陣が二人にお菓子やお茶を出して角と尻尾、耳に触り。

その陰に隠れた男性陣が気絶した二人組をロープで縛って小声で子どもには聞かせられない物騒な台詞を各々囁き声で相談し、地面を数人がかりでひきずって行った。

なんともチームワークの良い町内である。

「んで？ 俗界には縁の無いはずの竜神様が、なんだっていきなり私の事務所に訪ねてくるのかしら？」

「美神さん！！ 私は今、非常に困っているのです！！」

「なんか工事に問題でもあった？」

「それはありません！ 大工の方々も、私が竜神だと知ったら何故かとてもお仕事が速く正確になりましたしっ！！」

「……どーりで」

忠夫が轢き逃げした二人組みをほっぽって、天竜と一緒に事件現場で歓待されているまさにその時、GS美神除霊事務所には竜神、小竜姫の姿があった。

美神が何かに納得した風なのは、何故か大工の棟梁に「手抜きでも良いから、余ったお金の半分は返してね」と言っていたにもかかわらず、返ってきたのが余った金額全部。しかも予想よりちよつと多い。

ラッキー

天罰や仏罰等を恐れた棟梁に比べ、何の恐れも見せずにそう考えるあたり、下手な神や悪魔よりも恐ろしい。

「それで？ 私の所にきたって言う事は、依頼かしら？」

「ええ、実は…」

小竜姫の語るところによると、竜神族の王、竜神王が地上に住む竜神たちとの会議に出席する為、地上に降りてきており、その仮の宿が小竜姫の管理する妙神山であるらしい。

地上に住み、仏道に帰依した竜神王を疎む輩が不埒なことを考える可能性があること。

そこで狙われるのが強大な力を持つ竜神王ではなく、その姫である可能性が高いこと。

しかし、妙神山にて会議が終わるまでの間 会議が終われば、地上の竜神たちにお披露目し、あわよくば娘を見初めた位の高い竜神に…と言う考えの元であるが 保護されているはずの姫本人が何らかの方法で脱走。早く保護しなければ危険である。

纏めると、そういうことである。



「と、言うことなのです」

「下衆いわねー。本人に勝てないからってその娘を狙う馬鹿も、そんな奴らの手綱を取る為に娘を嫁にやろうとする竜神王も」

ずばつときつぱりはつきり言い切る美神に、かなり含むものはあるものの、とりあえず自分の役目を果たすことが先決である。

「そ、そう言われましても、こちらにも色々と事情がありまして…」

「いーわよ、別に？ そんな話、昔からあんたらの言う俗界では珍しくも無いんだし。神界の連中も、別に高尚な存在って訳じゃないでしょーし」

「…それでは、本題に入っていていいでしょうか？」

「どーぞ？ ただし…ギャラは弾んでもらうわよ？」

全くやる気が見えない。

小竜姫も本来ならば自分の力で探したい。しかし、事は急を要する。

俗界もすでに様相を変え、小竜姫の知らない事が多すぎる。ならば、例え人間であっても、力を借りるのが最善の方策。ここで依頼をせず、不慣れな場所で対象を危険にさらし続けながら、それでも自分の力だけで探そうと言うのは下の下だ。

「結構です。それでは、こちらからの依頼は『天竜姫』の保護。報

酬はこのくらいで…」

差し出された箱の中身を蓋をあけて覗きこみ、美神はふん、と鼻を鳴らした。

「りょーかい。その依頼、GS美神が受けさせていただくわ」

「お願いします」

身内の情けない内情を晒さざるを得なかった為か、それとも仕方がないとは言え重要な案件を顔見知りにそっけなく扱われているが故か、小竜姫の顔が、一瞬だけ不快気に歪む。

が、次の瞬間にはいつも通りの冷静な表情がその顔を覆っていた。

「…いくわよ、横島君！おキヌちゃん！！」

小竜姫の表情の変化に気付いているのか、横目に小竜姫を見ながらも、美神は何も言わずに立ち上がる。

「…あのー、美神さん？横島さんは…」

「あ”」

三人組の内一人が大問題を抱えている事を思い出したのは、声に出しても返事が無い理由に気付いてからだった。

「……てててっ、畜生！ 一体なんだってんだ！ ここは何処だっ！」

「兄貴、大丈夫かい？」

「まーだ頭がぐらぐらしやがる！ おい、イーム！ 例の娘の匂いはまだ終えるかっ？！」

「へ、へい、ヤームの兄貴！」

イーム、ヤームと互いに呼び合った怪しい男達は、ふら付きながらも立ち上がる。

横島に轢かれ、住民たちにしょっ引かれ、近くの警察署の牢屋に気絶したままぶち込まれていた彼らは、光りのさし込む鉄格子がある壁に向かって掌を上げた。

瞬間、閃光が走り、鉄筋入りのコンクリートで出来ている筈のそれは、内部の細い鉄骨をひしゃげさせ、粉塵を吐き出しながら外側へと吹き飛ばされていく。

轟音を立てて脱獄に成功した二人。

そして、のつぽのイームが何かの匂いを嗅ぐと、それを追いかけて走り出す。まだまだ、危険は去ってはいない。そして、その黒幕さえも見えてはいなかった。

「わっ！ わっ！　すごい！　てれびじょんに色がついて薄くなってる！」

「小竜姫様危険です！　うかつに近づくと何が起こるか！」

「左のの言う通りです！　此処は一つ慎重に……」

一方その頃、小竜姫達は、何十年振りかに見たテレビが液晶になって薄くなった事に大変驚いていた。

「一体何やってんのよあんたら？」

「はっ！　そうでした、天竜姫様を早くお探ししなくては！」

数百年ぶりに管理すべき場所たる妙神山から降りてきた竜神とそのお供の鬼神達は、技術の発達とあまりの街の様子の変わり様に何処ぞのド田舎の住民さえも引くようなおのぼりさんっぷりを見せている。

店頭のTVにかぶりつくスカートを履き、いかにも現代風の格好をしたその風体とはちぐはぐな行動をしている妙齡の女性だけならばともかく、その後ろから一緒になってTVを凝視する2人の黒いスーツを来たサングラス姿の2人の男性の姿もあつては、店員さん

もびびる。

液晶テレビから引き剥がされ、気を取り直してあたりを見回すも、其処には人人人の群。

動きを見ているだけで目が回りそうでさえある。

「こ、こんな中で天竜姫様を探し出すことなどできるのでしょうか？」

「…やらなくちゃなんないでしょ？その子が危ない目にあってるって言うんだったら、さっさと保護する必要があるし」

「横島さん」

「ほーら、おキ又ちゃんもさっさと動く！」

搜索活動を再開する美神たちではあったが、何せ半径5キロに絞っただけでも一体どれほどの人間がいるのやら。

「…全く。こういうのは探偵の仕事だったの」

やはりあまりやる気が出ない美神は気だるそうに呟くと、その表情を引き締めて辺りに靈感のアンテナを伸ばし始めた。

「ふむ、とりあえず此处まで離れれば問題はないでござろう」

「……ふへ」

「どうしたでござるか？」

「……速かった」

変態かどうかは知らないが、とりあえず話を聞いた限りでは天竜と名乗った少女は危険に曝されているらしい。そして傍には気絶している追っ手らしき2人組。

ならば他にもいるかもしれない、と天竜の前にしゃがみこみ、その背に少女を背負う忠夫。そのまま茶とお菓子をくれた皆さんに二人一緒に頭を下げ、全力で離脱開始。

背中では背後に手を振りかえしているらしい天竜が落ちないように注意しながらではあったが。

屋根を越え、塀の上を走り、川を飛び越え階段を一気に飛び降りる。

そして気付けば美神除霊事務所まであと数キロといった所まで走り抜けていた。

ちなみに天竜姫、その間中何も言わずにぎゅっと背中にしがみつきながら目を閉じていた。

下手なジェットコースターよりもスピードはないが、そのかわり

慣性の法則に喧嘩を売るようなその速度域での身体コントロールは、さすが人狼、といった所か。

「とりあえず美神おねーさんたちに相談するでござる」

「……おねーさん？」

「あ、本当のおねーさんではなく、ここで拙者が世話になっている方々でござる」

「……いいひと？」

「いい人でござるよっ！ 昨日のご飯も美味しかったでござる！」

記憶を失い、今までの付き合いが無かった事にされているとはいえ、とりあえず餌と住処をくれただけで簡単に信頼するのもどうかと思う。…いわゆる餌付け。

「ここで待っているでござる！ いま呼んで来るでござるよ！」

そう言っつて半人狼の少年は少女を部屋のソファーに下ろした後、飛び出していった。

「……柔らかい」

指先でつつくと、ソファーは柔らかくその形を変える。

「……」

ぽふぽふぽふぽふ

楽しげにソファアの上で軽く飛び跳ねて遊びだすあたり、こっちの少女もなかなか太い神経を持っているようだった。

「ふーん？ 目撃情報によると、この辺りでおそらく天竜姫が見つかっただらいいわね」

電話で知り合いの情報屋に連絡を取ると、小竜姫達を連れ歩いている間に意外にあっさりと求めるものは見つかった。

蛇の道は蛇。いかに優れたGSとはいえ、人探しが得意と言う訳でもない。だが、優秀な情報屋と伝を持っているというのも一流と言うブランドの価値を高める一因となっていることは間違いないだろう。

「どのあたりですか？！」

「待つて…結構距離があるわね、車でも回したほうが速いかも」

「先に行きます！」

「あ、ちよつとっ！！」

美神の前に広げられた地図を見て、大体の方角と目印を確認した小竜姫達は美神の呼び止めにも答えぬまま、焦ったように地面を蹴って空へと飛び立つ。

「ああ、もうっ！ 迷子の子供がいつまでも同じ場所にいる訳ないじゃない！ もうちよつと待てば、追加で情報が集まるって言うのに！」



情報は時間がたてばたつほどにその価値を失うとはいえ、今回は探し物が動いているのである。あつちで見つかったからすぐに行く、と言うのは下策ではないが上策ではない。ましてや、小竜姫には美神たちと連絡を取る手段がないのだ。これでは単なる分断である。

「しょーがないわねっ！おキヌちゃん、一旦事務所に戻って車を回すわよっ！..!」

こうなってしまうば、生身では空を飛ぶことのできる小竜姫たちには追いつくことができない。しかも目撃地点に行くのならばどっちにせよ足が必要であると判断した美神たちは、とりあえず事務所に戻ることにした。

「美神おねーさん達居ないでござるなー。それでも飲んで、まったくでござる」

「.....わぁ」

「れーぞーこの中であつたおれんじジュースでござるよ。甘くておいしーんでござる」

「.....ありがとう」

「いやいや、困っている人を助けるのは武士の役目でござるからな」

事務所の中には、オレンジジュースを飲みながら談笑する子供達の姿。傍の窓から下を覗けば、さきほど忠夫が轢いたはずの2人組が今にも事務所の中に入ろうとしているところが見えただろう。

「……ま、間違いないんだな。匂いはここに入っていつてるんだな」

「よし、とつとと目標を確保するぞ」

そしてそこから更に視線を飛ばせば、こちらに向かって駆けて来る亜麻色の髪をなびかせた女性と紅い袴をはいた幽霊少女が。

そして、事務所に程近いビルの上からは、その全てを視界に収める全村をフードで覆った何者かの姿が。

第一幕の準備は、着々と整って行き。

「なんでござるか?!」

「…みつけたぜ、天竜姫様。だまってこちらに来て貰おうか?」

「お、大人しくしていれば危害は加えないんだな」

そして、開幕のベルは鳴り響いた。

事務所の中では、今、謎の二人組がその内部に突入した所であった。入ってすぐの応接室にあるソファ―と年季の入った机。そしてそこに立ちすくむ少女と、その少女を庇って立つ少年。

「小僧。邪魔をするんじゃないぞ。怪我したくないだろう?。」

「…た、たのむから大人しくしていて欲しいんだな、別に殺そうって訳じゃないんだな」

その言葉を聞き、震える少女の前に立つ少年は、

「ふざけるなでござるっ!!　そう言われてはいはい退く侍なぞ居るかっ!!」

そう吼える。

「ちっ、しょうがねえ。おいイーム、あんまりひどい怪我させるんじゃないぞ」

「わ、わかってるんだな兄貴」

その言葉に反応し、その2人は、

「人外かっ!」

角の生えた、人の形をしながらも、鱗と角、縦に割れた瞳を持った竜族へとその存在を変えた。

「しゃっ!」

それでも人であつた頃のように、短軀と長身の影からは、未だ殺気は無く、だがそれゆえに敏感な感覚を持つ少年を僅かに動揺させる。そして、その一瞬で全ては、少年の手をすり抜けた。

「…きやつ！」

「しまった！！」

長身の竜族から伸ばされた手は、その長さを明らかに倍以上に伸ばし、隙を見せた少年の後ろから少女を搔つ攫つ。慌てて腰の木刀を抜き飛び掛るも

「邪魔だ」

短軀の竜族の角から放たれた力により届かない。

「がつ！」

弾き飛ばされた少年は宙を舞い、そのまま背後のテーブルを巻き込みながら地面へ叩きつけられる。

そして、少年が再び動かないことを確認した二人組は、そのまま事務所を出て行くとした。

しかし、その眼前で黒い光りが収束した。思わず足を止め、天竜を庇うように動きながら、その光りを警戒する二人。

「…苦労。イーム、ヤーム」

「旦那ッ！」

だがしかし、場に突如として現れたのは、先ほど遠い所から舞台を眺めていたはずのフードを被った何者か。

「へ、へへへ…ご希望どおり、竜神王陛下のご息女、確保いたしましたぜ」

「……んっ」

2人組のうち、天竜姫を捕まえていたイームが怯える少女をその人物に向かって差し出す。その少女を受け取ったその存在は、その口元を妖しく吊り上げた。

「…確かに、天竜姫ご本人だ。報酬だったな？」

「だ、旦那ッ!!」

「これが報酬だ…」

左手に天竜姫を抱え、その右手に禍々しい力を集めると、それを驚愕に身を固めたヤーム達に向かって放つ。

「天竜を…はなせええええっ！」

「なっ！」

しかし、何時の間にか起き上がっていた半人狼の少年は、一足飛びに先ほどとは比べ物にならない速度で飛び掛り、腰から抜いた仕込み刀でその左腕に斬りかかった。

慌てて回避するが、不意打ちに応じきれなかったフードはその一部を切り取られ、思わずその手に持っていた天竜姫を放してしまう。そのままの勢いで刀を振るわなかった右腕で少女を掴むと、一塊になって反対側の壁に突っ込むが、その身を挺して少女を衝撃から庇う。

「無事か、天竜！」

「……ん、大丈夫」

少女を搔つ攫い返した少年は、まず少女の無事を確認し、ロープを被ったままの人物と、殺されそうになった事で一時的に動きの止まっている二人組を見渡し、ロープの方が危険度の高そうな相手と判断。

同時に、自分の力量では敵わぬ相手と言う事も、その本能が伝えていた。

「何者かは知らぬが、その振る舞い！ 其方を敵方と判断するでござるっ！ 犬飼忠夫、呐喊！」

ゆえに、横島はそう叫ぶ。

「後ろに向かってっ！！」

当然ながらやり合うには分が悪すぎるので、少女を背負って全速力で5階の窓から飛び出した。

「…え？ …はっ！ 逃がすかつ！」

「てめえっ！最初っから俺らを切るつもりだったのかつ！！」

残されたのは、あまりの鮮やかな逃げっぷりに、僅かにだが動きを止めたフードの人物と、捨て駒であることを分からされた竜族達。

「ちっ！ 屑どもが、要らぬ手間をつ！」

「舐めるなああああつ！！」

その頃になってようやく美神たちが事務所の入ったビルへと辿り着く。

その目に入ったのは、光を反射するガラスの破片と一緒に事務所の窓から搜索対象を背負って飛び降り自殺敢行中の忠夫と、その後を追いかけるように広がる、明らかに魔力を伴った爆風、そして爆音であった。

「「……へっ？」」

「ふっ、二人だと高過ぎかもしれんでござるうううっ！」

「……きゃっほう」

自由落下をはじめたお子様2人は、そのまま街路樹へと突っ込み、その根元に着地。辺りを見回せばその爆音に驚いたかどんどんと集まってくる野次馬達。

「いたたっ！ 無事でござるか天竜！」

「……ちょっと楽しかった」

「ならよしっ！」

「良くないわよっ！ 一体何がどうなってるの？！ 三行で！」

「ああ！ 美神おねーさん！

お菓子貰った！

やばそうな敵が来た！

裏切った！

でござるよっ！」

その慌てる様子と、事務所での爆発、そして背負った天竜姫。突  
つ込み所は山ほどあるも、とりあえず非常事態真つ只中と判断。

「…なるほど」

「今ので分ったんですか美神さん？！」

「全く分らなかったから後できっちり説明してもらわよっ！」

「それならなんでそんな聞き方をしたんですかぁ！」

おキヌの突つ込みをスルーしつつ、一声叫ぶと子供達に向かつて  
手招きし、隣のビルの空きテナントへと駆け込んでいく。全員がビ  
ルの中に入ると同時に既に原形をとどめていない事務所の窓から飛  
び出すロープ。

「…っちい！！見失ったか！」



しばらく宙に浮かびながら辺りを探していたが、もはや周囲には野次馬だらけで、これ以上探すには不安要素が多すぎると判断し、その姿を消すのであった。

「「ぷあっ!!」」

その姿が消え、消防車両が現場に到達し始めた頃、瓦礫の中から顔を出した2体の竜族の事は、今は誰も知らない。

そして、野次馬の中には『彼ら』の姿があった。

「ふむ、中々面白そうなことになっておるではないか、のう、マリ  
ア」

「イエス。ドクター・カオス」

「…あの小僧、久方ぶりに見てみればえらく縮んでおる。さては例のパイパーとでもやり合って、解呪しそこねたな？」

「データベース・検索……ヒット。6日前・国連・データベース内・悪魔パイパーの賞金・支払済みに・変更してあります。悪魔パイパー・敗北の確率・98.7%。先ほどの少年の・骨格・霊波調・『犬飼忠夫』との一致率・99%。犬飼 忠夫本人と・判断します」

「やれやれ。『世界』に好かれるというのも、楽ではないようじゃのう」

「回答・保留・します」

「ふはははっ！ さて、すこし、引っ掻き回してやるとするか。ちつとは楽しませてもらいたいもんじゃ！」

「イエス。ドクター・カオス」

「この程度で終わらんよなあ、小僧？」

言葉を交わした老人と、ロングコートの女性はそのまま人込みの中へと消えていく。その手に、トイレットペーパーと近所のスーパーのビニール袋が合ったのがなんともはや。

「全くもつ、えっらい散財だわ！ 事務所の中にあつた除霊道具代分、絶対に後悔させてやる！」

「臭いでござる〜。鼻が曲がるでござる〜」

「…美神さん、何でビルの地下にこんなものがあるんですか？」

空きテナントに滑り込んでみれば、其処にあったのは緊急用非難シュート。そのままその中を滑ってみれば、到着したのはいつか見たような東京地下下水道。そして其処に浮かぶ一隻のボート。

実は、事務所のほうにも入り口が合ったらしく、こっちは事務所自体がもしものことに巻き込まれた時用の、非常口の非常用。いくら転ばぬ先の杖とはいえ、此処まで用心する辺り流石と言っかなんと言っか。

「ちよつと報酬が払えない顧客からゴニョゴニョ…っとな」

「……かつこいい」

「あら、わかる？ 中々値が張るのよ、これ」

微妙に判断基準がずれている。

とりあえず非常用の缶詰を皆で食べながら、情報を聞き出す美神。この際あたりの環境にまで気を配って入られない。もう一戦やらかすためには栄養補給が必要である。

彼女の結論としては、直接追いかけていた2人組みはどうやらただの駒であり、最後に出てきたフードの人物がその黒幕である事。

そして、決定的な場面になるまで静観していただけにも係らず、最後の最後は自分の手で直接殺そうとした事。そこから導かれる答えは、相手が他人を信用しない、単独で動くタイプの、プロであること。

ということとは。

「間違いなく、もう一回来るわね。今度は本人が」

そう呟き、手に持った空き缶を握りつぶす美神。

「まず狙われるのが、貴方よ天竜姫」

「……？」

「いや、不思議そうにしてる場合じゃなくて。……まあいいわ。とりあえず、小竜姫と連絡つけたいところだけど、あの竜神様も何処行っちゃってるのやら」

ぼやく美神と、缶詰に顔を突っ込んでいた横島が、同時にその視線を下水道の奥へと向けた。

「美神おねーさん」

「……ええ、早速来たみたいね。まったく、仕事熱心なこと。皆、乗って！ ここじゃ埒があかないわ！ 見通しの聞く場所まで一気に行くわよっ！」

そう言葉をかけながら、ボートに駆け寄ると、運転席に飛び移りエンジンを始動させる。

薄暗い下水道に、獣の咆哮にも似たエンジン音が反響し、排気筒からは狼煙の如く黒煙が吐き出される。

「さあて……誰に喧嘩売ったか、教えてあげるわっ！！」

そして、それらを超えて覇気の籠った声を放つ美神。

## 第2幕 反撃、開始

「『『『疲れた』『』『』」

「犬塚の娘よ。少しやりすぎたのではないか？」

「…笑いながら白黒の車でドミノやってた犬飼殿には言われたくないでござる」

「あゝうまかったゝ。東京の店も中々だな。後でもっかい探してみるか」

「…なんであんたはそんなに余裕なのよ」

そう会話する4人がいるのは現在工事中のビルの中。とりあえず先に邪魔者を片付けようと、後から後から沸いてくる警官と機動隊

とを相手取り戦っていたのだが、いいかげん飽きてきたそこに、突然凄腕のGSとその助手が乱入。

その冷静沈着な戦法と強大な霊力でこちらを攪乱。辺りにいた警官達を下がらせた後、遠距離からのスナイパーだけを残させ助手とともに4人とぶつかり合ったのである。

とはいえ、人狼+ のほうには殺すつもりなど毛頭ない。そもそも親父達にしてみれば只遊んでいただけのようなものである。被害が全く洒落になっていないが。

だが、流石に相手も熟練したGSのようであり、気付けばいつの間にかにやら結界の中。

「しかし、たまには狐も役に立つでござるな」

「…いい度胸してんじゃない」

「喧嘩はいかんど、犬塚の娘よ」

「全くだ」

「そもその原因はあんた達でしょーがつー!!」

なんとかタマモの幻術と狐火を併用した煙幕で視界を閉ざし地面の反響音から地下に通路がある事を発見した犬塚が地面を一刀で深く切り裂き、からくも逃げおおせたものの、いまは早く此処から離れることが先決である。

「先生っ！大丈夫ですかっ!!」

「痛たた、ああ、ピート君。いや、大丈夫だよ」

「あいつら、なんて化け物じみた奴ら…。一体何なんですか、あれは？」

「あれが、本当の人狼ってやつだよ。どうやら私は遊ばれたようだね。やれやれ、こりゃ本格的に修行しないとダメかな」

そういつて地面を見下ろす唐巢神父。3、4mはある巨大な爪跡のような裂け目が、地面を深々と切り裂いて、その威力を見せ付けていた。

「むう、おかしいでござるな。確かに百合子嬢から聞いた住所は此処のはず」

「ん、どれどれ？ …間違いはないな、ここであつてははず」

「…兄上の匂いが薄いでござる。どうもここ4・5日は帰っていないようでござるが」

「…引つ越したんじゃない？」

それから暫く後、人狼＋が居るのは、現在住人の居ないアパートの忠夫の部屋の前。

いい加減面倒くさくなった彼らはとりあえずそこらを歩いていた、組長と呼ばれていた人物とその護衛から、恐か いやいや、交渉の末、衣服を強だ いやいや、快く譲って頂き、変装。刀は一応3本纏めて落ちてた代紋付の風呂敷で巻いてカモフラージュしてある。

意外にも侍姿が印象深かったらしく、警戒中の警官達に怪しまれはしたもののあっさりタマモの幻術で切り抜け、ようやく目的地に到達していたのである。

ところが尋ね人本人が不在。それもそのはず彼は事務所で爆破されたが　寝泊りしていたのだから。その生活臭も薄くなっている。

「とりあえず届け物をしておくか」

「待て、犬飼！これは　」

やおらあたりの匂いを嗅いだかと思うと、いきなり忠夫宅の扉をぶち破り不法侵入をかます犬塚さんちのおとーさん。

「父上っ！　いったいなにを　それはっ！」

そのまま部屋に突っ込んだ彼が「スパンツ」と開いた押入れの中には

「む、あやつめ、こういうことは得意でござったな」

「もぐもぐ。む、うまい」

「あー、ずるいでござる！　拙者にもー！」

忠夫が作った燻製肉がこんもりと新聞紙の上に積んであった。

「「「もぐもぐ。うまうま「「「」



「…あんたらねえ」

結局何しに来たんだお前等、とタマモは思った。

「やあ」

さてさて、再び彼らの登場だ。彼に言わせれば楽じゃないのかもしれないが、もっと大変なのは相對するものだろうがね。

ソレは運命。

ソレは流れ。

ソレは意思。

世界が愛した者だから、世界はそれに運命を投げかける。  
世界が恋した彼だから、世界はそれを導き押し流させる。  
世界に愛された存在は、その意思で全てを世界を変える。  
世界が求めた存在は、否応無くその形を進化させていく。

トラブルメーカー？

惜しいね、その呼称は。トラブルを作るんじゃない。

トラブルが魅せられて自分から寄っていくのさ、ああいうのには、  
ね。

だからこそ彼の周りには『集まる』。

人も、神も、魔も。

さてさて、『今度』の『彼』は一体それらに何を魅せてくれるの  
やら。

今宵は此処まで

良い夢を。

## 第十四話（前書き）

遅くなりました。  
そして長くなりました。

## 第十四話

「一体これはどういうことなのですかっ！」

「さあ、全く分かりませぬ…美神殿達に、何かあったのでしょうか？」

「そんなことは見れば分かります！ 鬼門達は周辺の搜索を！ 私  
はあそこを見えます！」

「はっ！」

天竜姫の情報を基に探しに出た小竜姫達が目撃情報のあった場所に到着した時、既にそこには天竜姫どころか人影すらも碌に無く、辺りには静寂が広がるばかりであった。

それでも一縷の望みにかけて探し回るも全くの無駄骨となり、肩を落としながら一旦美神の除霊事務所に戻ってみれば、そこにあるのは無残にも黒く煤けた残骸と、その周辺を走り回る警察官と消防士達、そして僅かに立ち上る白い煙。

しばらく啞然としていた彼女らだが、小竜姫は二人の鬼門に指示を出すと、周囲の人間達に見つからぬように注意を払いながら、ビールテープの張られ、封鎖されたそこに飛び込んでいく。

「…酷い」

数時間前の姿はそこに無く、あるのは只黒く煤けた瓦礫ばかり。

美神と対面に座ったソファームも、おキヌがお茶を入れていたポットも、ただの黒焦げなゴミとして転がっている。

ふと、火災現場には不釣り合いな気配を感じた。

「…これは」

僅かな残り香だった。

しかし、それは火事場の匂いに紛れ込んでいたが、彼女にとっては見逃す事の出来ないものであった。

高位の幼き竜族の気配と、邪悪な力ある者の気配。

「一体何者が…」

その気配に集中していた小竜姫の背後から、瓦礫を突き崩す音とともに何かが這い出てくる。武神らしく凄まじい速度で反応し、神剣を構え振り向く小竜姫。果たして現れた者は。

「いてて…ふう、何とか助かったようだな」

「あ、熱かったんだな…」

イームとヤームの竜族凸凹コンビであった。

あちこちに火傷を負い、爆発に巻き込まれたのか服は破け、その身体にはいくつかの傷を残してはいたが、生来の丈夫さのおかげか動く事に支障はないようだ。

この先も、その首が繋がっていればの話ではあるが。

「何者ですか。名を名乗りなさい」

「「うわっ!」」

掛けられた冷たい声に顔を上げた二人の前に神剣を抜き、完全に戦闘態勢に入っている小竜姫の表情の無い顔が入る。

巨大な竜気と、その名を知られた妙神山管理人のいきなりの登場に仰天する2体。

「「げっ!」」

今の立場はどう考えても不味い。そのまま回れ右をして逃げ出そうとするが、眼前の武神はそれをやすやすと見逃すほど甘くは無かった。

「そこより一步でも動けば、そのそつ首叩き落されるものと思いなさい」

首に添えられる冷たい感触と、それより冷たい小竜姫の言葉。本気である。マジである。首は落とさなくても手足の一本くらいは持つていく。そんな気迫の籠った視線だった。

「「あう」」

こりやもうダメだ、と両手を高々と上げながら、死出の旅を覚悟した彼らを責められる者などいはいない。

身体全体に感じる冷や汗に塗れた服の感触とは別に、二人とも股間のあたりにちよつと冷たい感じがしたのは、触れないでそつとし

ておいてほしい事であつた。

「つまり、その『怪しいフードを被った竜族のお偉いさんらしき人物』に騙された、という訳ですね？」

「…はい」

「馬鹿ですか貴方達は！」

「ひいっ！！」

怒声とともに苛立ちを堪えながらもなんとか抑えていた竜気が再び爆発する小竜姫の目の前で、土下座しながら、ひたすら萎縮するイームとヤーム。

「…ふう。それで、何で今更こんな所に？」

ここで怒りを爆発させてもしょうがない、となんとか己の心を宥める事に成功した小竜姫が、その竜気を収めたのを感じ、恐る恐る顔を上げる二人組。

小竜姫の質問に対し、顔を見合わせた二人だったが、彼女の神剣が地面に勢いよく突き刺さる音に飛びあがり、慌てたように話した。

「そっ、それは」

フードを被った怪しい影が窓から飛び出した直後。すぐさま意識を取り戻した二人組は脱出を考えたが、窓の下には人間が一杯。

ビルの内部に逃げ出そうにも、そちらは既に何に引火したのやら火の海であり、どこかに良い出口は無いか、と探してみれば、衝撃で崩れたらしい本棚の裏に緊急脱出用らしきモノ。慌てて飛び込むもビルの一フロアを吹き飛ばす衝撃は伊達ではなく、既に途中で崩れ落ち頭は通る位の隙間はあるものの行き止まり。下手に崩せば二次災害があるために手も出せず。

しょうがないのでほとぼりが冷めるまで隠れていた、というわけである。

そして二人は吐かされる。

なぜ、こんな事をしたのかを。

下っ端とは言え、竜族のはしくれであり、それなりに力を持った彼らが、どうしてもわざわざリスクの高い、竜神王の娘の誘拐などと言う、成功してもその後の人生に展望の描けない、しかも失敗すれば即処刑間違いなしの犯罪を犯したのかを。

まあ、それ自体は仕事をさぼってたら上司に首にされたので逆恨みしてました、というなんとも情けないを通り越してどうしようもない理由であつたが。

そして、その話を持ってきたのが誰なのかを。

「やはり黒幕が居ましたか」



「へ、へい、その靈格といい、まんざら嘘ではない、と思ったもので、すっかり…」

「…よいでしょう。貴方達、理由はともかくとして、まだ更生の余地があります。こちらに協力しなさい」

「許して頂けるんぞ?!」

「あつ、ありがとうなんだなつ!!」

「これからの働き次第では、ということです! 『鬼門! 聞こえますか!』」

性根が甘いのか、二人組に利用価値を見出したのか。それともこの際使える者は何でも使おうと言う美神的なものに染まりでもしたか。

司法取引を持ち掛け、その二人を手駒にくわえる小竜姫。そのまま鬼門達に念話で話し掛ける。

『鬼門? どうしたのです?』

が、返事が無い。

「ど、どうかしたのかな?」

「いえ、おかしいですね…鬼門たちと連絡が「あいづらなら外でおねんねしてるよ」っ!」

小首をかしげながら、外の様子を見ようとした小竜姫。

だが、その言葉の半ばで彼女の姿は瓦礫を巻きこみ吹き飛ばされ、イームとヤームの視界から一瞬で外されていた。

そして、小竜姫の立っていた場所の背後に、先程までの話に出ていたローブ姿の妖しい人物がたっている。

おそらく小竜姫を襲ったであろう武器、刺又を振りぬいた格好の人物は、瓦礫の向こうに姿を消した、しばらくは動けないであろう彼女を鼻で笑ってその武器を何処にかへと収める。

「あ」

「…ふん。音に聞こえた武神も、不意を衝かれればこんなもんさね」

「貴様はッ！」

「・・・こんな所に隠し通路かい。さて、鼠を炙り出すとしようかねえ」

ヤームの声を、いや二人の存在自体を歯牙にもかけぬまま、先ほどまで彼らが隠れていた通路に向かって片手を上げた。

その服の袖から滑り出るようにして、大口を持ったヘビにも似た化物たちが何匹も飛び込んでいく。

「さ、さつきは、よ、よくもやってくれたんだな！」

今気付いた、と言うように、ローブの人物はそこで漸く二人に目を向けた。

視線に温かみなど欠片も無い、まるで蛇のようだ、と二人は思う。

が、しかし、その視線がすうと細められ、蛇のようだ、と言つのは間違いだったと二人は悟る。

眼前にいるのは、紛れも無く化け物だ。

「・・・雑魚どもが意外にしぶとい。いや、利用価値はまだあるか？」

何かを思いついたようにそう呟くと、そのフードを体から落とす。中から現れたのは、予想もしなかった姿で。

「「　　っ！！」」

そして彼らを驚愕させた。

それより数分後

地下下水道をエンジン音をけたたましく響かせながら、滑るように進む一隻のボート。船上にあるのは美神たちの姿。そしてそのボートを追いかける先ほどフードの人物が放った大口の化物たち。

「ビッグイーター?!　それにしてもあの数つて反則じゃない?!」

ビッグイーターと呼ばれた化物たちの、その数、およそ50匹。周囲の状況と足手纏いと保護対象のことを考えればとりあえず。

「三十六計逃げるにしかず！スーパーニトロターボブーストチャージャー、オンッ！」

怪しすぎると思うか、安全性に全く気を使っていないのでは？と思われるような装置のレバーを引っ張ると、案の定爆音とともに吹っ飛ぶような加速で下水道を駆け抜けるボート。

「うひゃああああ！！！」

「……きゃっほう」

「よしっ！追いついてこれないみたいね……このまま一気に東京湾まで抜けるわよっ！」

「美神さん！前っ！」

しかし下水道の出口には鋼鉄製の柵がある。

いくら多少の改造をほどこされたボートとは言え、流石に鋼鉄で出来た柵に真正面からぶつかっても平気、と言う訳ではない。

むしろこちら側があっさり砕け散って、そのまま魚のえさになるのが関の山だろう。

しかし、美神は余裕の表情で、ボートに備え付けてあった小さな引き出しを引っ張り、中から小ぶりなりモコンを取り出した。

そしてそれを見せつけるように心配げな声を上げたおキ叉に見えるように、目の前を塞ぐ柵に向けて操作して見せる。

「大丈夫よ、ちゃんとスイッチ一発で開くようにしてあるわよ」

が、開かない。

何度押しても開かない。

美神がリモコンを操作した後も、柵は依然としてその存在を示していた。

「あれ？ …おキ又ちゃん、乾電池とか持ってないわよね？」

「美神さー！ーん！！！！！」

## 東京湾

静かな夜であつた。辺りには船の姿も無く、近くには観光スポットも無く倉庫が広がるばかり、だった。突如爆音と閃光がその静寂を切り裂くまでは。

「備えあれば憂いなしっ!!」

「どこからそんなもの手に入れたんですか?!」

「お金があれば大抵のものは手に入るのよ、おキ又ちゃん」

「へー、『からしにこふ』とか『きれいもあ』っていうんでござるかー」

「……うん、そう」

バズーカを肩に担いで未だ異常な速度ですつとばす船上にて勝ち誇る美神と、その姿に思わず突っ込むおキ又。その後ろでは、簡易な武器庫と言うか兵器庫となっている船の倉庫を覗いたお子様二人がなにやらこそこそやっている。

教育に悪いとか言う前に、誰も何故か手慣れた様子で武器を扱いながら、何処となく得意そうに横島に説明する天竜には突っ込まなかった。

突っ込めなかったとも言いが。

星もあまり見えない夜空の下、東京湾に飛び出したボート。そして

『キシヤアッ!!』

空から降り注ぐ閃光と、それに吹っ飛ばされるビッグイーター。

「美神おねーさん！あそこっ！」

忠夫が指差す方を見てみれば、そこにあるのは左手で閃光を放った後の小竜姫と。

そして、先ほど事務所に襲撃をかけた竜族たちの姿。

だが、それは

「2対1とは卑怯な！！」

どう見ても小竜姫と彼らが激しく空中戦を繰り広げている姿だった。

だが、地力の差か。見ている内にあっさりと小竜姫が2体をその手に持った神剣で撃墜する。海に落ちた竜族たちを眺めた後、そのまま手招きし、岸を指し示す小竜姫。

「さっすが武神ねー。なかなかやるじゃない」

美神たちは、こちらの最強戦力と無事に合流できた事で安堵しながら、その誘導に従って近くの倉庫街の棧橋へと船を着けるのだった。

「無事でしたか、天竜姫様」

特に2対1であつても怪我をした様子も無く、安堵した様子で天竜に声を賭ける小竜姫。

「どうやらそつちも無事だったようね、小竜姫。いきなり居なくなつちやうから、どうしたのかと思ったわよ」

「ご心配をかけたようで…」

舞い降りてきた小竜姫を正面に、美神、おキヌが並び、更にその後ろに天竜と横島のお子様コンビ。

「さ、天竜姫様こちらへ。早く妙神山へ戻りましょう」

美神とおキヌの間をすり抜け、駆け出した小竜姫は、勢いそのままに天竜の前に立ち、手を伸ばす。言われるままにその手に向かつて歩きだす天竜。何処となくほっとした様子であり、やはり小さいその身にはこれまで逃避行は負担となっていたようである。

しかし、その歩みを止める者が、進み出ようとした天竜の手を握って放さない者がいた。

「…どうかされましたか？」

「犬飼君？」

小竜姫と美神の問いに答えず、ただ鼻を鳴らして辺りの匂いを嗅ぐ忠夫。

「美神おねーさん」

「なに？」



「小竜姫様とやらは、なんでござるか？」

「さつきも言ったでしょ？ 武神よ、竜神族の、ね」

「…天竜からは、良い香りがするでござる。お日様の様な、暖かな匂いでござる。」

「……」

不思議そうに横島を見る小竜姫。

だが、その表情の裏には、微かにではあるが苛立ちが見え隠れしている。

そんな小竜姫の変化と横島の言葉に、美神は僅かに腰を落として神通棍に手を伸ばす。

「ですから、私が迎えにつ」

「だが！ お主には…全く、何も匂いが『無い』のでござるよっ！」

叫び、木刀でなくその中の仕込み刀を抜き放ち、小竜姫に向かって構える忠夫。

そしてその言葉を聞くと同時に懷から神通棍を取り出し輝かせる美神。

「…何者よ、あんた」

「み、美神さんまで、一体何を仰るのですか？！」

「その子は人狼よ。その直感と超感覚、知らない訳が無いわよね？」

「りゅ、竜神族の言葉が信じられないと?！」

「あんたが　本物ならね！」

そう言い放ち小竜姫に向かって神通棍を振り下ろす。

「チイツ！」

が、小竜姫は舌打ちすると、腰から剣を抜き放ち、美神によって振り下ろされた神通棍と頭の間の際どい所でその刃を差し込む事に成功した。

「正体を現すでござる!!」

が、流石にその体勢で背後から追撃に放たれた横島の一撃を防ぐ手段は無く、その身に刃を受けながらも、強引に身を捻って跳躍して避けた小竜姫は　いや、その姿は既に小竜姫ではなくなっている。

「小僧がつ！　一度ならず二度までもっ！」

偽装をといた、紫色の長髪を棚引かせた蛇の印象を受ける女へと変化していた。

数十分前、元美神除霊事務所

「　　っ！！」

彼らを驚愕させたのは、フードの中から現れたその姿。

「ふふふ…どうだい、そっくりだろう？」

その姿は、確かに先ほど昏倒し、未だ瓦礫の中に姿を消したままの小竜姫そのもの。

「な、なんのつもりだっ！」

「さあて、ね。あんた達を惑わせる為かもよ？」

「ふ、ふざけるんじゃないんだなっ！」

「さあ、眷属達も目標を見つけたみたいだし、せいぜい踊ってちょうだい　」

そう言い残し、飛び立つ小竜姫の姿をした何か。

「追っぞ、イーム！」

「わ、分かったんだな！」

そして、それを追いかけて飛び立つ竜族達。

彼らはそのまま東京湾上空まで飛び続け、突然聞こえた爆音に海上を見下ろせば煙を突き破りかつ飛んでくる一台のボート。

『キシヤアツ!!』

そしてその後ろから這い出てきたビッグイーターたちを振り向きざまの掌からの閃光で吹き飛ばす小竜姫の姿をした何者か。

「っ！ なんのつもりだ！」

「これであいつらにとって、『味方に見える』のはどっちだろうねえ？」

「しまった！」

黒幕の手のひらで踊らされたことに気付いた彼らは、懸命にその事を伝えようとするも、それを見逃す相手ではない。

伝えに行こうとしてもまず妨害が入る。しかももし足止めに成功し、美神達に真実を伝えようともし、果して彼女達が信じてくれるだろうか？

つい先ほどまで、天竜を追いかけていた彼らを、まさか本人もいないのに小竜姫には許しをもらったから、と言えばホイホイ信じてくれるような相手でもあるまい。

小竜姫の顔をした誰かが、美神達に騙されるな、と言ってしまえばそれまで。後は敵を倒すのと同じ手順で、口を塞がれて終わりだ。八方塞がりではない。

「ち、畜生がぁああああっ！！」

数が多かろうと所詮は下っ端竜族。相手が悪すぎたせいもあって、奮戦空しく退場させられた。

これで準備は整った。あとは何食わぬ顔をして天竜姫を攫ってしまえば、向こうが気付いた時には既に遅い。

後に残るのは顔も、正体も分からぬ何者かが天竜姫を殺害したと言っ事実だけ。地上の竜族たちと竜神族たちとの関係悪化は間違いない 筈だった。

半人狼の少年がイレギュラーと成りさえしなければ。

「力づくってのは性に合わないんだがねえ…此処まできたらそんなことも言ってられないか」

「で、黒幕さん？ いい加減諦めて、名前ぐらい名乗ったらどうかしら？」

「ふふふ…諦めて？ いい冗談だ。その気概と、小僧の意外さに免じて名乗ってあげようじゃないか」

その言葉とともに放たれたのは、圧倒的なまでの、小竜姫に匹敵さえする巨大な魔力。

「…やば」

「私の名前は」

眩きとともに一瞬で、神通棍を油断せずに構えていた筈の美神の懷に飛び込み、言葉の続きを耳元に囁く。

「メドーサってのさ。冥土の土産に、持って行きな」

いつそ優しささえ籠ったようなその眩きとともに放たれた、先端が2つに分かれた槍は、明確な殺意とともに美神を一撃で吹き飛ばした。

「あ、がはっ！」

「ほう？今のを喰らってたかが人間が生き延びるとは、ねえ」

吹き飛ばされた美神は、そのまま倉庫の壁に叩きつけられ、沈黙する。息はあるようだが、もはや動ける状態にない。そして残ったのは、戦闘能力の無い幽霊少女と竜神の姫。そして。

「グルアッ！！」

狼のごとく、その刃を携え、こちらを見てさえいないメドーサに向かつて飛び掛る半人狼の少年。

「ふん。思い切りはいい。その意気も悪くない。だが 弱い」

視線も向けぬままの横薙ぎの一閃。一振りで美神と同様に吹き飛ばされ、彼女より軽い身体は容赦なく地面と触れ合いながら、壁の様な止める物も無かった事もあってか夜の暗闇の向こうへと消えていく。

地面に叩きつけられ、只の一撃で体のあちこちからは出血し、お

そらく骨も何本か持って行かれている。

「ふん」

暗闇の向こうであつても、完全に動く気配が無いのを感じ取つて鼻で笑つたメドーサは、その歩みを残つた2人へと向ける。

「や、やらせません!!」

「……」

その前には、怯える竜神の少女と、それを庇うように手を広げて立つおキヌ。その数メートル前で立ち止まつたメドーサは、誰にも聞こえない声でそつと呟いた。

「あんだ、幸せ者だねえ」

痛い。

体中の骨が軋んでいるし、切り傷、擦り傷なんて数える事さえし  
たくない。

痛い。

胸の辺りが熱い。多分2、3本は折れてる。

イタイ。

一撃。只の一撃でもうボロボロだ。速い、重い、鋭い。そして容赦の無い、だが殺す気は無い一撃。

怖い。

視界は歪んでいる。頭がふらふらする。もうこのまま目を瞑ってしまいたい。

死にたくない。

勝てる気がしない。あんなのに勝てる訳が無いじゃないか。

「……いいさ。纏めて死にな。これだけたくさんお仲間が居れば、死出の旅路も怖くなんて無いだろう?」

相手が悪かったんだ。いいじゃないか、一矢は報いた、良くやったよ。

「美神さん！横島さん！　だれかつ！」

死にたく無い。

死にたく無いんだ。

痛いのも、怖いのも本当に嫌だ。

「……助けて、犬飼君！」

それがどうしたあつ!!

「お、おおおおおおおおおっ!!」



「…存外にしぶとい。いいさ、纏めて死になっ！」

地を這いながら、土を噛み、爪を立て、もがく様にして立ちあがる。

傍らに落ちていた刀を力の入らない手で握りしめ、駆け出す。

身体が痛い。足がふらつく。痛みで視界が歪む。違う、痛みでは無く、何時の間にか零れていた涙で視界がけぶる。

怖いから、痛いから、死にたくないから、涙が溢れる。

だが、もう涙は続かない。続かせない。

繰り出される槍が見えた。死、その物の様な鈍い輝きが顔に向かって飛んでくる。

この距離、この速度、そしてこの身体。

避けられるか、と問われれば、無理だ、不可能だと答えただろう。

無理は通らない。道理は引つ込まない。

戦いとは常にパワーゲーム。強い者が勝ち、弱い者が負ける。当然で、当たり前で、自然な事だ。

天秤を傾けるなら見合った錘が必要であるし、未だこの身はその錘には足り得ない。

だが、だからこそ吼える。

「死んでたまるかつ！！ 拙者が死んだら！ 誰が護る！！！」

そして、パワーゲームだからこそ、死に物狂いでもがく者だからこそ　チャンス女神はその前髪を掴む機会をくれるのだ。

『良く吼えた』『良く言った』

『ならば』

『見せよ、未熟者』『証明せよ、小僧』

いつか聞いた、銃声が後から来る超長距離からの射撃音。

その一撃は忠夫に向かって繰り出された槍を粉碎し、まるでメド―サを避けるように、だがその足元に確実に着弾し、そこから粘度の高い煙を吐き出す。

そして、魔弾の音はもう一つ。

「がはっ！」

その一発が、忠夫の胸に直撃する。

しかしその体を貫く衝撃とは裏腹に、弾頭は忠夫の体中に、金色の光を放ちながら拡散する。

「…間接部・ロック・解除。火器管制・停止。望遠モード・停止。改良型・ロングレンジライフル・『テュポーン』・異常・なし。通常モード・復帰」

「ふむ、聞くまでも無いが、着弾はどうじゃ、マリア？」

「サーチ 敵性存在・武器・破壊成功。攪乱・成功。特殊弾頭・着弾・確認。指示遂行率・100%と・判断します」

「よしよし。満月の光のみでできた月光石と、我が錬金術の粹を集めた解呪薬。うまいこと効いてくれるじゃろ」

「ドクター・カオス。引き続き・ダイレクト・サポート・可能ですが？」

「いらんよ」

「しかし」

「大丈夫じゃよ。そんなに必死にならんでもいいわい」

「ノー。ドクター・カオス。これは今後の・状況を鑑みて「いつになく饒舌じゃのう、マリア？」ソーリー・ドクター・カオス」

「まあ見ておれ。あの程度で死にやせんだろうが、今回ののはちとハズレがきついからのう。只のご褒美じゃよ、この前の件の、な」

「理解・できません」

「冷たいのう」

「くそおつ!!」

流石『ヨーロッパの魔王』謹製。その煙幕がメドーサを数十秒も惑わせたのは驚くべき、といつてもいいだろう。そして、「彼」にはそれだけあれば十分であった。

メドーサがなんとか煙を吹き飛ばし、辺りを確認してみれば既に誰の姿も無い。美神も。おキヌも。天竜姫も。横島も。

「つつあゝ！ 痛え！ あの爺、ぜってーわざとこんな使い方しやがったな！」

「……誰？」

「おう、気付いたか天竜」

「……犬飼君？」

「おつ、良く分ったな。ぴんぽ〜ん！ 大当たり〜」

「……でも」

「まあまあ、俺にも実際よくわからんし。とりあえず、賞品はあのおねーさんに帰ってもらったので、どうかな？」

「なぜだっ！ たかが小僧一人で全員を逃がせる筈がないっ！」

狂乱したように辺りの建物に魔力砲を打ちながら、ひたすら飛び回り搜索するメドーサ。

「どこだ！！ どこにい があっ！！」

その横手から、突然飛んで来た鉄骨は、狙いバツチリメドーサに直撃する。そしてその衝撃に動きを止めたメドーサに向かって次々と飛来するコンクリートの塊や、マンホールの蓋、ベンチや工具のたっぷり詰まった工具箱。

「があああああっ！！」

とつさに手に持つ折れた槍でいくらかは打ち落とすも、全方位から機関銃のごとくぶっ飛んでくる巨大な質量。支えきれぬ訳もなく、なすすべもなく、只、打ち据えられる。

「ふざ……けるなああああっ！！」

魔力を吐き出し、周囲に落ちた破片と、未だに飛んでくる壁や鉄の塊を跳ね返す。

が、何時までも出来るわけが無い。辺りにばらまく様に魔力砲を打ち込み、元を断たんと移動しながら連射する。

が、止まらない。

避ける先に飛んでくる。それを避ければ今度はさらにその先を読むように飛んでくる。何とか打ち払って反撃の魔力砲を飛んできた方向へ打ち込めば、しかし全く見当違いの方向から散弾銃のように砕けたコンクリートの群れが高速で飛んでくる。

徐々に足場は失われ、だが空中へ逃げようとすればその飛び立つ為の一瞬の硬直で狙い澄ましたように痛撃を加えられ、体勢を崩して追い込まれ、再び魔力の放射で無理やり時間を稼がざるを得ない。

まるで、獲物が突然猟師に変わったような、無茶苦茶ながらもじりじりと体力と魔力を奪われる展開になりつつある。

しかも、確かに、非常識だが、誰かが投げている。しかも縦横無尽に倉庫街を駆け回りながら。だが、なぜ足音がしない？ いや、心配が無い？

「さて、問題です」

「どこっ      いや、誰だ貴様あつ！！！」

「人狼にとって、狩りは日常。しかし、相手は凶暴で凶悪な野生の獣。仕留めるのに有効な手段の一つとは？」

「出て来い！ 姿をあらわせえっ！！」

何処からとも無く、いや、周り全てから聞こえてくるような、そんな声。その戯言が喋る間も、ひっきりなしに飛んでくるコンクリートの群。よく見れば、周辺の頑丈なはずの倉庫の壁や、地面が凄まじい勢いではがれていつているのが分かったろう。もはや打ち返す余裕も無く、ひたすら避けつづけるメドーサ。気付けば辺りにはそこらじゅうに障害物ができている。

そして、そのばかげた弾幕が唐突に途切れる。

「答えは、相手を興奮させて、こちらは気配を完全に消して」  
「っ！！！！」

「急所を一突きで仕留める、ってな感じで」

その言葉は、背後から、耳元に囁くようにして語られた。

『狼の牙。そは何の為に？』

「獲物を狩る為、じゃないのでござるか？」

『では、獲物は何の為に？』

「えーと？」

『なぜ我らにはこれほどまでに強力な牙がある？』

「護るため、かな？」

『それでは足らぬ。そも一つの答えであるが、まだ足らぬ』

「じゃあ、何が足らないんだ？」

『護る為の牙をお前は知った。ならば、それを持って、次の牙を見

つけてみせる』

「牙？」

『人狼としての、身体強化。月の力を受けた霊力の増幅は、お前の力を、人狼の力をさらに高めるだろう』

「…殴り合えてか？」

『さあな？』

それはまるで夢の中で。パイパーの呪いが月の力となんだか怪しい力で無理やり解けていく中で。いつか見た影法師との会合であった。横島本人は気付かぬうちに、その身体は子どもから少年へと、元の姿へと成長していく。

彼の夢の記憶は、其処までで途切れている。

「…何者だ？」

メドーサの声には、既に先程までの激昂も、戸惑いも無い。完全に冷静さを取り戻しつつも、後ろにいる誰かを振り向く事無く、その気配に向かって声を賭ける。

「さあね？」

「人狼だと言ったな？ さっきのガキの仲間か？」

「どうだろね？」



だが、対する背後の声にも起伏は無い。だが平坦なままに、どこかふざけた調子があるが、同時に『こいつは何かをやる』と感じさせるような決意があった。

「答える気は無し、か」

「とりあえず、今日はこれでお開きにしません？」

「……殺さないのか？」

「まだまだ切り札持つてるでしょ？ 互いに痛い目見る前に、ここらが引き時だと思いませんか？」

「…ふん、狸が」

「人狼だつての」

その会話を最後に、あつさりとその姿を消すメドーサ。

「さっすがプロ。引き退きも鮮やか。ああああ、えー乳や。嫁に誘ったら来てくれんな！？」

そう呟いたのは、青年へと姿を変えた犬飼忠夫だった。

「わっはっはっはっは!!!見たか、マリア!!!」

「横島さん・いえ・犬飼忠夫・及び・人狼のデータライブラリの・修正を・求めます」

「いらんよ。あれほどの膂力と速度、並みの人狼では不可能じゃ」

「彼は・半人狼では？」

「そうじゃよ？ただ、『いままで霊力も使わずに普通の人狼並みの力を出しておった異常な個体』、じゃがな」

「画像データ・保存・プロテクト…完了」

「いやいや、えーもんみせてもらうたわい。さて、帰るぞマリア」

「イエス。ドクター・カオス」

「わーっはっはっはっは!!!」

ヨーロッパの魔王と、鋼鉄の少女を見送るのは、只、半分に分かれた月のみ。

ふと美神が眼を覚ますと、そこは彼女がGS見習い時代にお世話になった部屋のベッドの上だった。

はつきりとしなない頭を押さえようと手を上げると、引き攣られるようにして脇腹のあたりから激痛が全身に走っていく。

「いたたたた！」

「美神さん！ 気付いたんですね！ 動かないでください…！ 今、手当てしている所ですから」

「おキ又ちゃん？ ええと…っ！ あのクソお婆はんッ！！ いただだっ！！」

「あああ！だから動かないでくださいってば！」

「「小竜姫様あああっ！」」

「…なんですかもう、うるさいですよ、鬼門。あ、あれ？ ここは…っ！ 天竜姫様は？！ いだだだだっ！！」

「あああ！小竜姫様も大人しくしてくださいってば！」

「…っ。うっ。体中が痛いっすっ」

「横島さん！ 起きたんですか！」

一夜明けて唐巢神父の教会にて、あの後事務所を失った美神たちを運んだ忠夫はひとまず見知った彼を頼り、事情を話した後彼女達

を預けて小竜姫達の搜索を開始。

ボロボロになった服の着替えやら手当やらをおキヌにお願いし、ついでに天竜にもおキヌを手伝うように頼んだ横島は、説明を求める事も無く救急箱やベッドの準備に教会へ駆け戻っていく唐巢神父とピートに頭を下げたい気持ちになりつつも、姿の见えないままの者達を放っておくわけにも行かないと急いで走りだした。

それこそ神速といった速度で、彼女達を背負るやら首にしがみ付かせるやら肩を掴ませるやらとした非常に奇妙な塊が、深夜とはいえ都内を駆け巡ったのだから怪談の1つ2つ発生していそうである。

そして程なく事務所跡地で回収、そのまま駆け戻った所で、今度はガス欠に陥った忠夫がダウン。元が彼の力とはいえ、いきなりのその身体能力に体の方が慣れていなかった為か全身に激痛が走り、気絶。

全員目が覚めた時に最初に放った言葉が冒頭のもの、となる。

程なくして、朝の礼拝を済ませた唐巢神父がまるで病院の一室と化したようなその部屋に入ってくる。

「おや、皆起きたようだね」

「あら、先生。すみません、いきなりこんなみっともない格好で」

「いやいや、かまわんよ。それよりも、一体何があったんだい？」

美神君どころか、小竜姫様まで居られるじゃないか」

「それが、私にも何がなんだか…小竜姫様が此処まで運んでくれた

のかしら？」

「いや、横島君だよ。昨夜遅く、いきなり飛び込んできてね」

体のあちこちに包帯を巻いた美神に対し、手に持っている朝食代わりの果物　近くの住民のおすそ分けである　を駆け寄ってきた天竜姫に渡しながらそう答える唐巢神父。

「へ？横島君、ですか？」

「そうだが？」

「おつきい方の？」

「そもそも小さい横島君を私は見ていないのだがね？パイパーにのろわれたという話は君からも聞いていたが、以前見た横島君だったよ。ほら、あそこ」

「へ？」

そう言われて見てみれば、そこには確かに元に戻った横島。

「……ん」

「いや、天竜。自分で食べられるから……」

「……ん！」

「……あーん」

「  
」

なんだかほのぼのとした空間を作り上げていた。

体がまともに動かないので、ベッドごと意外に元気そうだった鬼門たちに運んでもらい、ソファーに座りなおした忠夫を正面に美神と小竜姫。

忠夫の座っているソファーの前にあった机を挟んで置いてあった1人掛けのソファーを動かして、右に唐巢神父、左にピートが腰掛ける。ちょうど机を囲んだ形になる。鬼門達はベッドに体を起こした小竜姫の横に控えているし、おキ又はこちらも同様に体を起こした美神の隣に浮かんでいる。天竜といえば、何故か忠夫の膝の上。

懺悔を求める神父の視線が痛かった。

「横島君、犯罪だよ？」

「横島さん…そんな、子供に手を出すなんて。自首してください」

そう苦しげな声で忠夫に語りかける唐巢神父とその弟子ピート。

「て、天竜姫様?! あああ、また不祥事が――!」

「お、御氣を確かに!」

頭を抱えて取り乱す小竜姫と、その横で慌てる鬼門達。

「おキ又ちゃん。すぐに警察に通報…は、色々面倒くさいわね。神通棍と玉葱を」

「はいっ！」

そして冷静に見える美神がおキヌに指示を出す。迷わずそれに従うおキヌ。

「ってちよつと待ていっ！！ 俺が一体何したツちゅーんや！！  
…お、ありがと天竜」

「……」自分の姿をよく見てみなさい「……」

「あうあうあう」

「……」

慌てて突っ込むも、膝の上に天竜を乗せ、彼女手ずから剥いたでこぼこの林檎を「食べて」とばかりに突き出されている格好である。しかも天竜姫の表情が満足げであるというこれらの素因は、忠夫の発言権そのものを著しく磨り減らしていった。

しかし忠夫もこのままでは犯罪者の烙印を押される所か、正面の上司と膝の上の少女の護衛によってこの世から消されてしまう。

「ち、違いますよ！天竜は友達であって「天竜姫に対して無礼なっ  
！」 うわわっ！」

そう否定の言葉を発するも、小竜姫が何処からか取り出した神剣を一挙動で確実にこちらの頭部に向かって投げつけてくる。

「あつぶなー！」

「か、片手で止めますか今のを…」

「……お」

ぱちぱち

正に目にも止まらぬ速さで投げつけられた其れを、完璧に見切つて柄の部分を握りとめる忠夫。啞然とするのはむしろ其れを見ていた周りの者達であつた。

無理に動いたせいで体中に走つた激痛に必死に痛みと涙を堪える小竜姫と、横島の膝の上で拍手する天竜姫は除く。

「いや、実は」

とりあえず場の空気が変わった事を利用して、ようやく昨夜の説明に入る忠夫であつた。

「あの後、そんな事になつてたのね…」

「くっ！ 武神ともあろうものが…」

メドーサに言い様にしてやられた美神と小竜姫たちは悔しげに呟きながら布団を握り締める。

「え」…じゃあいままで霊力無しでアレだけの事やってたんですか？！」

「君はつくづく非常識だね…」



こっちはこっちで頭痛を堪える仕草をする唐巢達。

「あ、あの、ありがとうございました」

「……ありがとう」

「いやいや、俺もおキ又ちゃんと天竜の声が聞こえなかったら頑張れなかったわけだし」

「それは私達のために頑張ってくれたってことですよね？だったら、やっぱりお礼を言わないと……」

「……その通り」

そしてなんかフラグでも立ったか？というような反応をするおキ又と天竜姫にひたすら戸惑う忠夫。

「「わしら、結局何もしてないのう……」」

そして部屋の隅っこでその巨体を縮めて黄昏れる鬼門達。

「でも、よかったよ」

「ええ、皆無事に帰れた訳ですし、横島さんのおかげですよ」

「ん？ああ、それもあるけど」

そう呟いて、皆を見回す忠夫。

「…あんな馬鹿みたいに強い奴から、護れたんだなあって思ってた」

その視線には、確かに誇りと、そして大きな喜び、それよりも大きな安堵がある。

「……あ」

最も近くでその表情を見た天竜姫は、心の底から湧き出てくる感情に戸惑いを感じていた。

「へえ…いい顔をするようになったじゃないか、横島君」

「へ？」

「どうやら、君にとっても得る物の多かった一夜となったようだね」

そう言い残し、唐巢神父は立ち上がる。

「さて、これから依頼が入っているのですね。夜まで出かけさせてもらうよ。行こうかピート君」

「はい、先生」

そして彼らはそのまま出て行った。

「さすがつすね」

「え？　なにがですか？」

「夜まで帰ってこないってことは、それまでに唐巢神父に聞かれちゃまずいことがあるんなら相談しておいて、それから協力できることがあるならそれを話してくれれば協力するって事だよ、おキヌちゃん」

「へー、そうなんですか横島さん」

「…あんだ、ちょっと変わった？」

「へっ？」

神父の心遣いを弟子である美神と同じ程度に正確に受け止めた、ということに少々納得はいかないものの、それでもやはり子供になる前とはちよつと違う。そう考えると、やっぱり変わったようにも思ふし、前からそうだったようにも思えてくる。

成長した、というのだろうか。

「それで、どうやってあのメドーサって名乗った奴を追ひ払った訳？あんだがなんかやったんでしょ？」

「メドーサっ?! 竜族ブラックリストの中でもトップクラスの奴じゃないですか!」

「あー、やっぱりそんな奴でしたか。ええ乳しとったのに残念やない」

「で、死にたいのか喋るのかどっちかにしたらどう?」

「……むー」

「横島さん？」

正面と真下から突き刺さるような視線を受け、おキヌの輝く黒い笑顔を直視した忠夫は慌てて意識を過去の映像から引き戻す。

「ええつと、どうやってといわれましても…ただのハッターなんすけど」

「…「はあ?!」「」」

実際の所、忠夫が背後に回ったとして一撃で、しかも反撃の暇さえ与えずに仕留めることができるか、と言われれば答えははっきりと「ノー」である。靈力に目覚めたとはいえ、その力はいくまでも身体強化。内向きの力なのであるから、靈的な存在である魔族に対して効果的な攻撃を繰り出せたか、ということ無理だ。

身体強化で可能なのは拳や足を使った物理的な攻撃のみ。相手が靈的な存在である以上はこちらも靈的な攻撃を行なわない限り致命傷とはなりえない。つまり、あの時点で忠夫は手詰まりになっていたのである。

「ですから、こっちにもまだまだ切り札はあるぞー、って思わせることで、なんとか痛み分けていう形で引いてもらったようなもんですよ。逆に相手が損得勘定のできない馬鹿だったら死んでましたねー」

「…なんと云う無茶を」

「…馬鹿はあんたよ」

そう呟き再び頭を抱える美神と小竜姫。

「なんせ初めて使ったわけですからねー。おかげでもう体中ボロボロ」

忠夫の体、本当の所は結構ヤバイ状態である。今も人狼としての超回復が働いているとはいえ、昨日酷使した足は動かすことさえ辛い状態。いくら軽いとはいえ天竜姫も結構な負担になっているはずであるが、そこを顔に出さない辺りが意地という奴である。

「……ごめんなさい」

「天竜？別に気にすることはないぞ」

「……でも」

「え、え、え？」

その言葉を聞いていたたまれなくなったのか、瞳から涙を零す天竜姫。それを見て慌てて周囲に助けを求める視線を飛ばすが、誰も彼も見ても振りをするばかり。諦めたように「ふう」と溜息をついた忠夫は天竜姫を抱えなおし、自分の目線と合わせて優しく語りかけた。

「女の子が泣いちゃだめだろ？俺は天竜が笑って居られるようにがんばったんだから、さ」

「……でも」

「天竜はまだまだ子供だろ？ ……それなら、大人になってから恩返しでもしてくれればいいさ」

言葉とともに涙を拭き取る忠夫。その表情に嘘偽りの色は一欠けらもなく、ただ、照れくさそうに笑っているだけ。

「……あ」

彼の手から伝わる暖かさ。言葉に籠った気恥ずかしさ。表情に表れる優しさ。そんなものを受けた天竜姫の心から溢れきった感情は頭の角の部分から零れ出し、彼女の頭に新たな角を生み出していた。ぼとん、と落ちた天竜の角と、目の前で一瞬で生え換わった新たな角。

状況を理解できない横島達の眼に、言葉も出ないほどに驚いて口を開け閉めしている小竜姫達が見えた。

「へっ？」

「……これで大人」

「へっ？」

「りゅ、竜神族の角の生え変わりは大人になった証とされます。生え変わりとともに神通力などが使えるようになるのですが、こんなに突然……」

「……だから、皆に恩返し」

そう言葉を残し、忠夫の膝から降りていった天竜姫は、そのまま小竜姫のいるベッドの傍らまで歩いていく。

「……小竜姫、心配かけて御免なさい」

「いつ！　いいえ、そんなもつたいないっ！」

「……我は誓い告げるもの。武を司る竜の癒しをもって、天なる竜の謝意とする」

頭を下げた天竜が、体を起こし告げた祝詞に導かれるように、その体から舞い上がった光の粒が小竜姫に降り注ぐ。

「こ、これは…」

全ての光の粒子が小竜姫に降り注ぐと共に、小竜姫の体からは全ての傷が跡形もなく消えていた。そのことに驚く小竜姫を余所に、今度は美神の所に歩み寄る。

「……ボート、楽しかった。ありがとう」

「……いいけどね」

そんな理由なのか、となんとなく納得のいかない表情であるものの、美神もその言葉を受け止める。

「……我は誓い告げるもの。強き乙女の癒しをもって、天なる竜の感謝とする」

再び天竜の体から舞い上がった光の粒子が、小竜姫と同様に美神

の傷を癒しきる。そして最後に忠夫の所に駆け寄った天竜姫はソファに座る忠夫の横に飛び乗る。

「お、俺にもやってくれんの？」

「……護ってくれて、ありがとう。遊んでくれて、嬉しかった。だから」

にこりと笑ってそう告げると、再び天竜姫は祝詞を唱える。

「……我は誓い求めるもの。人と狼の狭間の者への誓いを持って、天なる竜の想いとなれ」

「「「ああああああつ！！！！！」」」

「へっ？」

祝詞が終わると同時に、忠夫の頭を引き寄せて、その唇を奪った少女は、にこりと微笑むと再び忠夫の膝の上に陣取った。

後に残されたのは何が起きたのかわからないと言うか、わかりたくないと言った様子の忠夫と、その様子を見て「不祥事です不祥事です不祥事です……」と頭を抱えて呟きつつける小竜姫。

相変わらず部屋の隅で膝を抱えている鬼門達。「あらあら」と果てしなく恐ろしい笑顔を浮かべながら横島達を眺めるおキヌ。それを見て怯えてベッドの上で体を縮めながら「あっちゃー」という感じで顔に手を当てる美神。そしてにこにここと笑う天竜姫だった。

「……また」



「お、おう」

「全く、えらい散財だわ」

「…竜神王陛下になんとか報告すればよいのやら」

「あらあら」

「…俗界の女性も変わったのう」

何があつたかは定かではないが、真つ青な顔をした忠夫を前に天竜達は別れの挨拶をしていた。

「ええと、それでは、今回のご協力に感謝します」

「感謝はいいから報酬の方お願いね」

「はあ…」

「……落ち着いたら迎えに来る」

「いや、あの、犯罪者になっちゃうんですが」

「へへ、まだ犯罪者ではないとおっしゃる？」

「お、おキ又ちゃん？」

最後の最後まで嵐を巻き起こしながら、彼女達は空へと消えていったのであった。

「さて、事務所は無くなっちゃったし、次の事務所を探さないかねー」

「どうするんすか？」

「ま、とりあえず適当に不動産屋でも当たるわ。あんたも今日は帰んなさい」

「うーっす」

答えると忠夫は家路に着く。その後姿を見送っていた美神に、背後からかけられる声。

「GSの 美神 さんで すね？」

「そうだけど？」

「 事務所は お入用では ないです か？」

ロングコートと顔を隠すつばの広い帽子。

片言と言つか、途切れ途切れに聞こえる言葉。

どうしてこうも厄介そうで、でも靈感的にも断るに断れないような依頼ばかり続くのか、と美神は一人こめかみに指を当てるのだった。

「兄上、遅いでござるなあ」

「おなか減った」

おおっと、クリーンヒット！ボールは転々と転がって

ぱたぱた。  
× 3

シヨート素早く送球っ！アウトッ！判定はアウトですっ！

ぱたぱた・・・ぱた。  
× 3

「む、やはりやきうは楽しいでござる忠夫は里では見せてくれんかな」

「そつやって尻尾を振るから怒るんだろーが」

「しかし、こればかりはどうしようも

カキーン！

おおきいっ！これゝは、おおきいっ！

ぱたぱたぱた。x3

「しかし、もう肉は無いのでござるか」

「お前が食べ過ぎだつて犬飼」

「いや、お前の方が食べておる」

「そんなのどつちでもいいでしょ……」

「いや、これは」

突然、人狼の親父達の額に閃光が光る（イメージ映像）。

「な、なんでござるかこの悪寒はっ！父上っ！」

「……久しぶりに感じたな、犬飼」

「ああ。これは間違いなく」

「な、なによ？」

「「チョウロウが現れた」」

「長老でござるか？」

「逃げるぞ！犬飼っ！シロもその娘も遅れるな！」

「この気配：あちらから来るぞ。拙者が殿をつとめる」

「ちょっと、説明しなさいよ！」

「心配するな！見れば分かる！！」

「きたぞっ！」

遠吠えと共に現れたのは、半獣化した、人狼の里において、長老と呼ばれる老いた人狼であった。

「きくさくまゝらああああっ！！」

「ひいっ！！」

「後ろに向かって全速前進！！」

「な、なんでござるか（なのよ）あれはっ！！」

「…長老が本気で怒ると結構危険なのだ」

「この前は、里が半壊したからなあ」

「あ、あれは天災って言ったではござらんかああああっ！！」

「ああ。そりゃ嘘だ」

「ちちうええええええつ！！！！！」

「まゝてゝええええええええつ！！！！！」

窓を蹴り破つて逃げ出していく4人組を追いかけて、なまはげもかくやと言った様子の長老が追いかけていく。その暴虐の嵐の後、程なくしてコンビニで買い物を済ませた家主が帰ってきたが。

「な、なんじゃこりや……」

後に残されていたのは、扉のぶつ壊れた玄関と、溜め込んでおいたはずの燻製肉が一欠けらも残さず消滅している開け放たれた押入れ。所々に巨大な爪跡の残った畳や壁と、部屋の中に残された、黒いオーラを放つ風呂敷包み。

「ゴッド。俺なんか悪いことしましたか？」

彼は呆然と立ちすくむしかなかった訳で。

「やあ」 再び此処を訪れてくれたようだね？そんな君に、今回はこんなお話だ。

平行世界は知っているね？

そう、今自分が存在している時間軸を一本のレールとするならば、その隣に無限に並ぶレールたち、というのが近い表現かな。

レールはその先方で分岐していて、その世界はどんどん分かれていく訳だ。

このレールの分岐点、もちろんそれこそ無限に近くある訳だが、時に大きな分岐にぶつかることがある。そのとき、そのレールの上には必ず、世界に選ばれた存在って言うのが、いるんだよ。

世界が減びるかどうか、というまさしく己の死活問題に対して世界が干渉する唯一の方法。それが「選ぶ」ということなんだよ。彼らは世界の鬼札。時に救い、時に滅びの要因とさえなる。

それでも世界は選びつづける。彼ら、という表現はちょっと違うが、世界と言うのも中々難儀しているのかもしれないよ？

だから、そう。

そんなに憎むものじゃないのかもしれない、とだけ覚えておいてくれたまえ。

ふふふ、それでは

よい夢を。



## 第十五話

天竜達が帰り、夜が明けて次の日の朝。

早朝の新鮮な空気の中を、瘴気とさえ言えるような暗い雰囲気を纏ったまま歩いてきた横島を迎えたのは、教会前の掃除をしていたピートだった。

虚ろな目のままふらふらと促されるままに教会内に入った横島は、傷を治してもらったおかげかもう普通に動けるようになり、身体の調子を確認がてら事務所のあった場所まで様子を見に行っていたおキ又と美神が帰ってきてても教会の祭壇の前に体育座りのまま、殆ど動きを見せずにいた。

唯一動いているのもと言えば、その口元ぐらいだ。

「……ぶつぶつぶつ」

「…おキ又ちゃん？あのうつとーしいのどうにかなんない？」

「まあまあ美神さん、空き巣にあった直後なんですから」

「…俺の肉俺の家俺のTV俺の服…」

誰が声を掛けてもまともな反応を見せず、十字架を見上げて呟き続けていた横島だったが、その呟きを何とか聞き取ったおキ又によると、どうも家が空き巣にでもあったようで帰宅するとひどい有様だったらしい。

それもその筈、家に帰り着いた忠夫を向かえたのは、半壊した扉の立てかけてある玄関と、荒れに荒れた部屋の中。爪跡に引き裂かれた人狼の里で着ていた普段着に、替えの服2着。そして壊れたというか原型を留めていないTVと、空っぽの食料庫。

彼は崩壊した部屋の窓と玄関から朝日が差し込んで来るまで呆然とした後、ふらふらと歩きながらいつの間にか教会に到着。

そうしてそんな様子の横島に慌てた様子で声をかけるピートと、騒ぎを聞きつけた美神たちが忠夫を発見するも、昨日見た姿とのあまりの落差に固まるばかり。ようやくGS協会に事後報告を済ませ、肩を叩きながら帰って来た唐巢神父もどうしたものかと腕を組んで溜息一つ。

平日なのでミサ等はやって無いが、たまに来る客人や近隣住民が、もし、教会の中で救われない様子で十字架を見上げている少年を目撃した日には、神父の立場としては色々和不味かろう。

そんな彼らを余所に、祭壇の前まで歩み寄った忠夫は、荒らされた部屋の中にただ一つ残されていた遺留品らしき物、怪しすぎる包丁を懐から取り出すした。

啞然とした様子で見守る他の面々の前で、彼はそれをおもむろに振り上げる。

「…斬る」

一言だけ呟き十字架に歩みはじめた。まるでその背中では処刑上に向かう聖人のようだった、とか誰も言わないが。

「「待てー！ー！！！」」

たまらないのはキリスト系の技を使う唐巢神父とその弟子ピート。なにせいきなり弟子の助手が教会の象徴を叩ッ斬ろうとしているのだ。

たとえ偶像崇拜が禁止されていたとしても、やはりそれは教会に通う人々にとっての心の拠り所。いきなり破壊されては困ったなんていうレベルの問題ではない。

それより何より。高いのだ、アレは。

「お、落ち着きたまえ横島君！」

「一体全体何を考えているのですか？！」

「はなせええええっ！！ 武士の情けでござるううううっ！！」

慌ててしがみ付く神父達を引きずりながら、一步一步目標に近づく忠夫。伊達に人狼の血を引いちゃいない。成人男性2人くらいなら軽々である。

「これは復讐でござるうううっ！！ 神は死んでいるんだから良いでござるうがああああ！」

「…教会関係者の前で吐く台詞じゃないわね」

「そんなに大切なものでもあったんでしょうか？」

頭を抑えながらその様子を眺めるだけの美神と、のほんと呟くおキヌ。

「拙者のお肉の仇イイツ！！！」

「それ、うちの教会とは絶対関係ないだろうっ？！」

「とりあえず落ち着いてください横島さああああん！」

「…ほんとに何があったのかしらねえ」

「横島さん、微妙に幼児退行起こしてますねー」

「今の拙者は神でも斬れるぞおおっ！！！」

「「斬るなあああっ！！！」」

要するに八つ当たりである。

ひとまず錯乱する忠夫をフルパワー神通棍でシバキ倒し、「何かあったのなら家だろう」と当たりをつけた美神が様子を見に行つて見れば、そこにあったのは荒れ果てた忠夫宅。

「……」

「これは…酷いですね」

「…なんでこんな金の無さそうな所に？」

結局全く原因不明ではあったが、面倒くさくなって引き摺ってき

た横島を部屋に放り込み、置手紙に「明日朝十時教会前集合」とだけ書いた紙を額に張り付け。とりあえず元に戻るまでは放置して教会にてもう一夜を過ごすことにした美神たちであった。

次の朝、教会に訪れた横島は会話もできたし眼も虚ろではなかった。

しかし、なんだか雰囲気荒んでいた、とだけ言っておこう。

内心鬱陶しいと思いつつも、まあ役に立たない訳ではないのだから、と昨日横島が引きこもっていた一日の内に現金一括で購入してきた車に乗り、事務所の崩落に巻き込まれながらもなんとか無事だった霊具の数々と一緒に目的の場所へ出かける一行であった。

「とりあえず、昨日の妙な奴の紹介してきた建物は此处ね」

「ほえ〜。おつきな建物ですね〜」

「大きいには大きいけど…大分ガタがきているみたいよ。まあ、場所自体は一等地だから手を入れれば結構」

瞬間、美神の靈感に違和感が走る。

「お待ち            して            おりました。美神除霊            事務所の皆さん

」

その声に振り向けば、確かに昨日この話を持ち込んできた全身を覆うコートに顔が見えないほどに大きな帽子を被った人物の姿。

こちらに危害を加えようと言う意思は感じられない事に美神は警

戒のレベルを一段落とす。

が、何時でも即対応できるように緊張の糸は切らない。特に、突然誰も居なかった筈の場所に出現するような怪しい人物が相手ならば。

こちらが警戒しているのを嘲笑うように、或いは全く気にも留めていないように、その人物は相変わらず途切れ途切れの聞き取りにくい言葉で話しかけてくる。

「約束の時間ちようどのはずだけど？…それより、本当なんでしょうね？」

「ええ。この建物の 最上階に 権利書を 用意してあります」

「で、そこまでたどり着ければこの建物が私の物って訳ね」

「御自分 達の力で とってこられたら という条件付ですが。それでは 御武運を」

最後の一言だけを明瞭に喋り、そのコートは中身が無かったかのように地面に崩れ落ち、そしてその中からは案の定何も見つからなかった。

「いやに靈波の単純な奴だったわね・・・まるで人工の幽霊みたい・・・」

「人工の幽霊、ですか？」

「ええ。私も実物を見たことは無かったけど・・・戦前、そういった研究をしていた人がいたって話よ」

「ええっ?!」

「確か名前は　　渋鯖男爵、とか言ってたかしら」

振り上げば、そこには先ほどまでは無かった存在感を誇示する洋館。まるで先程まで居た人物が乗り移ったかのように、平坦な靈波を発し始めたその建物が、軋むような音を立てた。

その音の発生源を探して視線を下げれば、ぼつかりと開かれた扉が手招きするかのように僅かに動いている。

「ふん、さつさと入って来いつてか。面白そうじゃない、行くわよ、あんた達!」

そう言い残し颯爽と開かれた扉に歩み寄る美神。

「横島さーん!　美神さんが呼んでますよー!」

「…へーい」

そして未だ立ち直りきっていない忠夫を引きずりながらそれを追いかけるおキヌ。

こうして旧渋鯖男爵邸の冒険は幕を空けたのだった。

玄関

扉をくぐって中に入ってみれば、確かにそこら中痛みは見られるものの、ほとんど埃の積もっていない床。

「…ふん」

辺りを一通り眺めた後、鼻を鳴らし歩みを進める美神と、その後続く忠夫達。

「返すつもりは無いってわけね」

そして全員が扉をくぐると同時に閉じる玄関。おそらくこの屋敷の裏方は、簡単に開くような仕掛けはしていないだろう、と思ったが、美神は頭を一度振るとその考えを捨てる。

何せ相手の目的がなんなのかは不明だが、こちらの目標は最上階の権利書を獲る事。

目的地までの邪魔はされるかもしれないが、こちらが無理だと判断して逃げ出したら、それはそれで特に何もされずに脱出する事が出来るような気がしたのだ。

「いや、結構簡単に開くかもしれないわね…まあ、ここまできたら、進む以外の事をするつもりはないけど」

玄関から視線を外し、再び前を見ればそこには何時の間にか一体の全身鎧の姿。

「…へ？」

『第一の関門です。その鎧を倒してください』



機械的な音声が何処からともなく響き渡る。その残滓が消えると同時に動き出す全身鎧。

その鋼の小手に包まれた手が腰に下げたロングソードを抜き放つ。

瞬間、風を切り裂いて鋭い剣閃が美神に襲いかかった。慌てて後方に飛びのき、しかしそれでは足りずにもう一度横っ跳びに避けると、先程まで美神がいた場所の後ろにあつたソファアが真つ二つに切り捨てられた。

その鈍重な見かけからは思いもよらない連続攻撃に、慌てて神通棍を伸ばし応戦にはいる美神。

「プロの剣捌き?! 冗談じゃないわよ! 横島君!」

そちらが剣士ならこちらは侍、とばかりに横島の名を呼ぶが。

「ぶつぶつぶつぶつ」

その横島は恨み辛みがぶり返して来たのか、壁に掛けられた不気味な絵に向かってひたすらに現実逃避気味に愚痴っている真つ最中であつた。

「あああ! まだやってたんかつ!!」

美神が意識の外に置いていただけで、彼は玄関をくぐってからずっとそつである。

「きゃあっ！」

突っ込みで意識を逸らした美神の眼前すれすれで通り過ぎていく  
前身鎧の剣。

「や、やばっ！                      横島君！」

「横島さんっ！      美神さんが危ないんですってばあー！」

が、どうにも反応が芳しくない。おキヌがその肩を掴んで必死に  
揺さぶっているがまるで根を張ったように動かない。

どうも軽くトラウマと言うか精神に傷を負った状態になっている  
ようで、外部からのなまかな刺激には反応しづらくなってしまっ  
ているようだ。

あるいは急に目覚めた霊力のせいもあったかもしれない。それま  
で無かった物が急に、という感覚を一晩中、或いは目覚めてか  
らこれまでもずっと慣れない感覚、違和感として感じていたのだから、  
空き巣にあつたと言うインパクトと混じり合って本人も大きなスト  
レスを感じていたのだろう。

いままでストレスなんていう物とは無関係な生活を送ってきた本  
人と、どう見てもストレスなんて感じそうにない、お腹一杯ご飯食  
べて寝れば元氣フル充電になるような性格としてとらえていた周囲  
が気づかなかつたというのが致命的だったのかもしれない。

が、現状ゆっくりとカウンセリングを受けさせている時間も余裕  
も無いのだ。

「ぶつぶつぶつぶつ」

だから、美神はとりあえずストレス発散がわりに生贄でも差し出してみる事にした。

「あんたの部屋を荒らした犯人は、この屋敷の一番上にいる…」

美神の一声が、忠夫を変えた。

それまで横島の肩を揺さぶっていたおキ又さえ気付かぬうちに、美神にもかろうじて見えるくらいの速度で、横島の姿が消える。

最早残像でさえ捉え切れるか、と言った速度で美神の横を駆け抜けた横島は、その懐から一本の包丁を取り出し、眼前の西洋鎧に躍りかかる。

不意打ち気味の横島の攻撃にも全く怯む様子を見せずに剣を振り下ろす西洋鎧。

が、その剣が地面を抉るよりも、その身体が間接ごとにバラバラにされて吹き飛び、壁に叩きつけられて甲高い音を立てる方が早かった。

「ふ、ふふふふふふふふっ！！」

「かも、しれないわよー。って聞いちゃいないわね」

「み、み、み、美神さんっ！！！！」

いつの間にやら再び取り出した怪しすぎる包丁は、そのぬらりとした輝きを一層増しながら忠夫の手の中で目覚め始めた。そして彼がふらり、と地面に突き刺さった金属で出来ている筈の剣の隣を通

り過ぎると同時に、それは見事にばらっばらとなつてあたりに散らばった。

「俺の肉とＴＶと服と部屋をカエセエエエツ！！！！」

「…壊れたかしら」

「横島さああああん！！」

残像を残し、床でなく壁さえ走りながら特攻する忠夫を見送りながら、「ちよつと失敗しちゃった、かな？」などと他人事のよーに呟く美神であつた。

程なくして。

上のほうから響いてくる爆音という以外に表現の仕様の無い音と、狼の遠吠え。

「あれ？」

「…美神さん。この建物、残つてると良いですね」

「ちよつと待った　　！！」

まさか此処までとは思つていなかった忠夫の身体能力に、計算が狂つた感じの美神。ちよつと幾つか関門とやらを壊した後で力尽きてくれるはずだったが、何気に建物を更地にしそうな勢いである。慌てるのは謎の声。

「あ、あの方は一体なんなんですかっ！！」

「うちの助手」

『どんな助手がここまで破壊活動を繰り広げるって言うのですかー  
！！！！』

「あんなのが」

「さすが横島さんですよー」

半分諦めたように、残り半分で呆れたように呟く二人。若干遠い目になっているのは御愛嬌と言うやつか。

だが、二人揃ってそう言いながらもじりじりと玄関に向かって後ずさりを始めている辺り、この建物の末路を予想しており、それが二人とも一致しているのは間違いないだろう。

『あああああつ！！！！ ダメだこの人達いいいつ！！！！』

気付くのが若干遅かった。

『ああつ！！ それは男爵が大事にしていた高価な壺 「ちよつとまったあ！！！！」』

しかし、謎の声の一言が、その場の空気を一気に変えた。

それまで重心が後ろにかかっていた美神の姿勢が、まるで駈け出す直前の肉食獣のように前傾になり、霊力が体中から噴き出し始めている。

そして何より、眼が¥マークだった。

「壺?! いくら位の?!」

『相場は知りませんが、歴史的にも貴重な                    ああっ!    その絵  
画だけは――!!』

瞬間、横島に引けを取らない、いや、先程の横島を超える速度で  
消える美神。

再び響く爆音と、今度は幾度か聞いた狼の悲鳴。

「美神さん……」

大体何が起きたか察したおキヌは、ほろりと涙を零しながら、と  
ある半人狼の冥福を祈る様に疲れた溜息を吐いたのだった。

『…もういいです。これ以上破壊を広げる前に、とつとつその椅子  
に座ってください』

おキヌが美神とミンチ寸前の忠夫に追いついたのは、最上階のお  
そらく最も中心部。そして疲れたように投げやりな声が響く。

周囲はボロボロに破壊しつくされており、辛うじてその部屋の中  
心部にあったデスクと椅子が無事なくらいだった。

横島と美神は知らないが、本来ならばここには一歩歩くごとに年  
齢を重ねさせる特殊なトラップが仕掛けられていた。

が、美神と追い立てられた横島が扉をぶち破って侵入した事によ

り、声の主はトラップを発動させる為の靈力を切ったのだ。別に彼らの事を思ってたのではない。

中心部たるこの部屋を彼らの破壊行動から守る為、残り少ないエネルギーをトラップに回すよりも、防御と修復に回さないと、彼女と彼女が老いて動けなくなる前に自分の存在自体が消えてしまつかもしれない、と思ったからだ。

そして結果として回せるだけのエネルギーを回したにもかかわらずのこの部屋の荒れようであり、二人を止めてくれたおキヌに言葉では言い表せないような感謝の気持ちを抱えつつも、それを超える疲れの籠った声で漸く落ち着いたらしい二人に話しかけたのだった。

「え？ あら？ いつのまにこんな所に…」

「っは！ここはどこっすか？！」

そして限定的とはいえ靈力に目覚めた忠夫は いや、おそらく関係ないが あっさりと復活を果たす。どうやら現世復帰も果たしたようだ。

「ええと…ここに座ればいいのね？」

『そうですよー。それが玉座ですよー。これで貴方はこの事務所のマスターですよー』

拗ねたような声と共に、いかにも倒壊寸前だった建物は光と共に新品同然へと変化していた。まあ、仕掛けも関門も全部ぶっ壊されりゃあそりゃ拗ねたくもなるだろう。

「いいのかしら？ もうちょっとこう、なんかトラブルとか無いの？」

『これ以上私の中を引つ掻き回さないでくださいいいいいっ！！！』

どこか不満げな美神の問いに、悲鳴が答えとして帰って来た。

「…まあいいか」

そして美神は忠実な僕と、あらたな拠点を無事手に入れたのだった。  
めでたしめでたし。

『一体何処で間違えたんだろう…』

はじめの一歩目からである。

その頃、とある空き巣の四人組。

「ぜえ、ぜえ」

「はっ、はっ、はっ」



「も、もう走れないわよ・・・」

昨夜遅くに襲撃を受けた人狼三人と狐の少女は、そのまま逃避行を開始。何時の間にかあたりは鬱蒼とした森となっていた。

「ち、父上は何処でござるか？」

「さ、さあ、拙者も逃げるのに必死でござったからなあ・・・」

「きゅっ」

しかし、どうやら犬塚父とははぐれた様子である。

「で、此処は何処でござるか？」

「わからん。本能の命ずるままに走ったでござるからなあ」

「…あんた達ほんとーに無駄にタフよね」

まだ疲れが抜けていないのか蹲ったまま動けないタマモに対し、人狼達は既に息も整い普通に会話している。

「とりあえず、この森を…む、何奴っ！」

がさっ

「あれー？ポチさんにシロちゃん、何時里に帰ってきたんですかー？」

「「「へっ？」「」」

本能は本能でも帰巢本能だったようだ。そして

「み〜つ〜け〜た〜ぞおおおっ！！！！」

「……げっ！」「……」

結果報告。チヨウロウ 人狼二人と狐一人。その後、力を使い果たし気絶。

シロ 振り出しに戻って一回休み。

タマモ 同上。

ポチ なぜか無傷。

名も無き人狼 ポチに盾代わりに使われかなり痛い目。  
トラウマ。

一方もう一人の人狼。

「ふう、なんとか逃げ切れたよーだな。お、いい匂いじゃないか」

犬塚父は他の皆とはぐれた後、いまだ東京にて潜伏中。

「こりやまた懐かしい。赤提灯の屋台かぁ。もう無いと聞いていたんだが」

「うおおおん〜」

「…ふう、まなーのなっていない奴はいるもんだなあ」

そしてその前にはいわゆるガード下の赤提灯。その椅子に座って浴びるように酒を飲んで涙を滂沱と流しているのは、頭にやけに立派な角を持った、良い歳した渋めの長髪のおっさんだった。

「やあ」　そろそろこの世界も少しずつレールに沿って動き出したようだ。

前にも誰かが言ったと思うが、大きな分岐点の前には必ず「選ばれた」者がいる。

では、世界は、どうやって彼らを選ぶと思う？

そして、世界に選ばれた者と、世界に愛された者は常に同一人物じゃなければいけないと、何時から決め込んでいた？

ああ、やっぱり、驚いた。

さてさて。その答えは見つかるかな？

それでは良い夜を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3056y/>

---

月に吼える

2011年11月24日23時35分発行